
No.0 !

軽い雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

No. 0 !

【Nコード】

N0840X

【作者名】

軽い雪

【あらすじ】

一般学生村雨は、トラック事故に合い死亡。

それは「神の失敗」というテンプレで、転生させてもらえる事に。

彼が望んだのは、4つの能力だった。

——狭間に生きる者の力を。

オリ主による、悲劇崩し。

彼は、どのように原作メンバーを助けていくのか…？
今小説は作者の処女作です。完結まで連載出来るよう頑張るので、
生暖かい目で見守って頂ければ幸いです！

オリ主　ぷろふいーる！（前書き）

すっげー今更なプロフィールですw

（2011. 11. 25）

オリ主　ぷろふいーる！

【身体設定】

f i r s tネーム…村雨　陸兎　（むらさめ　りくと）

2 n dネーム…ヴェン

身長は全盛期で185cm辺り。

体重は平均で髪の毛は金髪、目は蒼。

趣味は読書、ノーバディーの観察、悪戯

好きな食べ物はお米、ソーめん、肉等。後、枝豆。嫌いな物はスイカ、メロン。

好きでも嫌いでもないのはゆで卵。

性格は基本的テンション高め…だが、一目を気にするタイプ。

血液型はO型。

暑さに弱く、寒さにそれなりに耐性がある。だが心が熱い奴は大好き。

駆け引きが苦手で、交渉事が特に苦手。

ある程度は目の上の人に対して敬語を使うが、
本人でも気づかない内にタメ口になってたりする。

分け隔てなく交流を持つよう心がけている。

お節介でもあり、大の驚かせ好き。

特に、『冷静、クール、イケメン等の顔が驚愕に浮かぶのを見ると』
達成感が浮かぶらしい。

ただ、時々加減を間違えて遣りすぎてしまう事もある。
遣りすぎた場合には、ちゃんと謝っているようだ。

テンションの上がり下がりで口調が変わる。

主に作者のせいだと言われているが本当のところは解らない。
(ネタに走ったり：等。)

【能力】

「13 organization mode (十三機関モード)」

十三機関のメンバー全員的能力を使用する事出来る。
メンバーの能力を使うには、格メンバーの？称号？を唱える。

No. 1 「狭間の指導者(The leader of an

interval)」属性：無

タイプ：接近型

No. 2 「魔弾の射手 (Freshooter)」属性：空間

タイプ：遠距離型

No. 3 「旋風の六槍 (Whirlwind Lancer)」
属性：風

タイプ：近接&遠距離どちらとも可

No. 4 「いてつく学究 (Chilly Academic)」
(今小説では凍てつく学究。) 属性：氷

タイプ：援護、若しくは遠距離型

No. 5 「静かなる豪傑 (Silent Hero)」属性：土

タイプ：接近型

No. 6 「影歩む策士 (Cloaked Schemer)」属性：
幻

タイプ…特殊型

No. 7 「月に舞う魔人 (Luna Diviner)」 属性…月

タイプ…接近型

No. 8 「踊る火の風 (Flurry of Dancing Flames)」 属性…炎

タイプ…中距離orゲリラ型

No. 9 「夜想のしらべ (Melodious Nocturne)」 属性…水

タイプ…遠距離型

No. 10 「運命を賭す者 (Gambler of Fate)」 属性…時

タイプ…特殊

No. 11 「優雅なる凶刃 (Graceful Assassin)」 属性…花

タイプ…接近型

No. 12 「非情の妖姫 (Savage Nymph)」 属性…雷

タイプ…ゲリラ型

No. 13 「めぐりあう鍵 (Key of Destiny)」 属性…光

タイプ…近接&遠距離可

基本的には、能力の無駄遣いになりそうではある。

能力についての制限は、重複不可ということ意外は特にない。

闇の回路については封印させてもらっています。…そのときになったら使えるかも。

あくまで、能力が使えるだけなので、基本スペックを鍛えなければならぬ。

因みに不老という大きいおまけ付き。流石に不死ではない。

つまりは、防御力は能力不発動状態の場合は一般人と変わらず、銃弾が頭に貫通すれば死ぬし、

運が悪ければ、食中毒でも死ぬ場合がある。

「ノーバディー創造」

ゲーム内の敵キャラ、「ノーバディ」のあらゆる種類を創り出せる。能力レポートの同じく詳細が記載されているので目を通してもらいたい。

合計含めて15種類近くが存在している。

一体一体が強力で、異能による攻撃以外（物理攻撃等）は攻撃が通用しない。

ノーバディ等の説明に関しては、[Wiki](#)や小説内で説明している巻があるので
そちらを参照してください。

「アーマー・テラ有能力」

通称、鎧の男。

長身の鎧の姿になり、キープレードを變形させて戦う。

『KH2FM』で間違はなく最強を誇る裏ボスで、キングダムハーツ史上で一番「戦って楽しかった」

と評判である。残念ながら、作者にはトラウマしか残っていない。

「ヴァニタスの能力」

ヴァニタスはラテン語で「空」と言う意味。

それが理由なのか、主人公「ソラ」と瓜二つの顔をしている。ラスボスの一人。

純粋な闇の心から生まれた存在で、闇の力を振るう事が出来る。

能力使用に至って、闇を自ら取り込む必要がある。
絶妙なバランスによって本当の力を振るう事が出来るが、少しでも
闇に押されれば、理性が薄くなる。

No. 0 「??????」属性…?

現時点では不明な能力。

「ノーバディ」らしくない属性…？にする予定。

能力レポート（前書き）

2011／11／21

ランキング、No1～4までの能力詳細記載。

..／12／3

能力について少し追加記入

能力レポート

【簡易機関強メンバーTOP3】

一位 No. 1

二位 No. 3 / No. 5

三位 No. 13

(公式設定)

【機関メンバー能力／その他詳細】

No. 1 称号…狭間の指導者
属性…無 武器…エアリアルブレード 配下ノーバディ…ソーサラー

機関のボス。十三機関を束ねる人物である。

実力は機関内最強で、声優があのだ本さんである。(バルバトス、ドラゴンボールのセル等の声と同じ)

彼に逆らった者は容赦なく下級ノーバディにされてしまう。(主にダスク)

被害者が居るかどうかは解らない。でもなぜか機関メンバーはそれ

を信じる。

NO. 8もその一人で、「奴に逆らったら、ダスクにされちまうぞ！」と言っていた。

因みに、その時の反逆者はNO. 13だが、最終的にダスクにされる事はなかった。

武器「エリアルブレード」は、機関メンバーでも祐一、未来的な武器。

見た目スターウーズの「ライトセイバー」である。

剣などにある、柄はなく、手からそのまま赤い光が棒状に伸びている。二刀流。

原作では主人公にライトセイバーがあたっても切れるような事はなく、打撃に近いようだった。

（そこで切れれば確実に？Z？指定を受けるだろうが。少なくともグロ注意にはなる。）

いや、単純に主人公が堅いのか。

今小説では、『無のエネルギーで刀身を作っている』という設定でスッパリ切れる。

振ったらブンブン音がする。これは原作でもだが。

他にも、武器と同じ色の赤いビームを大量に乱射したりする事が出来る。

今小説ではこれも、武器と同等の威力を持つ事とする。なにやら軌道も変えられるらしい。

変幻自在の体術、おまけに分身最高二人。
分身については、偏在と同じ設定に。

KH2の覚醒技（必殺技）は、ドーム状に配置された無数の光弾を
相手めがけて一斉に降り注がせる「全方位ショット」。

そして、バグな主人公を苦しめた『闇へのいざない』『無へのいざ
ない』。

効果は「徐々に主人公の体力を奪う」という物。本作でも、徐々に
相手の生命力を奪う。

（『闇へのいざない』は少し違うが、効果はさほど変わらないので
同じとする。）

最終決戦の『鎧モード』であるが、

「No. 13を除く、全ての機関員の能力が使える」という物だが
…。

今小説では封印となる予定である。

他の状態変化は、『身体能力の向上』等が含まれる。

No. II 称号…魔弾の射手 (Fresh shooter)

属性…空間 武器…ガンアロー 配下ノーバディ…スナイパー

武器である「ガンアロー」は、クロスボウという弓矢を射出する武
器と銃を融合させたような物。

射出するのは紫色のエネルギー弾で、補充をしている所、リロード

は必要らしい。

因みに、ノーバディーになる前：一般人の時から愛用しているようで、その頃から瞬間移動が出来た。

主人公といい、人間なのかと疑いたくなる。

（主人公もちゃっか瞬間移動が出来る。空も飛べる。正確には滑空だが。）

攻撃方法は、謎の重力逆さ状態からの射撃を含め、死角からの射撃、二丁のガンアローを合体させ、スナイパーライフル式にして狙撃したりが基本。

ちゃっかり、エネルギーを強く収縮させた一回り大きい弾を射撃してきたりもする。

因みにその弾は暫く地面や壁を跳ね返ったりしている。

移動は瞬間移動、そして主人公を接近させない為の空間変異等が出る。

リミットカード版（単純に言えば、強化された状態）では、無限バウンドでも付けた訳でも無いのに、段数無限だったり、弾速が早くなっていたりもする。

今小説では、殆どの力を使えるようにしている。

ガンアローの能力については、

『気絶打ち』：文字通り相手が気絶する程度の威力

『狙撃』：スナイパーライフル式にガンアローを合体させる。

『レイフォールガン型』：限られた時間ではあるが、弾がその場に

留まる。

時間が経つと再び停止前のスピードに戻る。

『ニキータ型』：追跡型の弾を一発のみ、発射する。威力の大小は変化させる事が出来、

大きさと威力は比例する。（デカければ威力も高くなる）

等、様々な打ち方が出来る。

自分も人間を止めているからなのだろうか、

主人公の事を「今までのキープレードの使い手に比べると随分とお粗末」と評している。

主人公が最強では無かったら：考えるだけで恐ろしい。

No. III 称号：旋風の六槍（Whirlwind Lance）

属性：風 武器：ランス 配下：ノーバディ・ドラグーン

武器は「ランス」、合計六本の槍による長いリーチを生かした連続攻撃をしてくる。

片手に一本、もう片方に二本持つ。他の三本はそれぞれ、風の力で身のそばに浮かせている。

攻撃の際に主人公に向けて、扇状に放ち、突く。それか、六本を同

時主人公へ放つ。

槍がそれぞれ襲いかかってくる事は無いものの、突如上空から表れ、奇襲する事も出来る。

そして厄介なのは、No.？自身が絶えず風のバリアが張られていて、主人公が接近して攻撃しようものなら、

逆にダメージを受けてしまう。おまけに、何故か魔法までも弾かれる。

バリアを一時的に消して、ダメージを与える為には、特殊コマンドを使わなければならない。

(リミットカット版のみ)

無論、風の刃を利用した攻撃も。

覚醒技は六本の槍を変形させ、竜のようにし、その口から暴風を放つ、「絶望の風」。

今小説では、上に書かれた物と殆ど変わらず。

「絶望の風」は変形して竜が完成するまで射出出来ない。故に隙だらけ。

その代わり広範囲撲滅兵器に分類され、威力はとんでもない事になる。ハイリスクハイリターン。

六本の槍がどうすれば竜の頭になるのか解らないが、体の大きいNo.？が割と余裕で乗れている所から、結構な大きさを誇る。

自らが「生み出した」風の性質を変化させる事が可能で、

刃のように切り裂く風にも、ただ、敵を吹き飛ばす風にしたり。

一瞬にして30マイル程の竜巻を発生させる事も可能。無論、30マイル以上も可能。

No. IV 称号…いてつく学究 (Chilly Academy mic)

属性…氷 武器…シールド 配下ノーバディ…

武器は「シールド」文字通り、体を守る為の盾で、No. 4の前に絶えず浮いている。

シールドによって前方からの攻撃をすべて無効化させる事が出来る。耐久度が一応あり、破壊する事でNo. 4にダメージを与えられるようになっていたが、時間の経過と共に再生する。

氷を用いた攻撃は、氷結の刃を作り出し、地を滑るように対象を追いかけて、切り裂く攻撃の他に、

覚醒技は二つ、全てを眠りへと誘う(?) 絶対零度(?) の吹雪を起こす「ダイヤモンドダスト」

二つ目は氷塊で極限まで対象を凍りつかせ、氷山を突き上げ粉碎する「アンサンブル」。

学究の名に恥じない技もある。

展開した魔方阵(ノーバディーマークを円で囲ったような物)を主人公の下に張り付かせ、

情報の解析を行い、吸収を終了、主人公のクローンを生み出し、放ってくる。

他にも、戦闘では出てこないが、本人とソックリそのままのクローンも生み出せる。

（といっても、アンチモードという主人公が稀になる変身状態のタイプが襲いかかってくる。）

今小説では、特定範囲内（それほど広くはない。自衛には困らない程度の範囲）を突如

凍りつかせる事が出来る事に加え、氷に対する？耐性？が出来る。

（寒さを感じない、凍りつかない等）

逆に、火など高温を誇る物には滅法弱い。盾も火による攻撃には直ぐに壊れる。

基本戦法はヒット&アウェイ。

氷結の刃で対象を追跡させ、接近してきた武器や攻撃を盾で身を守りつつ回避する。

そして魔方陣で対象のデータを解析、分身を作り出し、援護させる。

能力レポート（後書き）

これできんじゃないね？

っていう能力応用法もある程度、考えています。

なにかアイディアがあれば、感想で書いていただければ助かります。

N o. 2! 「能力についての実験 下」 (前書き)

更新は不定期になる…かも？

出来れば、一日一話…いや、二日一話目指したいなあ…。

No. 2! 「能力についての実験 下」

下

キングダムハーツの主人公は、14歳でキープレードを振るっていた。

まあ、単純に何が言いたいかというと。

「…うぐぐぐ、重い…」

5歳と14歳では筋力が圧倒的に違う。

…これは鍛えないと始まらないなあ…。二本を軽く振るってたとか尊敬するわ。

キープレードっていうと、初期武器なんかを見る限り、軽い、っていうイメージがあるんだよな。

ほら、王様（夢のねずみ）とかだって振り回してたし。

どうやら、キープレードは一本のみのようだ。

…原作じゃ覚醒イベントが起きてから初めて二本になったんだよね…。

俺も覚醒しなければ使えないのだろうか。

それは兎も角。

使用者に合わせて重量が変化するとか都合の良い事は起きない訳で。仕方なくキーブレードを元に戻すと、他の武器にする事にした。

「エアリアルブレードか…？あれは持つっていうより、腕から出てるって感じだしな。

あれか、エネルギーで生成されてるから重く無かったりするかも…。」

他にも、カード（No. 10）やらナイフ（No. 12）でも良いかもしれない。

見た目的にはどちらも軽量武器だからな…カードが武器かどうかは兎も角ではあるが。

一つ気になるのは、殺傷能力だ。

全年齢対象のゲームなので、無論死亡シーン等、グロが無いだけに、本来の殺傷能力が分からない。

確か、キングダムハーツには『死』という概念は無いんだっけか。

「まあ…別に人を殺したいなんて思わないからそっちのほうが楽なんだけどなあ」

閉話休題。

能力を使う方法は、機関メンバーの称号を唱える事で出来ると、神に一応言われている。

【狭間の指導者】

これはNo. 1の称号だ。能力使用に至っては、別々の称号があるので、使い分けなければならない。

ブオン、というライトセーバーが立てる音と同じ音と共に両腕に赤い鮮やかな光を放つブレードが現れる。

手の甲に現れるノーバディーマークを中心に、モノクロ色の茨が浮かび上がっている。

「うお…生ライトセーバーが見られる日が来るとは…か、感動だ」

スターウオーズを見れば、誰でも一度は夢を見たはず。

試しに腕を上下に振ると、ブオンブオンと、音が経つ。

段々楽しくなり、テンションが上がっていた時。

ジュッ

「うお…。」

落ちてきた葉がエアリアルブレードに当たった途端、溶けるように消えてしまった。

——…ええええええ！？

どうやら、エアリアルブレードに殺傷能力（人を殺せる威力）あるようだ…というか、下手したらとか下手しなくても扱い次第では自爆しそうだよな…？ なにこれ怖い。

正直、これが自分に当たったらと思うとテンションが一気に下がった。

——取り扱い注意すぎる。

「と、とりあいず、解除。」

スツと音も経てずに消えるエアリアルブレード。俺はそこでホッと、一息吐いた。

この様子だと、他の武器にも殺傷能力はあるのだろう。…護身には

十分だけど、できれば使う時が来ない事を祈るばかりだ。

と、その時。

ガササッ！

と、何かが茂みの向こうで動く音がした。

…やヴェ、見られたか！？…でも、こちらに近づいてるような気が…。

俺は咄嗟に近くの茂みに身を隠した。

ズシン、ズシン、と『何か』の足音が聞こえる。――この音は…人間じゃない…？

「ブヒイイッ！」

まもなくして、『ソイツ』は茂みから出てきた。

人間に近い大きな胴体に豚の頭。そして、筋肉隆々の太い腕。

そして木を荒削りして作られたと思われる、これまた太い棍棒。

――おい、今変な想像したやつ、自重しろ。

ともかく…

「…オーク…？」

そう、オークだ。知能は低く、行動パターンも単純な亜人と言われる種類であるが、その図体から見ても分かるように、獲物である棍棒で繰り出される攻撃は凄まじいという。

彼らの主食は肉で、動物の物は勿論、人間のものまで食らう。

人間の子供の肉が好きと言われ、正直、絶対見つかりたくない。

見つければ、最悪、生きたまま食われる可能性がある。

子供の足では逃げ切れる筈もない…俺は村に引き返すべく、静かに歩を進める。

…しかし、現実とは非情な物で…。

ゴッ、

「ブヒッ!？」

「うげえ!？」

木の根に足を引っ掛けて盛大に音を経てしまった!

無論、それがオークに見つからない筈も無く、その目は正確に俺を捉えていた。

不味い…こうなれば逃げ切る事も出来ない。

何故か非常事態にも関わらず落ち着いている事に感謝しながらも、策を頭で考え始める。

能力で対峙しようにも、一撃でも相手の攻撃…あの棍棒が直撃してしまえば、ミンチに化してしまいそうだ。

避けきる自身もないのに、接近するのは避けたい…。ならば。

「（こうなりゃ、ガンアローでも使うか！？…だが…もし当たらなかつたら？」

実際、銃なんて一度も手にした事も無ければ、打った試しなんてあるわけが無い。

そんな素人が目の前の巨大とはいえ、オークに当てられる自信は、無い。

「ブヒヒヒッ！」

「う…ガンアロー以外じゃあれをやるしかねえか…一か八かだ！」

大好きな人間の子供にあり付けるかもしれないのだ、そんなチャンスをオークが見逃す筈があるわけが無く、
オークは雄たけびを上げると、歩き寄ってくる。

「出て来い！サムライ！」

そう。ノーバディー創造である。

これで、目の前のオークを倒せるか兎も角、時間稼ぎが出来る筈だ。

そして。

虚からシャキン、と鞘から刀を抜く音と共に、助っ人^{サムライ}が現れた。
サムライというのは、目の前のノーバディーの種類の一つで、No. 13の配下ノーバディーにして上位の強さを誇る一体だ。
その容姿は、侍が着るような袖の長い服を着て、全身が薄く藍色がかっている。一見、刀を二本指しているので二刀流だと思うだろうが、実は背後で重力を無視したように浮かぶ『鞘』も同時に扱う、四刀流の使い手。

この侍が俺に従ってくれる事を願いつつ、

「目の前のアイツを倒してくれ！」

と命令、というかお願いを試してみた所。

「……（コクン）」

やったああ！頷いてくれたああ！

一か八かは成功した。…これでサムライが頑張ってくれたら助かる。
なんて、俺の考えが甘かった。——良い意味で、だが。

「プギッ！？プギイイイイ！」

「…」

突然のサムライの出現に驚いていたオークだが、目の前の存在が敵

だと分かるや否や、棍棒で仕留めようと振り下ろす。

ブウォン！

が、それはサムライにヒットする事なくすかぶった。

：あの音からして、当たったらひとたまりもないな…。

バックステップでフワリと飛ぶように避けたサムライは、柄に手をかけ。

シュシュシュ…

ゆつくりと、引き抜いた。

鞘から引き抜かれた、愛刀（？）は日の光を反射して、鈍く灰色に光る。

「ブヒイツ」

棍棒を構えなおしたオークは、相手が武器を構えているのを見るや否や。

ブウォン！

再び振り下ろす。

サムライはそれを避けようともせず、抜刀した状態で立たずんでいる。

「あ、危ない！避け——」

サムライは腕を素早く動かしていた——目に見えないほどのスピードで。

「プギイツ!？」

音も無く振るわれた刀、それは振り下ろされようとしていた棍棒を叩ききっていた。

ゴドン、と鈍い音を立てて真つ二つになった棍棒。

巨大な木を荒削りして作ったような太いものが、一振りで切られていたのだ。

「…、以外と鋭利…。」

逃げる、という行動が頭から離れるほど、鮮やかな太刀使い。

俺はそれに見とれていた。…否、見とれる事しか出来なかった。

「プギィィ!」

獲物を使い物にならなくなった事に怒っているのか、乱暴ではあるが、先ほどよりさらに鼻息を荒くしてサムライに掴み掛かる。

サムライの鞘がその腕を殴打して、オークが一瞬、一鳴きして怯む。

——その一瞬。

「ブヒッ——」

この大陸では見られないはずの、桜の花びらが散るような幻影が見え…次の瞬間、サムライの姿が忽然と消え、オークの背後に現れる。パチン、と鞘に刀を収める音と共に、オークの上半身と下半身が別々に崩れ落ちた。

「うえ？…お：おう…えええ」

それまで、見とれていた俺だったが、何かが液体が顔に掛かるのを感じた。

勿論、オークの大量の血と肉を見た俺は吐き気を催していた。

頭が豚の怪物だとしても、例えば俺が直接手を出した訳じゃなくても…。

結局、耐え切れずに、嘔吐^{リバーズ}してしまった。

数分が経ち、俺は漸く落ち着つき始めていたが、まだあの光景が脳裏から離れない。

これ以上考え事も止めて、早く家で休みたい気分なんだけど…。

「……」

隣で、命令を待つ従者の様に佇む者：先ほど創造した、サムライ。彼（？）…他のノーバディに共通して恐らく、喋れない。無論、そのどちらかといえは人間の物ではない頭にも口と思われる部分が無いし。

ん？待てよ…でもダスクって喋ってたような？

まあいいか。と、俺はサムライを改めて見つめる。

何故か、あれほどのオークの血飛沫だったのに、体所か、刀にすら

なにも掛かっていない。

俺はその事に繭を潜めたが、まあ今は別に良い…血は見たくなかったし。

これ（サムライ）を如何するか、それが問題なのだ。
創造するだけ創造したものの、還し方は無い。

と、なれば、必然的に隠さなきゃならないな。
隠しておける場所なんて、この森ぐらいしかない。
いっその事、

『森で拾ってきたー！』

「…ないわ。」

怪しすぎる。

万が一…ありえる訳が無いが、親が受け入れてくれたとしても、村は違うだろう。

——とりあえず、サムライには『森で人に見つからないように行動』
してくれと、頼んでおいた。

…これで多分大丈夫だ。

この森は資源に向いた木が少なく、立ち入りも他の方角にある森より圧倒的に少ない。

しばらくは、秘密基地のように使えるだろう。
と、なると、ここで鍛錬するか？ 家族に見つかからないようにするべきなのだろうし。

強くなるにしても：単純に能力無発動でもある程度戦えるようにしなければならぬ。

——それ以前に武器を振るう力がないと技術も磨けやしない。

「うん、筋トレになる事はじめなきゃな」

この後、帰宅したら、体中泥だらけなのと、時間も遅かったためこっぴどく母に叱られた。

平民である俺の日常は続く。

No. 2! 「能力についての実験 下」 (後書き)

うーん、機関やノーバディにはまだ謎な部分が多すぎる…。
そして、サムライ無双。

やっぱり、自己解釈や想像が入ります。

一応、オリ主にいずれかキープレード二本を持たせたいな、と思っています。

No. a! 「ノーバディ、十三機関について。」 (前書き)

どうも、軽い雪です。

今回は、「ノーバディ」を知らない人向けにがんばって書いてみました。

にしても、どう物語を進めるか計画を立てないといけないなあ。

No. a! 「ノーバディ、十三機関について。」

【ノーバディーとは？】

闇に心を奪われてハートレスになった人間が強い心や思いを持っていると、稀に生まれ落ちることがある生物。

（闇⇨ハートレス⇨また別の敵キャラ）だと考えていただければ良いです。

通常、キングダムハーツの世界では、ハートレスに心を奪われると肉体と魂（心とは別）も消滅します。

然し、冒頭でも書いたように、強い心、思い等を持っていた人物がハートレスに心を奪われると、

稀に肉体と魂（記憶？）が異なる世界で残る事がある。

それが、ノーバディ。

体の形は人に近い形になっている者が多く、（サムライもそれに当てはまる。）色は白や銀の部分が多い。

ハートレスの殆どが、丸みを帯びた形に対して、ノーバディは角ばったり、鋭利な形をしている。

光でも闇でもない（二つは裏と表のようにハッキリしているため強い）狭間（無）に近い存在で、

ある程度短い間行動できるだけで程なく闇に溶けてしまう（実際に溶けるのではなく、「闇に消えてなくなる」という意味）。

然し、戦闘能力が低いのかと言えば、そうではなく、一個体ではハ

ートレスよりも上で強い。

動きは様々で、一見、心を持っているかのような感情的な動きをするが、心は無い。

実際にゲーム中でも「存在しない者」「誰でもない者」「抜け殻」と言われている。

（関節や重力を無視したような動きをするため、プレイヤーの一部からは不気味がられている。）

ハートレスが心を求めて本能で動いているのに対し、ノーバディーは知性を持って行動する。

また、体の何処かに、ハートレスに付いている、ハートの「エンブレム（マーク）」のように

逆さまにしたハートと十字架を組み合わせたような形のシンボルマークが付いている。

これは「心が無い」という事を表すそうだ。

存在しない者という呼称からか「死」という概念はなく、その最期には「消滅」という語句が用いられる。

【十三機関 『正式名称…XIII機関』】

人がハートレスになる時、特に強い心を持った者は、人であった頃の面影を残したままノーバディとなることがある。

XIII機関はそのような13人のメンバーで構成されている組織で、下級ノーバディを支配・統率しながら、目的を達成するために数々の世界で暗躍しているようだ。

特徴としては皆同じ黒いコートを着ていて、それぞれが専用の武器・司る属性・専属の配下ノーバディを持ち、人間だった時の名前に異端の証である「X」を足してアナグラムにしたものを新たな名前としている。

感情があるような振る舞いを見せるが、実際は心を持たないため、人間だった頃の記憶に基づき感情があるフリをしている。

ナンバーは入った順に決められ、リーダーである『ゼムナス(Xemnas)』は無論No. 1。
なので、番号が若い(小さい)ほど、昔からいるメンバーということになる。

正規メンバーではない。ナンバーと実力は必ずしも一致している訳ではなく、ナンバーが若いからといって機関内での立場が高いとは限らないという。

(それを表しているかのように、十三機関で一番最初に倒されたのはNo. 4の『ウィグセン(Vexen)』だった。)

ノーバディは年を取らないため、機関員の年齢はノーバディになった時点での外見年齢のままになる。
公式で解っているのはNo. 13の『ロクサス(Roxas)』のみ。

因みに、機関にはもう一人、正式ではないメンバーが居る。

機関No. 14。

基本的にN o. 13と同じく光属性を司り、キープレードを使う少女。
能力としては殆ど被るので、小説内では出ないかもしれません。
因みに、N o. 13がキープレード二刀流へと覚醒したのは、彼女が関係しています。

正体は「レプリカ計画」に基づいてN o. 4が作成したレプリカ人形の一つで、N o. 14は中でも一番の成功作「N o. i」である。

そのため実際はノーバディですらなく、それが理由で機関のメンバーとしては正式にはカウントされていない。

【今小説での能力設定】

「機関メンバー全員の能力使用可能」

N o. 1とN o. 13までの機関メンバーの能力を使う事が出来る。
重複は現時点で不可能で、予定ではあるが、同時に二人分まで重複できるようにしたいと思っています。

何故シオンを今含まないというのかというと、正式な「機関メンバー」ではないので。

それと、機関N o. 5の武器、「アックスソード」についてですが、これ、名前からもわかるように重量武器なんですよね。「キープレード」一本まともに振れないのにまともに使えるようになるのは何時になるんだよ、ってな感じになりました、「能力」としてその馬鹿力を発揮できるようにしようと思います。

：良く考えたら鎌とか槍とかも難しいよね…。まあこれらはなんとかして持てるようにします(汗)

（機関の登場作品は、「KH COM」^{キングダムハーツ}「KH2」^{ファイナルミックス}「KH358/2」
：一応No.1だけなら「KH1FM」にも
隠しボスとして出てましたね。

「358/2」では機関メンバーであるNo.13が主人公で、他の機関メンバーも操作できます。

なんというか、「358/2」は手元に無い上、プレイしたのも大分前だったのであやふやです：w)

機関は全員が共通して「FFを元にした魔法」が四種類使えます。
ファイナルファンタジー

・ファイア ・ブリザド ・サンダー ・ケアルガ

エスナ等、それらの魔法は無いようなので、実質存在するのは上四つだけ。

（といっても、KHのまほう（KHでは魔法とは呼ばない。）は、FFの物とはエッフェクト等が違う物です。）

その他にも「マグネ」や「ストップ」などという魔法がありますが、機関メンバーは使用していません。（恐らく。）

なので、オリ主も機関の使えないこの魔法は使えないことにします。

「ノーバディーを創造する能力」

本来、ノーバディーは「心の強い者がハートレスに心を奪われる」という条件が必要ですが、

この小説では、それを取っ払ってます。

ただ、この能力は、その機関メンバーに「配下」と言われる専用のノーバディーが居る場合、そのノーバディーしか創造できません。

逆に機関メンバーの能力を使っていない場合は、どんなノーバディーでも呼び出せると言う事です。

小説内では既に、ノーバディーの種類の一体「サムライ」が出てくれています。

因みに、小説内で主人公が内心考えていた「ダスク」というのは、ノーバディーの中でも二番目に弱い下級のノーバディーです。

他に、さまざまな種類のノーバディーが存在しますが、それは本編で。

因みに主は「サムライ」が好きなので登場回数が一番多くなるかも
(あ

「?????」

不老に変わり登場する能力です。

後付になる予定ですが、いまでもその能力は決まっています(汗)

【本小説における、オリ主の立ち位置】

最初は「ノーバディー」の能力を得たオリ主がルイズに召還される」という物でした。

しかし、そうになると、本来呼ばれるはずである「サイト」君が登場できないんじゃないか、という問題に当たりまして。

まあ、今おもえば、「二人同時召還」という手も在ったのですが、

ガンダールヴとかどうしよう。って感じになるような。

近々、「ルイズ召還」verも一話だけ特別話として投稿してみようかと思っています。

――さてさて、この小説での立ち居地は作者の予定では

「近い場所で見守り、原作で起きる悲劇等を回避する手伝いをする」

という、案外地味な立ち居地となっています。

実際、もっと派手な立ち居地になりたいというのがありますけど、原作よりハッピーな展開をサイト、ルイズ達と繰り広げたい、という思いもあり、「召還」verではないこの立ち居地になりました。

「貴族から始めれば（に転生すれば）、教師になるなり出来て楽なんじゃない？」

無論、その設定で行くのも考えましたが、
誕生↓魔法教育↓学園生活↓成人↓先生　∴大分大雑把にしましたが、先生になるまでに踏むステップが多く（自分からして）

「これ、続ける自信ないなあ∴。」と、思わず苦笑い。これを書いた他の作者様を尊敬しました。

自分としては、原作に早く突入してえ！って、我慢できるわけがないので、平民にしましたw

「おいおい、待てよ、平民で行くならいいとして、どうやってルイズ達を見守れる場所に落ち着くんだよ？」

実はこれ、相当迷いました。実際、トリスティン魔法学院に居る平民の人たちってメイドだとか、コックとかしか居ませんよね？

（実は作者、アニメにしか見ておらず、おまけに小説は『外伝 タバサの冒険1』しか持ってないという。）

（2011. 11. 25 警備員もちゃんと居るみたいでしたw
出ませんけど（・ω・））

今の候補としては、警備員、って所でしょうか。

…無計画すぎて俺が泣く。 ご都合主義でも起こさなければなら
ないか…。

まあ兎も角、長々とここまで読んで頂いた方、有難う御座います。

No. a! 「ノーバディ、十三機関について。」 (後書き)

誤字、認識の誤りがありましたらご報告ください。

No. 0 ! 「もう一つの始まり方」 (前書き)

はい、今回はルイズに召喚される、「召喚」verです。

何故かこっちのほう書きやすいという事態。…うばあ…。
ひよっとすれば続くかもしれない。

因みに、サイト君が出ないバージョンでもあります。

No. 0 ! 「もう一つの始まり方」

ドサッ。

「ち、ちくしょう…覚えてろよ…」

長い間、あの神から落とされた穴の中を漂っていた俺だが、不意になにか「引っ張られる」…いや、「吸い寄せられる」のを感じ、目を開くと目の前に迫る「鏡」と思われる物。

そして、視界は真っ白になったと思ったら、草むらにぶっ倒れていた。

「おい、ルイズの奴、人間を召喚しやがったぞ！」

「フードを深くかぶってて解らないな…」

騒がしい。

どうやら俺は声からして、少年少女に囲まれているようだ。

…一応神は気を利かせて、服を着せてくれていたらしい、少し感謝しよう。

俺は今だ平行感覚が取れないまま、ノロノロと起き上がった。
視界がブレる。——此処は一体何処なんだよ、確か…

「先生、もう一度、やり直しを！」

「駄目だ、ミス・ヴァリエール。サモン・サーヴァントは神聖な儀式。やり直しは受付られない。」

「そんな！」

なにやら、視界の先で中年の男性と少女の声が聞こえる。

「サモン・サーヴァント」？…サモンってゆーと、あの召喚^{サモン}だよな？

という事は俺はあの少女に召喚されたと言うのか?!…んな馬鹿な…。

「アンタ、何者よ？」

少女の声で思考から現実に戻される。

視点も漸く定まるようになってきた。——目の前のピンク色の髪少女が話しかけてきたらしい。

「俺は…」

村雨、と言おうとして、もう一度口を閉じる。

——転生(?)のだから別の称でもいいのかもしれない。

「ヴェン、だ。何者だ、と言われても反応に困る。」

「?…おかしな平民ね。というかアンタ、?ご主人様?の前なんだからフード脱ぎなさいよ。」

「!…ああ、悪い。」

そう言えばといい、深く被っていたフードを外す。

フードで隠れていた顔が露見し——、周囲から息を飲む音、鼻を鳴らす音が聞こえた。

それにしても目の前の少女、?ご主人様?の所を強調してたな…と
いうことはやっぱり…。

「へ、へえ…以外といい顔立ちしてるじゃない。」

「そいつはどうも。…所で説明して欲しいんだが…。」

俺が置かれている状況が知りたくて、質問しようとした。

ある程度は予測が付いているが、俺の予測でしかない。まずは情報
収集しかないな。

「いいわよ、特別に——」「おい、ゼロのルイズ!早くコントラクト・
サーヴァントしろよ!」…」

「「「そーだ、そーだ!平民とキスしちまえ!」」」

「う、五月蠅いわねっ！分かってるわよ！」

野次馬共に邪魔されてしまったが、俺の意識は別の所に移ってしまっていた。

——今なんていった？「キス」だって？

冗談じゃない、行き成り瑞知らずの少女とキスだなんて、良くない。然し、なんでここで「キス」が出てくるんだ？

俺が顔を引き攣らせながらそんな事を考えていると、先程の中年の男が話しかけてきた。

「失礼、お名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「あ、はい。：ヴェンと言います。貴方は？」

見事に禿げ上がった頭がいささか寂しい中年の男の人は、以外と親切な言葉使いだった。

洋服が、何処かの「魔法使い」が着るようなローブに、なにやら長い杖を持っている。

「私はトリステイン魔法学院で教師を務めます、ジャン・コルベールと申します。」

…ミスタ・ヴェン、失礼ですが何処の出身でしょうか？」

「自分は…いえ、分かりません。…記憶喪失、みたいなんです。」

俺は咄嗟に嘘をでっち上げた。

別に、日本出身です、とでも大真面目に答えて良かったのだが、これなら

後から思い出した事にすれば、いくらでも変えられるからな。

「そ、そうですか…それはまた大変ですね…。」

「失礼、変な事を聞くようですが、此処はどこでしょうか？」

まずは、此処が何処なのか。

恐らく日本ではない、というか確実に、だ。

周りの少年少女を見渡したが、黒髪が一人も居ないと、殆どが金髪だったり、とカラフルなのだ。

「アンタ、そんな事も知らないのね。…ここはトリステイン王国よ。」

「うん？…やっぱり記憶喪失みたいです…。」

そんな国、一度も聞いた事が無い。

別に世界地図を記憶している訳じゃないから、確証があるとは言え

ないが。

コルベール先生は困ったように何かを考えている。

目の前の少女は呆れたような目で「これが私の使い魔…、」とつぶやいている。

そういえば。

「君の名前を聞いてなかったな。」

「馴れ馴れしく？君？なんて呼ばないでよ。？ご主人様？よご、し、ゆ、じ、ん、さ、ま。…特別に教えて上げるわ。心にして聞きなさい。」

「ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。それがアンタのご主人様の名前よ。」

どうやら俺はこの人に仕える事になったらしい。…不安だ。

No. 0 「もう一つの始まり方」 (後書き)

妙にルイズが親切のような気がした (苦笑)

んー…本編が書きづらいのは設定が安定してないからかな…。
近々本気で固定させないと…。

誤字、脱字、認識の間違ひがあればご指摘ください。

No. 3! 「鍛錬な一日」 (前書き)

話が余りすすまねえ!

今の所、ゼロ魔らしい要素も圧倒的に少ないしな!

：それにしても相変わらず能力使用技術に進展が見られない。

このままではノーバディに頼りっぱなしの駄目な奴になってしま
いそ。

ガンダールヴなら武器もちや使い方はある程度わかるんだけどなあ

(^ω^) …。

No. 3! 「鍛錬な一日」

「ハアアッ!」

俺は振りかぶる。目の前で楽しげに微笑んでいる敵（父）の余裕を、少しでも無くしてやる、とばかりに。

「うん、まだまだ甘いね。」

然し、この男、実に余裕である。

…予めNo. 2「ジグバー」の能力でも使っとけば…。

俺は自分の腕だけが木刀を持って父を襲っているシーンを想像して――やめた。シュール過ぎる（笑）

だいたいそんな事したら、明らかに異常な物を見るような目で見られるに決まっている。

今は基礎を上げなければ成らないのだ。能力の技術は…サムライやノーバディー達と戦って上げるしかないか。

いや、それにしても…。

カン!カン!シュツ!

当たらなさ過ぎる。

…最初は「父さん…戦えるの…?」と心配ばかりなのだったのだが。

「ほら、もう疲れたのか? だらしないなあ、ヴェン。」

『なんだよ、そっちが負けてる癖に!』と言い返したくなるような挑発だ。

——息子の挑発する親ってどうなの。

然し、男としてのプライド（笑）を守るため、せめて一発は!

「うおおおおお!」

俺は勇ましく、父に立ち向かっていった。

おれ、父さんを倒したら、サムライの所へ行くんだ。↑死亡フラグ

「いでで…」

結局あの後、俺は一本も：一発も当てられなかった。
身体、プライド共にズタズタだ、ちくしょー。

まあ良く考えてみれば、俺は前世で剣や刀を振るったこともなければ、木刀も振ったことも、剣道もやった事もない
ただの素人なのだが。

然し：素人といえば、原作の主人公も素人だし：ロクサスもどちらかといえば最初は素人だったはずだ。

——あれ、我流だよな。誰に鍛えて貰ったんだ…?

まあゲームの話なのだから仕方ないか、と適当に結論付ける。

「あら、お疲れ様、ヴェン。父さんは倒せた？」

「無理だった。…なんであんなに強いのか？父さん。」

一人黄昏ていると、先程まで刺繍をしていた母が話しかけてきた。そーなんですよ、たおせねーんですよ。それどころか、掠る事もないんですから。

——本当にN O . 2 の能力使おうかなー、腕だけ木刀やってみてーなー。

と不貞腐れていた俺に、母が慰めるように（笑）救済の言葉（？）を俺に言った。

「お父さん、実は？元？傭兵なのよ。…それもかなりの実力のね。」

えっ

…でしょーねー。

やけに戦闘なれってゆーか、動きが只のおっさんと違うと思ったわ。

「因みに無敗だった彼の記録に傷を付けたのは母さんだけどねー☆」

テヘツつとウィンクする母さん。

(^ ω ^)

知るか。

「そおおいつ！」

先ほどの鬱憤を晴らすかのように切りかかる俺。
何に切りかかってるか？

キンッ！

「……」

無論、そんな事を出来るのは父さんと…命の恩人^{サムライ}だけだ。
無言で、受け止める彼（性別不明、というかあんのか？）に心の中
で感謝する。

本当に心が無いんだろうか？というほど、人間らしい所がほんのたまにだが、見かける事がある。

さて、今俺は木刀でサムライに襲い掛かっているわけではない。
いや、襲い掛かっているのは襲い掛かっているのだが、武器が先ほどの金属音でもわかるように違う。

実際、俺が木刀で切りかかっても、掠った…というよりも空気を切るような。

兎に角、すり抜けるだけで振っても当たらないのだ。

次にサムライに木刀を持たせようとしたが――失敗。

持つことは出来るのに、振ろうとした瞬間に、するっ、とすべるように落ちたのだ。

ふーむ、「ノーバディ」に生半可な攻撃は通用しない、っていうのはわかってたが…基準はどうなんだろう。

何が透けて、何が当たるか。

何が持てず、何が持てるか。

――やはり謎だらけである。

…で、なんでそんな攻撃の入らないはずのサムライに攻撃が入ってるのかというと、持っている武器がサムライに通用するもの…ノーバディに通用するものだからだ。

『クリーパー』

ノーバディの一種である彼らは、体を変形させる事が出来るのが売りの、下級ノーバディである。

人型でないところを見ると「元の人間の心が普通より少し強かった」というぐらいだろう。

ゲーム内では雑魚キャラでもあったのだが、主人公が強すぎるのだ

から仕方がない。

俺は、この子はやれば出来る子だと思っている。

時に、潰れたスライムのように液体状になって進み。

時に、翼を生やして空を飛び。

時に、剣となって突如真上から奇襲してきたり。

：まあ、基本的には数で押す、ノーバディらしくない奴なのだが。

そう。サムライに切りかかった武器、こいつは「クリーパー」なのだ。

『同じノーバディーを通した攻撃ならどうなんだ？』
との、俺の安易な考えの元、実行されたわけである。

「来いッ！クリーパー！」

別にポケ○ンではない。

：ごほっ。

さっそく、である。

さて、「ノーバディー界で本来の目的以外で使用された」初めての被害者（サムライは含まない）

になるとは露知らず、ソイツはモノクロの茨を潜り抜けてどこことなく現れた。

その姿、兎に角平べったい。

ノーバディ類最小を誇り、小さすぎる腕（多分）に反して、足が体よりも大きい。

ペタ、ペタと歩く姿はキュートに見えそうで見えない。

——見た目がシャープだし…、夜は恐らく幽霊に間違えられそうだし…。

で、「剣に変形してくれ!」というお願いをして、現在、武器とさせてもらっているのである。

考えた通り、サムライにこの攻撃は通用したのである。

強度も申し分無く、…まあ少し重く感じるのだが、軽すぎても奇襲してもあまりダメージを与えられないか。

然しこの世界での…というか現実^{リアル}ノーバディは予想以上に強い。

…、単純に原作主人公が強すぎるだけか。

「……………」

その後、しばらくサムライと打ち合っていた俺だが、やはり一発も刀以外に触れず。

一瞬、武術の才能が零なのか、とブルーな気持ちから抜け出せなかったが、

『違う、二人が強すぎるだけなんだ。』という言い訳（割りと本当なのだが）するしかなかった。

気を取り直して。

正座をしてなにやら瞑想のような…ただそうしているだけであろうが…事をしているサムライと
剣から戻したクリーパーが虫を丸呑みにするのを横目に…ってちょっとまで。

「ノーバディーで食うのか!？」

クリーパーへ向けて叫んだが、首を傾げる（首はない）ような仕草をしただけで、またもや虫を探し始めた。

…あれ……そういえば機関って何も食べてなかったんだろうか？

…だめだ、考えれば考える程想像つかねえ。

まあ、シーソル○アイスは食ってただけだな…でもまあ、不老なだけあって餓死はするんじゃないか…？

【運命を賭す者!】

さて、今回のお題は機関No. 10のルクソードさんの能力。

原作では、曲者ばかりの機関メンバー達の中で一番まともなのではないか?といわれるお方。

短く揃えた髪、蓄えられた髭など、いかにもギャンブラー好きって感じがする紳士である。

——というか、事実、生粋のギャンブラーなのだ。彼は。

武器からもそれが見て取れる。

彼の武器は「カード」。…実際これを見て何人かが、「えー、それって弱くね？」と考えただろう。

事実——：彼は戦闘をゲームと考えるタイプらしく…。

あまり、強くない（ぶっちゃけた）。

然し、少し不自然な所があるのだ。

本人の属性は「時」。彼の攻撃は、巨大化したカードを持つての連続攻撃、主人公をサイコロにしたり、カードにしたりする。

実際、「時」らしい攻撃が一つも無いのだ。

唯一、「時」らしい面が戦闘で出ているのは、戦闘ルール。

彼との戦いは、「時」賭けたバトルなのだ。

（戦闘時には画面上に主人公とルクソードの「時間ゲージ」が格闘ゲームのように表示される。

ゲージはダメージの蓄積や時間の経過により減少し、先にルクソードのゲージをゼロにすれば勝ちとなる。

バトル中は主人公をサイコロやカードに変化させたり、自身がカードに化けるなど、戦闘をゲーム感覚で楽しんでいるのが分かる。）

んで、今回はその隠れた…否、フェアプレー精神で本人が出さなかったと思いたい、その「時」の技

を解き明かすのだ。

「特に可笑しい所が見えない。ただのカードのようだ。」

い
ず
れ
か。

No. 3! 「鍛錬な一日」 (後書き)

因みに、この小説にアンチ要素は無い、と思いますし、それで行きたいです。

殺しとかも出来るだけ避けたいんだけど、戦争や戦闘が多いゼロ魔の世界ですし。

――…第二話で初っ端オークが死んでしまってますけど (苦笑)

まあ、のんびり行こうと思ってます。

No. 4! 「魔法使い」メイジ (前書き)

はい、若干投稿が遅れました。ごみなさい。

今回はヴェン君のテンションが高いです。

：まあ安定しないのは何時もだと思ってください (苦笑)

今回は魔法について。

No. 4! 「魔法使い」メイジ

魔法。

それはファンタジーにおいて、最も重要な物の一つだ。

自由に空を舞い、火を起こし、水を生み出す…。

魔法を論理的に説明しろと言われれば自分には直ぐには思いつきそうにない。

だから不思議ファンタジーなんだろうけども。

「えくすぺくとばとろなゝむ! …ごほん、ライト。」

「今の何のスペルなの?」

不思議そうに見てくる母。

…説明しないよ。某ポッター君について話ても分からないだろうから。

さて、御ふざけばかりで進歩が無いように見えただろ？

…はい、まったくそのとおりでござえやす。

杖契約に成功した後、なにやら熱い目頭を押さえながらサムライに報告したのはいい思い出。

クリーパー？ あいつはカエルを飲み込んでるところだったよ。

——慣れたよ。それが人間の…俺の売りだからさ。

「何遠い目してるのよ。ほら、もう一回。」

「ライト！ ライト！ ……光よ！」

コモンスペル唱えても何もおきねえんだもん。

仕方ないから三回目はヤケクソで「まほう」みたいな唱え方で。

パッ！

「えー…」

「やったわ！ 凄じやない！ こんなに早く取得出来たのってあの『烈風』以来じゃないかしら？」

なにやら俺よりハイテンションな母上。

俺としては、今までの「ライト」と喉を枯らすほど叫んだ努力やら、呆気無さやらで。

——というか、「光よ！」には突っ込まないンかい。

そんな「不思議」な魔法ではあるが、この世界ではなにやら。俺的考えで分けたら、四種類あるらしい。

一つ目、「コンスベル」

さっきのライトもコンスベルの一つで、杖先に光を灯す魔法だ。その他、ドアの開け閉め、ランプを灯したり消したり、等、生活向きの物もあれば、杖に魔法を纏わせて近接武器として扱うスペル等もある。初級魔法としてメイジは誰もがこれを最初に習うらしい。

二つ目、「系統魔法」

いよいよファンタジー。メイジ達の主力兵器。

「系統」の名の通り、火、水、土、風、という各系統がある。

それぞれ文字通り、火を起したり、水を操ったり。

違う系統同士を合わせる事によってさらに強化することもできるという優れもの。

三つ目、「失われた系統」

この世界に主人公が居るならなってそうな系統。ヒロインもありや。神祖ブリミルがそーだったといわれる、まあ、正式名称は「虚無」の系統だ。

最後に確認されたのが、三桁ぐらい離れた年らしく。…それで「失われた」と言われてるらしい。

一応、第五の系統とも言われる。

四つ目、「先住魔法」

これについては記述が少なかった。

まあ、それについては、分かっている事、という記述を見れば容易に想像できたが。

人間には仕えなかったり、詠唱が要らなかったり、魔法を反射したり。

兎に角、アンチメイジなのだ。そしてそれを使うのは亜人などしかない。

…まあ、俺も無詠唱の「まほう」ならあるけどな。…これも人前で使うのは得策じゃないか！。

正直、「まほう」が使える俺としては便利だなーっていう感じしかないのだが、

折角魔法世界に生まれたんだから、系統魔法ぐらいは扱いたい。

「凍てつく学求（Chilly Academic）」

所変わりいつもの森。

そろそろ名前でも考えてみようかとは思うが、残念だが俺にネーミングセンスなどありはしない。

さて、後半戦はおなじみ能力タイム。

一つ一つ、碌に開拓もせずに放置するものだから、マスターすべきものが増えすぎだ。

まあ、不老だから時間は生憎とたっぷりある。

No. IV ヴイクセン。

属性氷の機関内初の科学者である。

試す順番は決めているわけではなく、その日の考えで決めている。

今回は、「機関内でも魔法による攻撃を主力としたメンバーは？」という考えに基づいた。

該当メンバーは二人。

No. ?、No. ?、だ。

今回は？にしたが、？も近々試したいと思っている。

「…んむ、造りは頑丈だけど軽いな。まあ研究者でもあるし非力なものも考えて、だろうな。」

さっきから木に投げつけたり、足で踏みつけているが、掠り傷すら付かない。

サイズも一応それなりに大きいし…そうだ。

「スイツフィiiiiiiii、あああああああ！！！？」

【放送事故が発生致しました。しばらくお待ちください。】

山の斜面を草スキー。

爽快に風を切り、勢いも増してきたその時。

…後はもうお分かりであろう。

草場が少ない上に無理してスピードなんてあげるもんだから、コーナリングを見事に突っ切ってしまったのである。

無茶しやがって。

幸いだったのは、コーナリングで脱落したところがわりと山の下部だった事と、その頑丈なシールドを手放さずに座っていた事だ。

だが。

無論無事では済まされるはずもなく。

「う…ぼう…え」

衝撃はすべて自分の下半身へ。

つまりは下品ではあるがケツが痛い。すげー痛い。

「氷よ！」

キンッ！

「うおー固まった。…ツメテッ！」

さて、しばらく痛さに悶絶していた俺だが、何とか復活。

早速「まほう」で属性でもある氷のブリザドで凍らせていた。

瞬間冷凍。

まさしくそう言えるほど、一瞬で丸太が餌食となった。

触れてみると、コンコン、と硬く、とても冷たい。…一応火力は抑えたつもりだけど、

FULLで放ったらドライアイスみたいになるんじゃないか？

「終われ」

さっ、と能力解除。

おー、まだ氷、残ってるね。

これはこれで便利である。主に食品保存に。

そんな事を考えつつ。

最近は何かと探求する事が多い。
俺の不思議ライフはまだ始まったばかりだ。

No. 4! 「魔法使い」メイジ」(後書き)

少々やってしまった感があるZE。

この後は生活環境について一話。
チート
追加要素話二話。

正直追加要素は決まっていますが、またキングダムハーツシリーズからになりそう。分からない読者にはご免なさい。

正直、今だに主人公が殺しを行うシーンが書けないです。↑ヘタレ抵抗が抜けきらないですね。がんばりたいです。

原作突入については上記三話が終った後次話になりそうです。
うーん：早すぎるかな、遅すぎるかな？

展開のもっていきかたが下手糞なのでw

誤字、認識の誤りなどがあればご報告ください。

では、これからよろしくお願いします。

No. 5! 「平民なる日常」 (前書き)

今回は一般生活の少し詳しく書いたver。

オリジナルのセンチエル家ですが、平民達との仲は割りと良好と
いうことに。

そして今回は……

No. 5! 「平民なる日常」

日常。

それは日々変わらない物で、幸せか不幸であつたとしても同じだ。
幸福なものにとっては天国。
不幸なものにとっては地獄。

それは人によって違う。

だが、果てして狭間は…その二つの基準は？

「ふああああ…。」

起床。

平民の朝は早い。…貴族がどうなのかは不明だが。

まあ、なんか怠慢とした感じがするからそんな気がするが。↑偏見

季節は夏。明け方というのにセミが既に大合唱していた。

俺は寢床であるベットから立ち上がり、部屋を出る。

「お。おはよう、ヴェン。」

「あら、おはよう。」

「おはよー。」

寝起きなのでぼーっとした頭で両親に朝の挨拶を済ませると、外へ出てまっさきに顔洗いへ向かう。

ぱしゃっ

「つめてー。」

家の外にある井戸で顔を洗う。

水をくみ上げるのも意外と力が必要。これやってるだけでも力付くな。

バサッバサッ。

ア”ッー

「……。」

突然の羽ばたきの音と悲鳴を聞いて嬉しくないことに俺の意識は覚醒。

俺は無言で立ち去る。

——クリーパーが鳥を食べてたなんて言ってもだれもわかりはしないだろう。

最近アイツ、とことんギャグになってきているな、と思う反面、生態系とか大丈夫か？見つかったらどーすんだ？とかいう危機感が募っていた。

…後で無闇に生態系壊さないように命令しないとな…。

羽ばたいてゆっくり森へと戻っていくクリーパー見送った後、家に戻って朝食。

食材は主に収穫した野菜を煮込んだ物等、この世界では以外と贅沢なのかもしれない。

残念ながらお米がないのだが。

母に聞いても父に聞いても、「お米？なにそれおいしいの？」的な返事しか。

主食お米な俺にとっては辛い事。

農業の知識と経験があれば、是非とも農作したいものだが、生憎と稲刈りの経験しかない。

まあつまり…

「お米諦めろよ（＾ω＾）」ということだろう。

…今更遅いので置いといて。死刑宣告（大げさである）にも等しいからショックだけでも。

とはいっても、母の手料理は美味しいので余り困ってなかったりする。

「偉大なる始祖ブリミルよ…」

この変な御祈りさえなければ言うことは後はないのだが、
この世界の神話はどうなっているのだろう。ブリミルという奴は前
世で言う、キリストなのだろうか。
調べてみる価値はありそうだ。

「はっ！」

カン、と木刀と木刀がぶつかる音が整備されていない農道響いてい
る。

否、整備されてるんだけど、科学が全くといって発達していない
この時代、大分荒れている。

朝食を食べ終わると、父と鍛錬。

此処は以外と邪魔になりそうではあるが、以外と苦情は来ない。
それどころか、「見物させてもらってるよ」などという声が。

「ヴェンのお兄ちゃんががんばれー！」

「坊主、あぶねえ！」

「動きが良くなってきたな、兄ちゃん。流石レイグの旦那の息子だ
！」

な、わけで、周りにはいつの間にか人だかりが出来ているわけである。

俺がぼこぼこにされるところがどう白熱するのか分からないが、近所のおっちゃん共はなにやら興奮気味である。

から竹割りで切りかかってみるも、真面目な動きでは当たるわけもない。

「ほったってやあっ！」

薙ぎ払い返し、突き。

某緑勇者の剣技の真似である。

スッ、スッ、コン！

「なん…だ…と」

「スピードはいいね。でもまだ真直ぐすぎるかなっ！」

相変わらず余裕の表情。

アンタ何者だよ…畑仕事した後なのにそれとかねーわ！

カンカカンカン。

「ふっほっいえ！」

「ほーれほれほれほれ！」

俺だって伊達に鍛錬を続けているわけでもない。
父さん、サムライに鍛え続けられれば……！

容赦ない突きを繰り返す父の攻撃をサイドステップで避け、
振り抜きで腕を狙ったのだが。

ひょいつ、すかつ

「え」

「貰った！」

カンっ！

「いでっ！」

見事に空を切り、逆に木刀を叩き落とされてしまった。

結局その後は父がモンスター討伐に出かけるまで続けられた。

：相変わらず一勝も出来なかったが。

化け息子に勝る化け親父。：こりゃ早く追い抜きたいな。

父の仕事は傭兵兼農夫である。

といっても、主にモンスターを討伐して安全を守る、という事をしているのだが。

途中で胡散臭い武勇伝であったが、父の最盛期時代の話を聞かせてもらった。

暴れ狂った火竜を討伐したことがある、とかきかされても、ねえ。

（笑）

まあ実力も、最盛期じゃないにしろ相当あるということは分かっているのです、

なんとなく信じられない事も無い気はするが。

「あ、ヴェンにーちゃん！」

「お、ハティか。なにしてたんだ？」

目の前でペコリとお辞儀する藍色ショートヘアの子。
名はセンチユエル・リニール・ハティ。

そう、この子はこの地を収める貴族様の3人娘の一番上。
性格は男勝りの元気で、貴族らしい気品の無い、だけでもやさしい子だ。

よくお忍びというか、勝手に館を飛び出しては、平民の子供と混ざって遊んでいて、

分け隔て無く接してくれる為、周りの平民からも気に入られている。

今でも他の子どもと遊んでいたらしく、ニヘヘ、と笑うと子供たちの輪へ戻っていった。

年齢は俺と二歳差。顔立ちも将来は美人となるであろう綺麗な顔立ちをしている。

あ、リアル執事に連行されてる。

少年少女も必死に助けてる。愛されてるなあ。

因みに、連行しようとしているのはセンチユエル家に使っているエルドさん。

逃げ出す彼女を見つけては、勉強をしないハティを連行しているのだ。

それは彼女が輪に混ざって遊んでいる最中でもかまわず連行するものなので、少年少女たちには余り好かれていない。

「彼は苦労人だからなあ。ま、ハティのことを二番目に大切に思っているのは彼だろうしな。」

村人は苦笑しながらそれを見ている。

無論一番目は親である。それも親馬鹿なのだとかで、娘達に向ける愛は人一倍強いらしい。

——まあ、まだ若い（24）のに白髪が混じるのが地味に早いのは、確かに彼は苦労人なのだろう。

「お前なにしてんだよ」

いつものセンチエル森：名前が安価なのは気にしないでくれ。

それよりも。クリーパーに命令をしなければ、と思いつつ入った俺は。

鍛錬で切り開かれた広場の中央丸太でポーズを決めているサムライ。

…こいつをどう思う？

何処かで悪い物でも食ったのか、と一瞬思いつたが、あ、口ねえわと結論に至る。
今世紀最大の謎だ。

「——ハッスル。」

「え」

なにやら変な単語が聞こえた。

「（やべえ、俺疲れてんのか！？いくらなんでも元の世界が…日本が恋しいからって流石にこれはないぞ！？それともお米なのか！？お米を食べたいが故の錯乱なのか！？意味わからねえ、とりあいず……）」

「喋った！サムライが喋った！」

某ハイジのように叫んでおいた。

No. 5! 「平民なる日常」 (後書き)

というわけでなんともまあ、サムライ君が喋りました。

なんだかボケが欲しかったのと、後半戦が寂しかったので勢いあまって☆

にしても、原作はアニメしか見てないので、ゼロ魔の設定とかわからんのよ。

宜しければ、今後ともお願いします。

誤字、認識の間違えなどがあればご報告お願いします。

No. 6! 「覚悟」 (前書き)

今回は下手糞なシリアス。

実際考えている事としている事が矛盾した所が多く出てきそうではあります。

次回で平民少年編は終わりに…なるかなあ。

No. 6! 「覚悟」

「とうっ!」

どうやら幻影でも、疲れていたために聞いた幻聴でもないらしい。
正義のヒーローばかりにかっこ良く^{ばくてん}猿轢を決めたサムライ。

——いや、俺の中のサムライのイメージが…。

「いや、願ってみるものでござるな! ヴェン殿。拙者のようなの
ーばでいでも願いたいというものは聞き遂げられるものとは! 拙者、感
動したでござる!」

「…えっと。どちら様?」

「のおおおっ!?!」

意気揚々と話しかけてきたサムライ(?)に現実を認めたくない俺は
思わずそう聞いてしまった。・・・にしても盛大なズッコケだな。

リアクションに俺が感心していると、サムライは立ち上がり、ぱっ
ぱっ、と土を払い。

「拙者は、サムライの中でも長き時主人(ヴェン殿)をお守りした
——」

「―鳶とんびと申しあげる！」

どうやらこのサムライ、名前まで持っていたようである。
一瞬某量産型の名前を言いそうで冷や冷やしていたが。

にしてもだ。

「なんで急に喋れるようになったんだよ!？」

残念ながら、俺は謎を自分でゆっくり解こうというタイプではない。
早急に今世紀最大の謎の答案を求めることにする。

――すると奴は目(?)を光らせ。

「よくぞ聞いてくれたでござる!それは昨日ヴェン殿が能力の実験
とやらを終えて、別れた後でござった!。」

「で、結論だけ聞こうか？」

「手厳しッ!…回想ぐらいいでござろう!？」

~~~~~

(サムライ視点)

「はあ…今日も対して調べられなかったな…。んじやな、サムライ」

「…。」

手をヒラヒラさせて言う主人を無言で見送るサムライ。

隣でまだなにやら咀嚼する音が聞こえていたが、特に目に留めることもなく、鍛錬を行なっている…

二匹はその広場へ足を進める。

パリッパリッ。

少々五月蠅いでござるよ。

そう二番目に主人に仕える事になった部下クリーパーに注意しようとしたが、

「……。」

出るのは沈黙だけである。

…もどかしい。然し、今に始まったことでもない。

過去にも、主人に言葉にして注意を促したかったあの時も。

刀でしか語る事ができないサムライには…辛い事であった。

心を少しとも手に入れる事ができたあの日からだ。

この気持ちに苛まれたのは…打ち上げる事のできない心の叫びばかりに悩まされるようになったのは。

『ちょっと…良いでしょうか？』

「……。」

何か声が聞こえた気がして、桜花は周りを見回したが、姿は部下意外にも居ない。

部下はしゃべる事が出来ないしー、一体。

『ああ…これは念話です。あなたの意識に直接話しかけてるんですよ。』

「……！」

驚いた。

『良かった、成功してたみたいですね。あらま…これじゃ会話に困るなあ…んじゃ、えいっと。』

「…お、」

『？』

「おおおおおおおおおおおおお！！！！」

感動だ…と、一瞬彼(?)の目(?)から滝のような涙が出ている  
幻影が見えるほど…。  
猛烈に叫んでいる。

積年の願いが適った。

…少々呆気ない理由ではあるが。

~~~~~

「えっと、ひょっとしてだが、その女の声の人って…。」

「主に『貴方を転生させた神様』って言えば解ると申されていたが…なるほど神様だったのでござるな。」

なんともまあ。

なにやら鳶に続きを促してみれば、第三の願いがカウントされなかったようだ。

うん、そーいえばノーバディって不老なんだよな。

んで変わりに送られた物といえば…。

何か見たことのある肩当。

「はて…？」

「?どうしたのでござるか？」

肩当…何か重要な事が思い出せそうだけでも…

まあ、良いか。

神様の事だから何時か必要になるんだろうし。

とまあ…。

「む、主人、」

「…ああ、わかってる…。」

エンカウント。

どうやら二人で騒いでいたせいで、敵さんと思われる者達を引き寄せてしまったようだ。

周囲でガサガサと音が聞こえる。

…数的には6匹。それに音がそれなりにデカイ。

（この足音は…又もやあの？おーく？なるものでござるか？）

ヒソヒソと俺に訪ねてくる鳶。

…いや、知らねえよ。俺だって聞きたいよ。

（そうなるど厄介だな…囲まれてるようだし…逃げるのは難しいな。）

切迫した殺気が立ち込める…冷や汗と共に未だに音を立てる周りの草むらを横目に、

この展開をどう切り抜けるか、という方法を詮索していた。

「（畜生…単純に切り抜けるだけなら増援を創ればいいんだけどな…。）」

同じく警戒しながら、何か思案している様子の鳶を横目に。

「（コイツ（鳶）らばかりに頼る訳にゃいかんしな…、）」

それに、増えれば隠すのも辛くなる。できれば危険は避けたい。

肩当は戦闘フラグだったか。

オークみたいな馬鹿力と接近戦は懸命ではない。ならば。

【凍てつく学究】

凍らせて一気に蹴りを付けるしかないのだろう。

ヴェンがシールドを構え、鳶が拔刀した。

「プギイイツ！」

それを開始とするかのように、一匹のオークが襲いかかる。

…ヴェンの予測は間違っ居なかつたようだ。

「!…せいっ!」

瞬間、鳶の流れるような動きで懷に潜り込み、刀で貫いた。
急所を狙つての攻撃のようで…恐らく心臓かもしれない、オークは
痙攣した後、あっさり絶命した。

それを見て、やはりヴェンが口元を抑えて、顔を青くした。

「むぐ…「プギッ!」うおっ!」

「主人、危ないッ!」

二匹目がいつの間にか背後から混棒を降り下ろそうとしていた。
慌てて前に飛び込み前転で回避。慌てて行なつたから腰を打った。
痛い。

フリザド
「氷よ!」

「フギッい!?!」

突然現れた冷氣……そして、氷。

力加減が分からない。凍りついたのはオークの左足。

否…力加減が分からないんじゃない。「殺す」事に躊躇しているんだ。

「(ち、畜生!殺らなきゃこっちが殺られるってのに!)こ、氷よ

！
」

「グィエエッ！」

悪態を付いてもう一度冷気を放つ。

…だが、やはり力が制限され、右足を凍りつかせるだけだった。
しかし、これで一応動きをある程度封じる事はできた。武器を振り落としている。

「四刀流……霧雨キリサメッ！」

鳶といえば…鞘をも用いた四刀で霧のように二体目のオークを切り刻んでいる。

「（あれが…、さっきまで陽気に話してた奴…なのかな…。）」

これが…戦い。

そして、更にオークの悲鳴が重なったかと思えば、戦闘していたのは、

あの、クリーパーだった。

「プギャアアアアー！」

ベチヨ。

水を叩きつけたような音がして、降りおろされた棍棒がクリーパーを押しつぶした。

…と思ったその時。

水銀のような光を反射した液体は、みるみる内に体を変形させ――。

「プギ――」

槍となって、オークに突き刺さった。

左胸に刺さっているようで、悶えるオーク。

銀色の槍はまた変形を初め、先端の部分が長い鋏。

そして。再びオークの体を貫いた。

あっという間に三匹のオークを絶命させた鳶とクリーパー。

あれだけ至近距離で確実に血が多く流れるような殺し方をしたというのに…。

――全く血がついていない。

否、表面に赤い部分があるのだが、その血は、まるで防水加工された布…傘にかかる水のように

地面へ滑り落ちていく。

これが…殺戮…否、戦闘。

初めてこの世界でオークが死ぬ所を見たと言うのに、トラックに轢かれた時だって見たのに。

血、死、死体を見ると、膝が震える。

すぐに逃げ出してしまいたい。

目を閉じて、現実逃避したい。気絶したい。

でも、死にたくない。

そう、生き残る事に決心した俺はー。

両足を氷漬けにされながらも、また武器を拾い上げ、構えるオークに対して。

「ごめん」

「氷よ！」

止めを、刺した。

この世界は前世のように平和に暮らせる世界じゃない。
平和ボケしたまま、生涯を終えられるような所じゃない。

俺は初めて殺した―目の前の完全に冷凍されたオークを目の前に、

ただ、静かに涙を流していた。

N o. 6! 「覚悟」 (後書き)

ノーバディー達は無双。

正直主人公戦わなくて良いんじゃないかってぐらいでござる。

まあ、ただ部下に任せっきりの上司ヴェンにはならないようにしますけど！

先頭描写難しい。

誤字、認識の誤りがあればご報告くださいませ。

N o. 6. 5! 「夢」 (前書き)

迷走。

そして量は薄め。

No. 6. 5! 「夢」

あの後、目眩がするやら、吐き気が来るやらで、両親を心配させてしまった。

俺が止めを刺したのは、一匹。

残りの5匹は、鳶とクリーパーが仕留めた。

はたから見れば、たった一匹である。…自分からすれば一匹でも…だけでも。

遺体は全て土に埋めた。…体の大きさが大きいだけに大変だったのだが…。

「……。」

二つの月に照らされる部屋の中、俺はベットで寝転んでいた。眠れない。まだ、全身が痛い。

——俺も何時かはあの事（殺し）にも慣れてしまうのだろうか。

そんな考えが脳裏をよぎり、「そんな訳がない」と頭を振って否定する。

人は良くも悪くも、「慣れて」しまいやすい。

もしそうになったら、と思うだけで背筋が冷やりとする。

繰り返される自負の念に疲れ、俺が寝ついたのは、長らく時間がたったあとだった。

「あ…れ…?」

俺が目を覚ましたのは、ベットの上ではなく、乾いた砂の上だった。周りは暗く、余り見通しが良くない。

ザザアア、ザアアア。

不意に波の音が聞こえたので、そちらに目を向けると。

元の世界と同じような、一つの月と海。
照らし出された暗闇の世界だった。

ふと、目を凝らしてみると、誰かが岩の上に座っているようだった。一瞬、俺は元の世界の夢でも見ているのかと思ったが、生憎とこんな光景は見たことはない。

それに――。

目の前の? 黒いフードの男? でここが何処が分かったところだった。

「…こんな所に客とは珍しい。」

見たことがある。

俺が前世で死んだ時も、今世の今でも正体が解らない、あの人物が居た。

「貴方は…？」

「ふむ。君は正式な客では無いようだな…。不思議な事もあるものだ。」

「客？」

一人何かを分かったかのように言う彼。

正式な客というのはなんなのだろう。

というかスルーかいな。

「おお、失礼。何、気にしないでくれ。」

君はとても似ているな…。今では名前を忘れてしまったが…。彼に似ている。」

…ふむ、君に解るように説明しよう。…君は夢を見ている。」

夢？

…痛くない。頬を抓ってもなにも感じない。

うん、そうなのか。

まあ、何となくふわっふわっとした現実味の無い感じがしてるからな

「君が此処に来れた理由は私には解らないが…」

彼は若干申し訳なさそうに言うと、

「求めている事なら解る…：君は答えを求めているようだな」

ずばり、俺の欲しかった事を言い当てた。

…夢だから、という事にしておこう。

「貴方はどう思います？」

「…どうだろうな。答えは私には答えられないかもしれない。」

…そうなのかあ。

まあ確かに、急に「殺しについて貴方はどう思う？」なんて答えを求められてもな。

というか、「死」っていう概念が無い所で生きてるからね…。

「只、殺しという行為に正当さや正義はない…：ということだな。」

…？

「殺しが全て罪というのは…：無論例外もある。」

例外？

「肉だ。人は肉を食べる為に生き物を殺すだろう。弱肉強食、だ。

それに、君は一度も蟻を踏み潰した事は無い、と言えるか？」

それは、言えない。

「逃げるようではあるが…、自己満足や無意味な殺しを避ければ良いのではないか？
時には守る為に奪わなければ成らない事もあるからな。

…その能力チカラをどう使う？」

この能力チカラを…？

「以外と答えは簡単な物だ。
まあ、力が無い物にすれば、？成し遂げる？事は実に難しい事ではある。

全てを温和に終わらせる事が出来ない事のほうが多い。それは力があっても同じかもしれないが。

だが、お前には力のある者だ。」

…そうなのか。

命を奪わないで済む方法…否、命を奪う必要性を発生させないようにする為に。

「答えは見つかったかね？…くれぐれも間違った選択をしないようにな。」

それと…それは元は私の能力だ。有効に使ってくれたまえ」

ああ、有難う。

探してみるよ。

最後に波の流れる音が聞こえ、俺の意識は薄れていった。

N o. 6. 5! 「夢」 (後書き)

頭の中が混乱中。

？彼？が誰なのか…、

どうして夢で彼を出そうと思ったのか、作者でも分かりません W

次回でようやく原作メンバーと出会い。

No. 7! 「旅立ち」 (前書き)

ふえーい、更新が遅れました御免なさい。

今回はついに、原作メンバーと出会う：瞬間手前までどうぞ。

No. 7! 「旅立ち」

とある日の昼頃。

待ってましたとばかりに手を振り上げ。

「キイイイイイイイイイイグウウウウウ」

サッ

「クイイイイイイムウウウ」

サッ

「ゾおお「やらせねーよ!」手厳しッ!？」

鳶^{アホ}の頭を殴って止めさせた。
ごほん…行き成り冒頭で悪いな。

あれから10年。

10年間ですっかり背も伸び色々変わってしまった俺だ。ヴェンだ。鳶が冒頭で叫んでいた（未遂に終わったが）通り、キング・クリムゾンだが許してくれ。

…この10年間。長かった。

否、実際終えてみると、案外早かったなーって感じではあるのだが、修業中は大変だった。

まあ、結局、村に任された仕事をこなしたり、使う余地があるかどうか怪しい系統魔法の訓練をしたり。

どうやら適正は風にあったようで、それなりに強い突風を起こすことが出来た。

——ランク？ かどうか解らないが、母によると「ライン」程度らしい。

因みに他の魔法については、同じくらい「火」があるぐらいだった。

…どちらも「まほう」に負けているから、はっきりといって微妙だけれども。

でもまあ、上位になると分身を作り出せるらしい。

単純に分身といえ、できなくもないのだが、俺の分身はダメージを受けると俺も受けた事になる。
しかし、風のスクウェアスペルの分身は…某忍者漫画の影分身のようなものらしい。

辿り着くには高い壁があるけども。

………

「ヴェン、それは考えて決めた事なのか？」

「そうよ。そこだけはハッキリとなさい。」

昼の食卓。

飯を食べ終え、俺はある決意を両親に話す事にした。

この世界での成人が今一解らないのだが、俺はもう20なのだ。（

前世合計38。）

そろそろ見られる物を見たくて旅に出たいと思っていた。

のんびり平和に暮らしたいとは思わない事はないが、
やっぱり異世界なのだ、冒険しなきゃ損だよなあ。

んで、俺が、

「色々知りたい事、やりたいことが在るんだ。だから…旅に出ていか？」

そんな事を告げると、先程の両親の再問。

俺はゆっくり頷いて、

「ああ。それが俺の願いだから。」

「「……………」」

俺が割化し緊張しているが、堂々と言い切った後、
両親は二人とも思案顔になって唸っていた。

——そして痺れを切らしそうになった時。

「…わかった。なら、？あれ？を持っていきなさい。」

親父は重々しく頷くと、自室へ歩いていき。

——程なくして、大振りの剣を持ってきた。

その剣は一般世間でいう大剣：もしくは両手剣と呼ばれる大きさ。
No. 7でいう？クレイモア？より大きめで、片手で振るうのには
難がある。

ロングソードか。

鞘のカラーは薄い緑で、長年愛用されていたと思われるような傷が
あちこちについている。

しかし、錆びが少しもない所を見ると、良く手入れされているようだ。

——いや、基準はわからないけどね？

「父さんが母さんと結婚する前まで……傭兵時代の時愛用してた剣だ。」

おお…それは年季が感じられる訳だ。

って、結婚するまで？したあとは何使ってたんだ？モンスター討伐とか…

…まあ、いいか。

「父さんにはもう使う機会が無いかもしれないから…。ああ、後碓石もだ。手入れはちゃんとするんだぞ？」

ずしり。

おお、思ったより少したが、軽い。

「あら…その剣を見ると思いだすわねほら、あの時の……」

なにやら昔話を始めた二人。

なんだかんだで、夫婦水入らずの生活でも送りたかったのではないだろうか。

二人とも見た目こそまだ若いが、年は確実にとっている。

——俺はここから死ぬまで姿に変化は無いんだけどな。

ちょっと寂しくなった俺だった。

・
・
・
・
・
・
・

「ほほおー、主人のお父上の愛剣でござるか…。」

「ああ、傭兵時代から使ってたらしい。」

所変わり森の中。

数の増えた丸太の上に、俺と鳶は座って会話していた。

此処も変わった物だ。

…少なくとも良い意味では無い。残念ながら。

広場のスペースは何倍かに広がり、地面が抉れている所、隆起している所。

大惨事である。

「それにしても良く見つからなかったよなあ、ほんと…」

「？」

「いあ、なんでも。」

どうしたでござるか？

と言わんばかりにしみじみ修行の日々を思い出す俺に疑問符を浮かべている鳶。

「んで、その剣って凄いのか？」

「大した業物でござるな。これを作った匠に御会いしたい。主でも解る通り、結構な年季物。」

お父上も手入れ怠っていなかったのでござろうなあ。」

べた褒め。

というか鳶よ、お前自分の愛刀しか使わんだろ、なんで詳しいんだ？

「拙者としてサムライである前に一人の剣士でござるよ！」

だそうだ。俺にも解る日がくるんだろーか。

：能天気な癖して割りと博識なんだよな、コイツ。

と、

ペタリペタリ。

独特な足音と共にクリーパーがどこからともなく歩いて来た。

「お、ちゃんと来たな。って何銜えてんだ？」

クリーパーを掴んで目の前まで持ち上げる。

あからさまに毒毒しい色のキノコを銜えていた。

ああ、これは…。

「…クリーパー、エゾテングダケ（毒キノコ）をキャプチャーしたみたいだな。」

否、実際この世界にはない。ただ、一応毒キノコではある。それも人を致死させる程の奴。

ただ、直感的に言いたくなっただけだ。気にしないでくれ。

——まあ、大丈夫だろうからジタバタし始めたクリーパーを降ろしてやる。

「所で主、何時出発するのでござる？」

「主じゃなくてヴェンって呼んでくれよ……明日の朝。」

「ムシヤムシヤ」

「明日の朝でござるか…、拙者達は？アレ？の中でござるか？」

「うんむ。」

説明しよう！

？アレ？とはNo. 10「ルクソード」武器であるカードの事である！

自分がカードに入り込んだり、カードに相手を閉じ込めたりとしている所からヒントを得て、

「これなにか保管したり保存したい時に役に立つんじゃない？」という考えに至り。

結果、見事に対象を保管させる事に成功した。

一枚につき一つしか物を入れられないのだが、カードの数は無限にある。

出そうと思えばポンポンでるのだ。

ただ、事実物をコンパクトに保管するだけなので某猫型ロボットの四次元ポケットより不便だ。

まあ、その代わりなんと、カードの時を操れるようなので、食材等も保管できる。

因みに中の物を取り出す方法としては、俺が解除するしか無い。

とまあ、これに鳶達をバレずに運ぶ事が出来るわけである。

ただ、如何せん中は何もないから暇らしい。俺はまだ入ったことないからしらが。

主にそれが鳶の不服らしい。

「拙者が自由に表を歩けるのは何時になるのでござるかなあ。」

「…ん。善処するさ。」

何時かはそんな場所を作りたいと思う。

前にも言ったであろうが、時間はあるのだ、のんびりでも確実に探せる筈だ。

【運命を賭す者】

称号を唱え、カードを創り出す。

表まっさらなカードが二枚出たのを確認して、

「んじゃ。」

「御意。早く出られる事を期待するでござる。」

パアアツ

光と共に鳶の姿が消え、カードにサムライが描かれる。
それを確認すると。

「次はクリーパーと…こら、逃げるな。」

毒キノコを食したクリーパーは再び歩きだし何処かに行こうとしていたので、
むんずと両手で捕まえてから、ジタバタするクリーパーを同じようにカードに保管した。

二枚のカードが無事保管されたのを再び確認して、布のバックに入る。

「……。」

長年お世話になったセンチエル森に静かに俺はお辞儀すると、
剣を背負い治してから。

背を向けて村へと戻るべく足を踏み出した。

・
・
・
・
・
・

「明日から旅に出るんだと？そりゃあ寂しくなるなあ。」

長い間お世話になった、大工のラトクさん。

この人には折れた鍬などの修理なのでお世話を掛けた。

鍛錬ギャラリーの一人で、気前の良い親父だ。

「はい。そろそろ、その時だと思ひまして」

「堅苦しい話し方は止めろよ。…ふむ、確かに思えばお前も随分で

かくなつたもんだな。」

餓鬼の頃なんて、嵐が吹けば吹き飛ばすようなチビだったのにな、と懐かしそうに言うラトクさん。

そりゃ、20にもなれば昔のヒョロとした所も無くなるだろう。

「何時ぐらい戻ってくるんだ？」

「そうですね…じゃなくて、そうだなあ、何時になるかはわからないな」

見るもの見てからじゃ遅いかもなあ…。

ラトクの親父も、元気とはいえ歳でもある。

もしかすれば、王都か何処かで職に就くかもしれない。…というか就くだろう。

「まあ、報告には戻ってくるよ。」

「ああ、忘れるんじゃないぞ。…それじゃあ、俺は仕事がある。」

「わかった。仕事、頑張って」

言われなくとも、とばかりに鼻を鳴らして作業場へと戻っていくラ
トク。

さて次は……。

んー、ハティはいま魔法学院に居るんだっけか。
なら挨拶出来ないな。残念だ。

「えー兄ちゃんどっかいっちゃうのー？」

「何時戻ってくるのかしら？」

「へえー兄ちゃんもついに出るのか。」

村の少年少女。

よく昔話を聞かせて貰ったお婆ちゃん。

先程のラトクの親父の弟子さん。

村人に挨拶を済ませて行く。

途中、子供達と遊んであげたり、家へ招いてもらったり。

そして、日は落ちて、夜。

「答え…見つかるかなあ。」

俺は朝早く村を出る為、早く寝付く事にした。
ぼそりと今回の旅の目的の一つに対する不安を呟いたのだった。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「ご馳走様」

朝。

若干息子の旅立ちを祝ってか、豪華な朝食を食べ終えた俺は、自室から、カード等、色々入ったバックと、着替えを肩から掛け、譲り受けた剣を背負い外に出る。

黒いフード付きローブを着込む。以外とお気に入りである。

今日は幸いな事に天気だ。

旅立ちが雨だとか、正先が悪すぎる。

「荷物は持った？忘れ物してないかしら？」

「大丈夫だよ母さん。ヴェンだってもう大人だ。」

「はは…、そうだよ母さん。」

まあ確かに、遠足等とは違うのだ、忘れ物はしたくない。もう一度荷物を確認してから、

道中にある森を進んでいたら、行き成り雨が降り出したのだ。

ついていないいな、と内心思いつつ、雨宿りする場所は無いかと、木の下を走りながら探すこと暫く。

「…小屋か。彼処で雨宿りさせて貰うか…。」

コンコン

「すみません、誰かいませんか？雨宿りさせて貰いたいのですが…。」

「

反応がない。

人気もしないし、ひよつとしたら留守にしているのかもしれない。

周りを見渡しても、同じような小屋は見えない。

…仕方がない。

「失礼しますよっと……うお…クモの巣貼ってる…。」

どうやら長い間人に利用されていないであろう事を示すように、埃とクモの巣だらけだった。

一応、毛布が敷かれた同じく埃を被ったベット、椅子、テーブル等がある。

汚いけど、我侭は言えないし、これでもマシなほうかな、と思いつつ。

「えー…今頃雨止むなよな…もう」

外を見てみれば、先程の雨は何処へ、また晴れていた。

若干その事に愚痴りつつ、まあ、休憩でもしているか。と思い埃とクモの巣を払って椅子に座る。

荷物は床に置いて置く。

「ん?」

ふと、埃だらけの光景に見合わないような真新しい箱があった。箱といっても長方形というか？長いものだ。

近づいて開けてみる。

「えええっ!？」

まさかである。

この世界でけして、科学の発達していないこの世界で見る事になるとは思わなかった物をここで見る事になるとは。…それにしても何故これが？

「ロケット弾だなんて物騒なもんを…。」

筒丈に折りたたまれたそれは、まさしく対戦車用ロケットランチャーだ。

えーつと…「M72 LAW」？詳しくは知らないけど、たしかM^{メタル}ギアソリッドGSで出てきたよな。

然し、誰がこんな物を――。

再び箱にM72を直すと、椅子に座って思案する。

その時だった。

ドアが静かに開き……。

「「！」」

今、運命の歯車が、回り始めた。

No. 7! 「旅立ち」 (後書き)

てなかんじで第七話。

時間を掛けた割には、話が進んでいないという事実。

……文才が欲しい。

原作メンバーとの出会いはフーケ編から。

なんか結構無理やり臭いですが（へへ、；）

「破壊の杖」のは合ってますかね？

一応wikiで調べはしたんですが。

さあーって…次回は難しい戦闘描写…。

誤字、認識の間違い等あれば、ご報告くださいませ。

No. 8! 「vsゴーレム」 (前書き)

戦闘描写。

というか、更新が遅くなりました、すいません。

保存するの忘れてデータが一度吹っ飛びました(汗)

今回はノーバディ達は出ません。

No. 8! 「vsゴーレム」

「「!」」

俺が出会ったのは、図体が熊のような、気前の良さそうなおっさんでもなく、

威張りくさったような、偉そうな貴族の男でもなく。

青髪の小柄な少女だった。

マントや杖を見る限り貴族だが。

「っ…黒いローブ…」

俺を見た途端警戒して、杖を構える少女。

あちゃー…この子が所有…というか関係してる貴族なのかも…

「わ、悪い。雨が急降ってきた物で…雨宿りしてたんだ。」

「……。」

俺が慌てて理由を説明するが、未だに表情を変えず、警戒する彼女。な、何かりアクションが貰えないと辛いな…。

「ねえ、何か見つけたの、タバサ…って黒いローブ！」

「……まって」

「なにしてるのよタバサ。黒いローブの男って正にこの男じゃないの！」

「フーケ？俺の名前はフーケじゃない、というか誰だそれ。」

俺の言葉に、後から入ってきた赤い髪の少女…恐らく青い髪の毛の子と仲間なのだろう。

も、怪訝そうな目で俺を見てくる。

「貴方本当にフーケじゃないのかしら？…つくならもっとマシな嘘を付きなさいよ。」

「いや、バレたかあ、ってそうじゃなくて！俺はフーケじゃねっての！ヴェンっていう名前があんだよ！」

「へえ、んじゃヴェンさん。本物のフーケは見たかしら？」

知らない知らない。
というか、

「フーケって誰？」

俺の質問に、彼女達は目を見合わせると小さな声で、

「……嘘は言っていないみたい」

「本当に何も知らないのね…、」

そこで漸く警戒の色が薄れる二人。

「ん…自己紹介させていただくわね。私の名前はキュルケ…長いからキュルケでいいわ、
なかなかカッコイイ平民さん。」

「…タバサ。」

「あ、ああ。ありがとう。…改めて、旅をしてる。ヴェンだ。」

どうやら威張りくさった貴族様…ではないらしい。
まあ、それでもまだ見下した感は抜けていないが。

——まあ仕方ないか。

「んで、答えてくれなかったらそれで良いんだが…？フーケ？って誰だよ？」

「貴方まだ街に行っていないの？」「ああ。」…なら仕方ないわね。」

なんだかんだで教えてくれるらしい。

「フーケってのは、ここ最近…というか暫くだけと貴族の間で噂になってる大泥棒の事よ。」

「大泥棒ね…」

「優秀な土のメイジで、二つ名は？土くれ？…ゴーレムの大きさからして、トライアングル…くらいかしら。」

トライアングルか…といっても実際に見てみなきゃどれだけ凄いのかも想像つかないな…。

「なるほど…で、なんで君たちは俺の事をフーケと？」

「まあ…いろいろあって私たちもソイツに盗まれてるのよ。それで、私たちは協力してフーケを捕まえる事になって、」

「うちの仲間の子がなんだけど、フーケが物を盗む際にその姿を目撃してるらしいのよ。」

「…それが黒ローブの男」

なるほど…、

「情報では、この小屋を拠点に使ってる、っていうのだったけど…

この様子じゃハズレみたいね。」

偶然、黒コートを着て、この小屋に居た、という事から疑われたわけか…。

なんつーか俺、不幸だな。

「さ、行きましょう、タバサ。ダーリンにも報告しなきゃ。」

「…（コクリ）」

「さようなら、平民さん。」

「ああ。」

と、二人が出ていこうとした時。

ゴゴゴゴゴゴ

「なっ、地震…!?!」

『きゃあああああああ』

「つ、この声はヴァリエール！タバサ！」

「……フーケのゴーレム」

「ここが拠点だってことはアタリみたいだったわね…、杖をもってない…貴方は違うみたいね。」

二人の後を追ひ、外に出ると、そこにはそびえ立つ巨大な土のゴーレムが。

「でけえ…。」

少なくとも、オーク鬼は軽くある。

これが、トライアングルクラスの實力か…と感心。

「…（呪文詠唱の声）」

タバサは既に詠唱を開始、杖を前に出すと、

「トルネード」

ヒュゴオオオ！

竜巻を発生させ、放つ。

強風か、真っ直ぐ、ゴーレムに吸い込まれるように当たる。中々の強風だ、流石に、機関メンバーのほうには負けるが、高いクラスであることは間違いない。

だが。

目立った傷一つ付いていない様子を見ると、ゴーレム（相手）のほうが強かった。

「（風じゃ分が悪いとは云え…強度は凄いな）」

「私も行くわよ！…ファイアボール！」

次はキュルケがスペルを唱え、大きな火の玉を作り出す。こちらも中々大きい。これならダメージが…

メラメラ、と着弾したゴーレムの表面を焼くが、

ブウウン！

ゴーレムの一払いで鎮火。焦げたぐらいで目立ったダメージにはなっていない。

「ッ…あのゴーレム、中々ね…。」

これにキュルケが舌打ちする。

中々所か、大分だと思っただが。

ゴーレムのすぐ近くにいる、ヴァリエール嬢の姿を見て、

「（俺が動いたほうがいいのか？）」

然し、ノーバディー達と同じで、人前では封印している能力。

…え？このままで（能力未使用）いけて？

このままであのゴーレムに勝てるほど、化け物にやなっちゃいないぞ。うん。

たしかに、血を吐くような訓練はしたが、飽くまで一般人より強いって程度だ。

そこへ能力使用によるステータスが+される、ということだ。

それに不老なだけであって、消して不死身ではない。

場合によっちゃ、食中毒で死ぬこともある。

——ただまあ：死んだ事ないから解らんけど。

「タバサ、シルフィードを呼んで頂戴！」

「：（コクリ）」

「（黙って見捨てるほど、俺は落ちぶれちゃいないしな…）」
【静かなる豪傑】

今回はN O・ 5「レクセウス」を選択する事に。

実際、まだ他に選択はあったんじゃないかと思うだろうが、

まあリスクを少なくするなら、これが良いんじゃないかと。

一回の戦闘で一回までしか能力使用が出来ない、なんて事はないかな。

と、今にもヴァリエール嬢迫るゴーレムを止めようと歩を進めようとしたその時。

あの科学兵器ミサイルランチャーと同様、見ることになるとは思わなかった物を見る。

「ルイズっ！」

黒髪の少年。

そして服装といえば、現代的な物。

背中に錆びた長剣を背負っている事を除けば、何処にでもいるような高校生に見える。

「（…でもなんでそんな人物が？）」

……

「（まあいいか。聞いてみりゃ解る事だし…）」

と、なにやら、揉めている二人。

否、そこ危ないから！さっさと逃げようよ！

何やら「貴族だから逃げる訳には行かない」等と聞こえたり
乾いた音がしたと思ったら、少年がヴァリエール嬢の頬を平手うち
してたり

「お前ら逃げろおおおおおおお！」

「「え？」」

二人に迫るゴーレムの拳。

なんとか間に合う。二人を押しのける。

次の瞬間、ものっそい重量が体に襲いかかる。

「ぐあっ……ふんぬううう！」

一瞬意識が飛びかけたが……
というか飛かけるだけで済んで良かった。

怪力は怪力といっても、見事にスプラッタになる可能性がある。

——まあ、賭けに近い。

「うおらっ！」

掛け声が余裕そう、だって？

ノンノン。むっちゃ辛いです、全身、特に足と腕が悲鳴上げてます。なんとか、ゴーレムとの力の競い合いに勝ち、押し返す事が出来た。

然もよろけてくれている。

真逆、人間に返されるとは思わなかっただろうな。

無論、隙を見逃す気はない。

俺自身もよろけながらだが、アックスソードを召喚して。

「土よ！（クエイク）」

アックスソードで地面を叩き付ける。

クエイクというのは、地面を隆起させて串刺し、もしくは敵を打ち上げる「まほう」。

発動には地面に何らかの？衝撃？を与える必要がある。

敵を単体で狙って隆起させる事は勿論、直線上に連続で隆起させるタイプが。

今回は、ゴーレムの足を隆起させた土で貫き、バランスを崩させるのが目的なので狙い型。

「せやっ！」

ガキッ、ズゴォン！

狙い通り、クエイクのまほうはゴーレムの片足にHIT。
あの大きい図体ならば、片足だけでは支えられない筈だ。

だが。

それは、ゴーレムが再生しなかったら、の話だ。

ズズズッ、と折れた片足が猛スピードで隆起した土も呑み込み、元通りに。

「ちくせう！（畜生）フーケのゴーレムは化け物か！」

「ちょっと、貴方…なにものなのよ？す、素手でゴーレムの腕止めたり…」

「質問は後にももらえると有難い！あの二人を！」

「え、ええ。貴方は大丈夫なの？倒す手立てはお有りかしら？」

「大丈夫だ、問題ない。…と言いたいけどな。取り合えず時間は稼ぐ。さあ行ってくれ！」

話している内にも、着々と力が上がっていくのが解る。

上昇の基準が、通常verなのかリミットカットverなのかは解らないが、…比べようがないからな。

ただ、気力の上がり下がりによって出来る事も変わるから制御は繊細で他のメンバー同様これも難しい。

キュルケが二人を、特に、「貴族の誇り」がどうか言ってるヴァリエール嬢を連れて何処かへ行くのを

見送ったあと、完全に片足を取り戻したゴーレムへと向かい合う。

パンパン、と手を払って。

「てめえは奴らを殺したいだろうが…悪いがこっから先は一方通行だあ！」

どやあ…

Side キュルケ

「ここまで来れば大丈夫ね…あの平民さん大丈夫かしら…？」

「今すぐにも引き返すわよ！フーケを捕まえなきゃ…後、あの意味不明な平民の事も調べなきゃ！」

「あつ、ルイズッ！ごめんキュルケ、直ぐ彼奴連れ戻してくるから！」

「またもや懲りずに元の道を引き返していくルイズ。」

「ダーリンは連れ戻す為に追いかけて…って態々二人をここまで連れてきた意味ないじゃない！」

「私はため息を付いて、二人を追いかける。」

「ごめんなさいね、平民さん。貴方の努力、無駄になりそうだわ。」

S i d e ヴ ェ ン

「うおおおおお！」

雄叫び。

そしてオーラの量は更に増え、暑苦しさすら感じる程に。

まだスーパーサイヤ人ほどは出ていないが。

ガゴッ！

先ほどよりも軽くなったフットワークと、アックスソードでの一閃で腕を叩き切る。

尚も再生を繰り返すゴーレムだったが、段々と遅くなってきた気がする。

「（まったく…このままゴーレムを倒せるのは目に見えてるが・・・その後が面倒だな。）」

時間が経つごとに脆くなるゴーレムと、時間が経つごとに強くなる俺。

言わずとも勝敗は決まったようなものだが。

「（フーケの野郎を取っちめないといけないしな…捕まえられるか心配だ…。）」

「覚悟しなさいっフーケ！」

「っなあ!?!」

突如、後ろから物凄い音と共に衝撃を受け、俺が吹き飛ぶ。
まさか、フーケか！？否、でもさっきの声は：

体制を立て直し、目を向けた先には、ヴァリエール嬢の姿が。

「おい、ルイズ！なんであの人を攻撃したんだよ！」

「ち、違うわよ！ゴーレムを狙おうとしたら、何故かそこが爆発しちゃって！」

なん…だと…。

今のは爆破ミスだったのか！あぶねえ、まじあぶねえ。

狙いかもしれない俺の体内だったら、汚ねえ花火になるところだったぞ！

おそろべし！爆発少女ヴァリエール！

…って、そんな事考えてる場合じゃなくて。

「そおおうい！」

迫る拳を切り捨てる。

奥義で葬りさってもいいが、残念ながら未完成だ。

…あ、そーだ。

「少年！取ってきて欲しい物がある！」

「な、なんだ?!」

「小屋があるだろ? フーケの拠点とか言われてる場所。其処にミサイルランチャーがあるはずだ。」

「なっ、ミサイルランチャー?!」

「ああ、時間は問題なく稼げるが早急に決めたほうがいい。いそいでくれ! 長方形の箱にはいつてる!」

「任せろ!」

「ちよちよっと! サイトは私の使い魔なのよ、そんな勝手なこと…」

「悪い、嬢ちゃん! これもフーケを捕まえる為だ、分かってくれるな?」

やっぱり知ってたか。現代的な装いと言い、そうじゃないかと思っ

た。小屋へ走り出した少年…もといサイト。ヴァリエール嬢はそれを見て講義の声を上げる。

俺の答えに渋々だが納得してくれたようだ。

「(フーケの搜索を頼もうと思ったが…プライドが高いみたいだな。)

恐らく彼女は俺の指示を受けてくれないだろう。
予想ではあるが間違ってる気はしない。

再生を終えて、俺を攻撃しても一向にダメージが与えられない事に遅くながら学習したようで、ターゲットをヴァリエール嬢に移したようだ。

ズシンズシン、と土煙を上げて歩き、拳を振りかぶる。

「きゃあ!？」

「させるか!土よ(クエイク)!」

足をクエイクで碎いて、拳をアックスソードを投げて切る。

回収しなければ素手だが、時間も時間だ、今なら素手でも互角以上に戦えそうだ。

森のほうへ飛んで行くアックスソードを見ながら、仕方なしと拳を握る。

と、その時、俺のほうにも遂に救世主が。

「持ってきた!一応、俺使えるみたいだから、俺が狙っていいか!？」

「え…?君はソイツ(ミサイルランチャー)使えるのか!？」

「多分、俺のルーンが関係してると思うんだけど…」

いろいろと聞きたい事はあるが。

俺も使ったことは無い。というか前世で持てる訳ないよそんなもん。まあ好都合だ。使える奴が使ったほうがいい。

「わかった！一発お見舞いしてやれ！」

「おう！」

ルーンの力がどうか言うのだが…スムーズに展開を終えた所を見ると問題ないようだ。

にしても、俺たち初対面だよな…？

「くらえ！」

そして、サイトの持つ対戦者用ミサイルランチャーが。

バシユッ！

音を経て射出された。

そして、化学兵器はゴーレムへと着弾し。

ドカアアアアアアアアアアアン！

上半身を木っ端微塵に粉碎した。

残った部分もボロボロと崩れ落ちていく。

「やったわ！」

「ああ、フーケのゴーレムを倒した！」

動かなくなったのを確認して二人が喜びあっている。

俺は能力解除して、ふう…とひとまずの仕事を終えて座り込む。

まだ「フーケの捕獲」という詰めが残っているが…奴は恐らく精神力の消耗のしすぎで、今頃疲れ果てているだろう。

それに、恐らく逃げる体力は残してあるのかもしれない。

相手は土のメイジ。追いつくのは無理かもしれない。

「ちくしょー…くたびれ儲けの骨折り損…二人を守れたから良いとするか」

なんか、どっと疲れが出てきた。

能力使用状態の時は息が乱れる事も無かったってーのに。

これも能力の一部なのだろうか、と思索していた所。

「だ、大丈夫ですか!？」

と、その時。

森の中から緑色の髪の毛のメガネを掛けた女性が現れた。

ふむ…? この人も仲間、か?

バサッバサッ。

ふと翔く音と共に、青い竜が現れた。

…うわー、風竜か? これ以上敵は嫌だよ、見方であってくれー!

と、半派都合のいいことを考えていたが、一応警戒する。

「ダーリン、大丈夫?」

風竜に乗るキュルケとタバサの姿が見えて、

「(はあ…、助かった…)」

俺は安堵のため息をついたのだった。

だから警戒出来なかった。

カチャ

「助かったわ。」

「ミス…ロングビル？」

「「っ！」」

裏切り者…否、フーケが襲ってくるという事に。

ミサイルランチャーをこちらへ向けるミス・ロングビルもとい、フーケ。

「ちっ…油断した…アンタがフーケだな？」

彼女はメガネを外すと、

「良くわかったわね。」

No. 8! 「vsゴーレム」 (後書き)

て、なわけです第八話です。

実際戦闘と言っても、同じ事繰り返してるだけだったんですけどね..
(; ˊ ˋ 。 ˊ ˋ) ..

まあ、そこは苦手なのでご容赦を。

もう一度アニメを見直そうかな..
それとも原作買ってこようかな..。

後で、「能力レポート」なるものを割り込みで投稿します。
そこに詳細を書いていこうと思うので、良ければ目を通してやってください。

それと。

『^{ツェン}村雨は使い魔を召喚すべきか?』

これについて、意見を聞きたいと思ひまして。

実際、ノーバディー居るなら使い魔要らなくね? って感じではあります。

まあ、することになったらそれで、何を召喚するか決めないといけないですね。

では今回はこの辺で。

誤字、認識の誤りがあれば、ご報告くださいませ。

N o. 9! 「捕獲成功」 (前書き)

進展が無い

遅い

短い

がんばった前回に比べて、異常なほどの低クオリティ。

え、量意外特に、変わらないって？

No. 9! 「捕獲成功」

何も知らない、というのはとても怖い事である。

適切な医療方法を知らなければ、下手すりゃ怪我人の命を奪う事があるように。

目の前の女性も――フーケもどうやら？知らない者？のようだった。

「「「「……」」」」

ロケットランチャー！
化学兵器をこちらへ向ける、ミス・ロングビル、もとい、フーケ。
そして、それを向けられる俺たち5人。

とても不味い状況だ。

俺だけなら、なんとか能力でもなんでも使えば、逃げ出せるが…。

「（この四人をどう助けるか…？）」

残念ながら、助っ人（鳶、クリーパー）は小屋に放置してしまった。
：というか、それは流石に隠しておきたい事なので使うかどうか、
といえは使わないのだが。

もし使うなら、最初っから使っとけと。

ただ、そうするとこの事態の解決が難しい。
能力もあのアックスソードを回収するまで使えねえし…、説明する
のを忘れたが、

『出した武器を手にした状態のみ、能力の解除・変更が出来る』

これが分かっている事の一つだ。
キーブレードならば、距離が離れてても戻ってくるんだけどな…。

あれ、詰んでね？

それともあれなのか、某ゾンビゲーのウェ○カー(?)みたいに両手で弾を受け止めろと？

——無理言わんといってください。

タイミングみすれば木っ端微塵って、試す度胸ないれふ。

…ロケットランチャー？

あ。

「H A H A H A H A ! !」

「「「「!?!?」」」」

「恐ろしすぎて気ににでも触れたのかい…?」

全員ビククリ、フーケは引き気味。

：酷いな、俺はそんなリアクション求めちゃいないのに。

と、兎に角、この空気に耐えられないので行動に移す。

能力のせいで、ダッシュの時に地面が盛大に抉れたが、これなら直ぐに取り押さえられそうだ。

「ちっ！アンタも馬鹿だねえ、死にな！」

単に俺の勘違いだったらどうしよう。

一瞬、そんな不安がおれの脳内を走ったが。

カチッ

…杞憂であつたようだ。

「ふんっ！」

「くあっ…畜生…！なんでだい…！？」

構えたロケットランチャーを蹴り上げ、そのままバク転して姿勢を戻す。

——ふ、カッコつけ乙だな、俺。

ちなみにバク転は鳶直伝のものだったりする。…初めて喋れるようになった時確か彼奴してたもんな…。

強引に持っていたから、腕を痛めたな、罪悪感が微妙に沸くが、…しめたぞ。

——…あれ、どうやって拘束すりゃいいんだ？

とりあはず、両手を背中で組むように抑える。

「ちっ…！」

「諦めろん。…誰か縄もってないか？」

油断は出来ないが…どうやらこれで解決みたいだ。

ガラガラガラ。

所変わり、武器も回収、現在俺は馬車の上である。
座席にはキュルケ、タバサ嬢、逮捕されたフーケ、そして向かいに
はサイト君とヴァリエール嬢、が居る。

何故か俺は運転席に。

どうやら俺しか馬車を扱えないらしい。…かく言う俺も得意ではないのだが。

——本来ならば、事件解決、ではさらば…だったのだが。

『待ちなさいよ、アンタも関係者なんだから一緒に来なさい。』

何故か不機嫌顔のヴァリエール嬢の一言で、俺の同行が決まった。どうやら、街に行くのは後になりそうだ。残念。

まあ…馬車も動かせないのだから仕方ないしな…と思い現在に至る。

「さて…聞かせてもらおうわよ、平民さん。」

「はあ…忘れてくれると有難かったけど…。んで、お嬢さんは何が聞きたいんだ？」

どうやら事情聴取は回避出来ないようだ。

「あ、俺も聞きてえ事があるんだ！」

「あら、ならダーリンが先でいいわ。」

ふむ…サイト君が先か…という事は、多分俺と変わらんな。

「アンタは…アレ（ミサイルランチャー）の事を明らかに知ってるみたいだった…合ってるよな？」

「うんむ、そうだ。知ってるよ。」

「って事はアンタは…！」

「ちょいまち」

やはり、というように迫るサイト君。
…俺はそれを片手で押し止める。

「ね、ねえ、アンタ達、さっきからなんの事話してるのよ？」

「秘密、だ。…まあ、君たちには害は無いから気にしないでくれ。」

それからヴァリエール嬢は一瞬ムスっ、とした顔を作り…「まあいいわ。」

そう言ってフーケへの尋問へ。

「……。」

タバサと言えば、やたらと分厚い本から視線を外さず、無言。

「……。」

フーケのほうも、尋問するヴァリエール嬢を見ながら、こんなガキに話すことなんてないよ。とばかりに無言。

「はあ…」

とりあえず、ため息を付いておいた俺だった。

学園へと戻る道は平和なようだ。

ただ、地面が雨でぬかるんだりしていて、少し尻が痛くなったが。

「んで、俺からの質問だけでも。君はどういった経緯でここへ？」

「そのピンクブロンド：ルイズに使い魔として無理矢理召喚され
たんだよ」

「わ、私だって好き好んでアンタなんて召喚したいと思ってた訳な
いわよ！」

「あれ、じゃあ帰れないのか？」

「…俺は諦めない。なあ、アンタ、帰り方とか知ってたりしないか
？」

無様ねW…ゲフン、んー、と言っても俺はどこでもドアなんて事は

出来ない。

藁にもすがるような思い（そう見える）で聞いてくるサイト君。

まあ、解らない気もしない。突然、見知らぬ場所へ連れてこられて、「返せない」なんて言われたら…。

「すまん…俺も解らないんだ…でも、協力しよう！」

「そ、そうなのか…：はあ…」

落胆してるな。

魔法の中に、転移魔法なんてものが残念ながらこの世界にはない。

否、もしかしたら、只知られていないだけで探せば見つかるかもな・
・。

さしずめ、テレポート（空間移動）ってな。

——うん？でも、某白黒ジャッジメントみたいなテレポートだったらどうしよう。

「（俺の能力の中に無いか…：まあ、関わっているとすれば、確実に属性…空間だろうな。）」

「んじゃ…次は私から。…さっきの馬鹿力といい…貴方何者？」

「人間（キリ）」

「私の知ってる人間はゴーレムの拳を素手で止めないわよ…。」

ここに居るじゃまいか。

一応、基本は人間だ。まだ辞めちゃいない。

「……。　（疑惑の目）」

「まだ人間辞めたくないだけだよ、言わせんな恥ずかしい」

なんかサイト君が疑惑の目を向けてきたので。

「…なんでフーケはその…？破壊の杖？を盗もうとしたんだ？」

「武器商人相手に売ろうとしたんじゃないの？」

「なるほど…。もう使えないけどな。」

その為に盗んだというのなら、納得出来る。

あれ、というかそれしか目的らしい目的無くね？

金目的なんだろうから。

結局そのあとは、フーケへの尋問を放置、俺への質問タイムで占められたのだった。

No. 9! 「捕獲成功」 (後書き)

雪「酷い出来だ。」

ヴェン「無様ねw」

そして今回も登場しなかったノーバディ。
…何処でどう出そうか……。

N o. 1 0! 「魔法学院到着」 (上) (前書き)

思いつた分だけ投稿。
前回といい短すぎるよね。

(下) はしっかりいつもぐらいの量にさせていただきました。

No. 10! 「魔法学院到着」(上)

「へえ…ここがその魔法学院なのか…。」

ホグワーツ…ではなく、トリステイン魔法学院。

現在、長い尋問の末に、若干気分が悪くなるという症状を起こしながらも、無事に一向は目的地にたどり着いていた。

因みにノーバディー達については完璧に隠し通した(ドヤ

——否、聞かれてなかったただけだね？

「なによアンタ、ここ周辺に暮らす民のくせに知らなかったの？」

「…そりゃー悪うございあした…。うちの領主の娘がこの学院に通ってるみたいだね。」

ヴァリエール嬢…改、ルイズ嬢が失礼な聞き方をしてきたので、むすつとしながら答えてやった。…仮にも俺は命の恩人だぞ…まあいいけども。

「へえ…そういえば聞いてないわね。どこの領なの？」

「センチエル領」

「ああ、あの平民と仲が良いって言う、変わり者の貴族の…」

「そんな貴族も居るんだな…やっぱり悪い人ばかりじゃないのか？」

今度はキュルケ嬢。タバサ嬢とフーケが空気になってるが気にしない。

気にしたら負けだ。何に負けるのかわからんけど。

いや変わり者って…、まあこの世界の貴族から見たらそうだろうが…。

平民にとっては神様みたいなもんだぞ、多分。

ああ、そうだサイト君…：けして多くはないと俺は予想するがな。
どんな世界にも、貴族にもいい奴らっていうのはいるものだ。

「さて、と。付いたわね、うーん。お疲れ様、平民さん。」

「ああ。ほら、立てよフーケさん。」

「まったく…呑気だねえ…、私はこんなのに捕まったって言うのかい…?」

残念だったな?

人は見た目にも寄らないもんだぜ、と言ったら何故か鼻で笑われた。
ていうか、俺の化け物さをアンタが一番わかってる気がするんだが?
フーケがルイズに連行されていく、恐らくこのあとは警察的な所に
引き渡されるだろう。
さて、俺もさようなら、だな。

ガシッ

「貴方も来るのよ。」

「…さいですか。」

ドナドナ状態で引きずられるのも嫌なので、仕方なしに付いていく事にした。

「良く戻ったのう！ いやはや…よもや、ミス・ロングビルがフーケとはもう…。」

「でも良く戻ってきてくれました。お手柄ですぞ！」

俺が案内…連行された場所は、中央塔の最上階付近の部屋。
目の前で感慨深げに顎鬚を撫でる老人が恐らく、学院長のオールド・オッスマン…だっけか。
となりのハゲている中年男性は誰だろうか。…まあ教師と考えるのが妥当か。

「ふむ…で、そちらの方…」

「ヴェンと申します、センチュエル領のほうから旅で。」

「おお、あのセンチユエルからとはの。では、ハティ嬢の事は…？」

「ええ、知ってます」

そうかそうか、と何故か嬉しそうに言うオスマン老人。

この様子なら、ハティは良くしてもらっているのだろう。…出来れば一目見てみたいが。

彼女はまだ気さくでやっているのだろうか。というか大丈夫だろう。

（下へ続く）

N o. 1 0! 「魔法学院到着」 (上) (後書き)

雪「書いてる途中で話の流れ忘れたんだよ、言わせんな恥ずかしい」

No. 11! 「就職」 (下) (前書き)

今回頑張りました。

：面白いかどうかは、作者からじゃわかりませぬが。

雪「今更ながら、原作沿いは途中まで：変わる所は変わります。多分。」

クリーパー「(パクッ)」

雪「おいばかやめろ」

No. 11! 「就職」 (下)

「さてさて…、リーナ嬢の息子…で合っとるかの?」

「え?...母と知り合いで?」

現在、少年少女4人の微笑ましい表彰式を見届け、他の人は出ていき。

——俺は目の前の老人と対話していた。

驚いた。どうやら知り合いのようだ。

「ああ、そうじゃ。一時期、この魔法学院に務めとっての。…ふむ、煙管…煙管は…」

「教師、だったんですか? (…また新事実か…、両親の過去となるとまだなんかありそうだな。)」

オスマン老人は…いや、敬意を込めて学院長と言うべきか。
と、いっても、目の前の老人から威厳らしい威厳は感じ取れない。
もっと厳しいの想像してたけどな。

「おお、あったあった…」煙管を無事発見する事が出来た老人を見ながら、俺はそう思わずには居られない。

「ふむ、当時は土のトライアングル、スクウェアメイジが少なくて
の。手を貸して貰ったのだ。」

「なるほど…、…それで、引き止めたのはこれが理由では無いんで
しょう？」

「ほっほっ…そう急ぎなさんな。…そうじゃの、一つ、お願いがあるのじゃが…。」

顎鬚を撫でながら、暖かい笑をオスマン学院長は作ると。

「君の腕を見込んでのお願いじゃが…警備員として働かんかの？」

ここでもさかのスカウト。

「警備員、ねえ。」

俺はオスマン学院長に、「時間をください」と答えた。

「ほっほっ。ゆっくり決めて貰って構わない。」老人はそう返した。

——よく考えてみれば、この学院、警備員らしい警備員が居ない。

学院で生徒意外に居るとすれば、雇われている平民のメイド、そしてコック。

で、無論教師。

鎧を着て、槍を持ったような者は居ない。

「こんな警備体制で大丈夫か？」

芝生を歩きながら、つい、つぶやいてしまった。

——否、事実、本当に大丈夫なのか、と思わずにはいられない。

『な、なんで警備員とかを雇ったりしてないんですか……？』

『ふむ……まあ、わしらもメイジじゃからな、一人風のスクウェアもおるし……。』

『まあ単純に特に必要とする機会がなかったんでの。』

『は、はあ。……で、何故今になって？』

まあある程度は予想が付く。

フーケに入られた事による危機感から、だろう。

『ミス・ツエルプストーリーの話では、君がフーケを取り押さえたらし

いの？』

『ええ。…でもそれが？』

『配属するにも、只の平民警備員ではメイジに勝てるかどうか怪しいからの。』

『君の父上と同じ、？メイジ殺し？なら、安心できるという物じゃろう？』

老人は、そういうと、ウィンクをしたのだった。
——待て、アンタ、父さんの事も知ってたのか。

「よっこしようにちっと。…警備員、ね。」

取り合いず、学院内の塔を背に、芝生に座り込む。
再び、どうするべきか思索をする。

——ここで警備員になる事のメリットは？

まあ、それは…。

『君一人じゃから大変かもしれんが…ふむ、給料は生活に困らない程度は出そう。衣食住も保証するぞ？』

…目を光らせて放ったオスマン老人の言葉でわかるように、中々破格の条件なのだ。ここにいれば、取り合えずは困る事はあまりないだろう。

——メリットは？

それは、各地を巡れなくなる事。
休暇は虚無の日等にとってくれるらしいのだが、たかが一日で動ける範囲も決まっているような物。

…あれ、俺って旅に出たんだよね？

しかし、旅に出るといっても、路銀等が尽きてしまった時、働き口無い、というのも避けたい。

「（なら…一日でもそれなりに回れるぐらいの移動手段があれば…？）」

移動手段、ね。

この世界には、前にも述べたかもしれないが、科学が全く発達していない。

基本、移動手段は使い魔に乗る、もしくは馬なのだ。

さて、こうなると無論、能力でどうにかするしかないという物。

候補としては、

No. 2の空間属性。…恐らく、テレポートでの移動が出来て、楽なはず。

まあ、転移場所を間違えれば、生き埋めというところでもない失敗事故が発生する。

——出来れば使いたくないな。

まだ他にもある。

No. 3の風属性。単純に、風の力を操っての飛翔だ。

まあこれでいいのかもしれないな。

スピードを上げればスピードは出るし…。

「（ノーバディー達に何か役に立つのが居ないかな…）」

ふと、ずしっずしっ、という音が聞こえ、そちらの方へ音を向けると…。

「お、確か…タバサ嬢の所の使い魔だったか。」

青い鱗に青い瞳。まさしく、ファンタジーの代表格と言える…

ドラゴン
竜。

俺の考える竜というのは、威風堂々とした、人に懐かない生き物を想像するのだが…。

「きゅん」

この生き物（竜）、人懐こいようで、おまけに鳴き声がやたらと可愛い。

…思わず拍子抜けしてしまったのが良い思い出だ。

「なんか…ようか？」

「きゅいきゅい」

全長6メートルもあるが…どうやらこれでもまだ幼いほうなのだから。成体はどれほどになるのか、想像がつかない。…出来れば会いたくもないのだが。

ソイツはゆっくりこちらへ向かって歩いて来ると、頭を下げて俺の顔を覗き込んでくる。

「……！」

間近で見るとすごい迫力。

ただ、目は近くで見ると、日の光を反射して綺麗な宝石に見える。

「ン……」

とりあいず撫でておいた。

——触り心地？意外とさらさらしてたな。

目を瞑って気持ち良さそうにしている。…コイツ、可愛いな。

「…お前、主人乗せて飛んでたよな？」

「きゅい！」

俺がそう聞くと、竜は自慢げに鳴く。

「お、お前、言葉、わかるのか？」

「きゅ！」

すげえ。

しばらく撫で、ゆっくりしていたのだが、
授業が終了した事を知らせる鐘が鳴ると、何処か満足げに竜は飛び
去っていった。

——主人（タバサ嬢）のところへいったのだろう。

さて、俺も答えを出しに行くか。

「失礼します。」

「おお、ヴェン君か。入ってくれて構わんよ。」

ノックし、ドアを開けて中に入る。

と、オスマン老人は出ていった時と変わらず、煙管を吸っていた。

——仕事しないのか…？

机を見ても、種類らしい物はのっていない。

オスマン老人は体をこちらに向け、

「やってくれるかの？」

俺はその質問に、

「ええ、お願いします。」

できる限りの笑顔で答えたのだった。

No. 11! 「就職」 (下) (後書き)

主人公、就職。

オスマン先生の口調とか色々気になるでござる。

イルククウかあいよいよイルククウ。

実はヒロインはイルククウにしようかと思ってまふ。

鳶「……。」

雪「悪かった」

No. 12! 「学院内詮索(上)」 (前書き)

とりあはず出来た前半をUP。

今更だけど、ヴェンの姿は二次元的な姿に脳内変換してくださると幸いです。

No. 12! 「学院内詮索(上)」

魔法使い。

それは子供のならば、一度は憧れた事はあるだろう、職業。
箒に乗って空を自由に舞い、人々に平和を贈る……そんな魔法使いに。

少なくとも、俺もその一人であつたはずだ。

はず、というのは、無論前世の幼少期思つた事なので、記憶がほとんどないからなのだが。

——だが、昔の記憶というのは案外思い出しやすい。

……まあ、俺だけかもしれないのだが。

「…にしても…。」

現在も、その魔法を目の当たりにしている訳だが…。

魔法で飛んでいるのは三角のトンガリハットを被った少女でもなければ、
レベテーション

白黒のいかにも、というような少女でも、スーパードレスに変身しちゃう魔法少女でも無い。

——中年のハゲたおっさんである。（けして口に言える物ではない）

「（ここのメイジは箒とか空飛ぶ絨毯とか使わねえよなあ…。）」

無論、若いメイジのほうが多いだろうが。

魔法使いときたら、『箒に乗って空を飛ぶ』が結構固定されていた身としては、

単身で宙を舞う姿を見ると、物足りなさが残るのだ。

まあ、おっさんには合わないが。

箒と魔法使いに対する考えは兎も角。

「おお、これですこれ。？始祖が残したマジックアイテム？…やっ
と見つけた…」

「それで、何を探すんですかい？」

「ええ、そうですぞ、ヴェン君。？破壊の杖？について何か記述があるかどうか…。」

「なるほど。」

名前は基本的には、ヴェン君と呼ばれている。

呼び捨てでも良かったのだが、そこは妥協してくれなかったようだ。俺？俺はコルベール先生と呼んでいる。年上だからね。

コルベール先生が膨大な本棚の中の本から一冊の厚い本を取り出した。

緑の冊子で、金色の文字で題名が掘られている。

――…こん中にミサイルランチャーの項目なんてあるのだろうか。

「すぐにでも探しに掛かりたいが…、？破壊の杖？という名前はたしか学院長が付けたとか…」

「ううむ…時間が何の道掛かりそうだ」

「探索なら自分でも良いですよ？」

「いや、君の案内が先だよ。それにここは他にも、立ち入り禁止の所があるからね」

立ち入り禁止？…それはそれで気になるな。

あれか？秘密の部屋か？三頭犬が守ってたりする？

というかこの世界にケルベロスとか居たりするんだろうか。

…と、冗談はこれぐらいにして…。

「立ち入り禁止…？例えば？」

「例えば…：宝物庫等は許可が学院長の許可が必要だったりするな」

「成程」

宝物庫か…：そういえば、あのミサイルランチャーも宝物庫から持ち出されたみたいじゃないか。

他には何があるんだろうか。…すごく気になるな。

これ以上、執拗に聞いても、有らぬ疑いを受けそうなので止めておく。

「（然し…：良くもまあ、ゴーレムと互角に戦えるような俺を警備員に選んだな…）」

気づけば、俺に宝物庫を狙われるかもしれない、というリスクもあった訳だ。

——単純に気楽な老人なのか…：それとも狸なのか。少なくともあの老人は只者じゃない事は確かだな。

「(ま、雇われた以上、相応の働きはさせていただくけどな)」

「…しかし…時間が惜しいな…仕方ない、…今から言う場所は立ち入り禁止です、そこにさえ入らないと約束して頂ければ、自由に見回ってもらってもかまわない。まずはさっき言ったように宝物庫、…それから…」

結局、研究意欲に負けた(大丈夫か?) コルベール先生に、禁止場所を教わり、別れた。

見かけ通り部屋は多いらしい。

——全部覚えられるわきゃねええ。

長い廊下、階段を抜け、俺は再び外へ。

さんと降り注ぐ日光を肌に、中庭を歩く。

こういう天気の日、何処か木製のベンチに座って、昼寝へと洒落

込みたくなる。

とりあいず、初日である今日は門の当たりを中心に警備すれば良いようなので、父譲りの剣を背に突っ立ってみる。

「……。」

暇だ。

そのせいか、段々と眠くなってくる。

残念ながら、某中国と呼ばれる門番のように立ちながら寝る技術は俺にはない。

実にご教授願いたいものだ。…仕方ないので詮索も兼ねることにした。

トリスティン魔法学院の広さは…例えるなら…東京ドーム…1個半、ぐらいか？

まあ、魔法学院はここしかないらしいので、この広さも納得ではあるが。

なんでも、他の国からの留学生も居るらしい。

とりあいず、門の外に出る。

目の前に広がる光景は、草原と馬車等が通る道があるだけの、寂しい光景。

…結構、孤立してる場所あるんだな…。

やっぱり、警備が気になる俺だった。

「出てこい！」

俺はできるだけの小声で叫んだ。

…いまやってるのは、カードの中の物を元に戻す作業だ。

PON、と軽く弾むような音をたて、白い影がその場に現れる。

「ただいま参上！ 援護を求め——」

「おいばかやめろ」

「うぼほっ！」

決めゼリフも考えていたのかコイツは。

然も大声で叫ぶものだから、少々手荒だが、ヘッドロックして鳶の顔を押さえつける。

——こいつ、何処に口があるかわからねえもん。

「静かにしてくれ…、敵が現れたからお前を呼んだわけじゃないから安心してくれ。」

「むぐっ…」

とりあいず、コクリコクリ、と頷くのを確認して、拘束解除する。
俺はため息を付くと、長ったらしい現状説明始める。

「なるほど…：此処の警備員に、でござるか。」

「ああ、でも周囲を見てくれ、コイツ（警備）をどう思う？」

「すごく…薄い（警備が）です…というか主人しかいないではござらんか！」

「ああ、案外大変な仕事を受け持ちましたらしい…。」

ふむう、と老人が考え込むような仕草で、思案している鳶。
鳶達ノーバディーは記憶というものがあるのだろうか。

少なくとも、機関メンバーにあることは確かではあるのだが…。

「なあ、鳶。」

「んむ、なんでござるか？」

「ノーバディーは…お前だって、今は心はあるけどよ…心を失った抜け殻…だったんだよな？」

自分でも今更ではあるが…というか前にも聞いた事があるんだけどな。

「そうでござる。…基本的には、残るのは俺の身、魂のみ。その残った身…これは記憶も含まれているでござる。」

「ただ…」

「ただ？」

何か思い出そうとしているように見える鳶。

だが…数秒後には頭を振り…。

「そういった記憶も、闇に飲まれるその日まで永久に生き続ける内に、忘れてしまった…。」

「…」

「でも、最近、主人と接する上で思い出した事がござってなあ…。ほんの少し、それも僅かな事ござるが…」

「か、片方は思い出したくないトラウマでござる…あばばば。」

「何か、思い出せたのか？…じゃあもう片方…。」

確かに、ノーバディは最終的には奪われた心と同様、闇に溶けてしまっただけ無い。

だが、キブレードによって、奪われた心と体を取り戻した時、元の姿に戻る事が出来た筈だ。

生ける屍。

…ノーバディというのは、悲しい存在。

鳶にトラウマを残した物とは何だろうか？…わからんな。

「誇り高く、だけでも他人の為に身を差し出せるような人間であった、という事でござる。」

拙者は今まで、有意義を持てなかったあろうなあ、心を手に入れてからというもの、記憶も無くて素直に喜べなかったのだから。でも、僅かでも思い出した、…この事だけで満足でござる。

志を思い出せたのだから、その志を貫くだけでござるよ。」

一見、能天気で何も考えてなさそうな奴だけでも…

「そうか…。」

よっぽど、人間より、人間らしいじゃねーか。

『う、五月蠅いわよ！この馬鹿犬ツーーーー！』

キュピーン ドゴオオオオオオン！

…、ひでえタイミング。

「およよ、随分と派手にぶっぱなされたね」

「…ててて、あ、ヴェン。聞いてくれよ、ルイズのやつさ…」

なにやら、体の所々が焦げている。

——あの爆発を体に受けて良く生きてたな。マジで。
顰めっ面で、寮から出てきたサイト君に声を掛ける。

「…アイツが魔法を使えたらここまで苦労しねえのになあ…」

「…待ってくれ。魔法が使えない？」

可笑しいぞ？現にあの大爆発が起きてるじゃないか。
確か…あの規模の爆発を起こすには、爆炎のスペルだな。

因みに、爆炎というのは、火と土の合成魔法。火2つと土1つによるトライアングルスペル。

空気中の水蒸気を気体状の油に『鍊金』し、空気と攪拌して点火させる、という物だった筈だ。

まあ、実際は爆発事態で吹き飛ばすのではなく、酸素を奪う、という目的だが。

と、この質問に答えたのは別の声だった。

「ああ、あの娘っ子は魔法が使えねえ。どんなスペルを唱えても、

ドカン、だ。」

「?!（何処から声が?）」

「おう、兄ちゃんこっちだ。坊主が背負ってる剣だよ。」

「お、おお…剣が喋ってる…」

なんと、声の発生源はサイト君の背負っている錆びた剣からだった。
?（刀の根元）をカチカチ動かしているではないか。

剣の長さは150センチほど、デカいな。

「お、おう。俺の名前はヴェン。アンタは?」

「俺か?俺っちの名前はデルフリンガーだ。よろしくな、兄ちゃん」

「それで…、彼女は、ヴァリエール嬢は何のスペルを唱えてもあの
爆発が起きるのか?」

「そうだ。詠唱の仕方もちの振る方も正しいんだがよ、どうも理由
がわからねえ。」

ますます、可笑しいな。

実際、俺もメイジなので解る話なのだが、魔法は失敗して爆発する
物ではない。

精神力だけ使用し、何も発生しないのだ。

母も確か、失敗した時はそうなると言っていた。

その事を一人十ひと振りに話すと、

「それじゃあ、ルイズが失敗する理由ってのは失敗とは関係ないのか？」

「娘っ子の魔法が失敗魔法じゃないとすると……あー、思い出せそうで思い出せねえ」

「ああ、そういう事かもな。……まあ飽く迄予想の範囲だけでも…」

では、一体なんだというのか。

：駄目だ、お世辞にも頭が良いとは言えない俺の頭じゃ答えはでそうにない。

——というか、あの爆発起こせるなら、下手な魔法より強くないか？

しかも、なんでもない場所から突然、だ。

あの爆発が正確に体の内部に定められたら、と思うだけでぞっとする。

「あー、サイト君、君も中々な苦労人だな…」

「：今思っただが、？君？付はよしてくれよ。ヴェンのほうが年上だろ？」

「それもそーだな。んじゃ、遠慮なくサイトと呼ばせてもらおう。」

適当に会話を終わらせると、サイトが何やら洗濯でもするのか、置
を持って水の流れ出している場所へ歩いていく。

洗濯…、男に自分の下着を平気で洗わせるとは…もしかして男とし
て見られてないのか…。

否、もしかしたら人間とも見られてないかもしれないな、と俺は心
の中で合掌した。

願わくば、元同じ世界の住人として、彼に幸せが訪れるように、と。

「…デルフリンガー降ろしたほうが作業しやすくないか？」

「ルイズが、『私が買い与えた物なんだから、いつも身に付けてな
さいよ』って五月蠅いんだよ」

「…そうか。」

No. 12! 「学院内詮索(上)」 (後書き)

鳶との会話の辺りが失敗してそうな雰囲気。
まあ簡単に言えば、

「主人との交流で記憶(志)が僅かだけ戻った。それまでは、心があっても志が無い状態だから、素直に喜べなかった。でも、今は、志がある。昔の自分がそうしていたならば、今も同じようにするよ。」

てな感じです。

因みにトラウマというのは、…予想が付く方が居るでしょうか。
今は秘密ですw

所で。

「ノーバディーには一般武器は当たらない」と今小説の設定では、
というか原作でもそうなるんですが…。

ストラグルバトルの棒は設定通り、当たりませんでした。

(競技の為のおもちゃの武器)

何処にでもあるスケボー(スケートボード) 何故かノーバディーに
攻撃が入る。

(各所設置してある移動用の物)

これってどういう事でしょうか。

ストラグル棒「なんという理不尽」

20011. 11/21.

警備員となる平民は居るそうです。

——小説では、居ないことに。

さーせん、警備兵の皆様。

No. 13! 「魔法学院（下）」 （前書き）

下巻だぜ！

ストーリーの進展がないでござる。

こんなグダグダな小説ですが、これからも応援お願いします。

No. 13! 「魔法学院(下)」

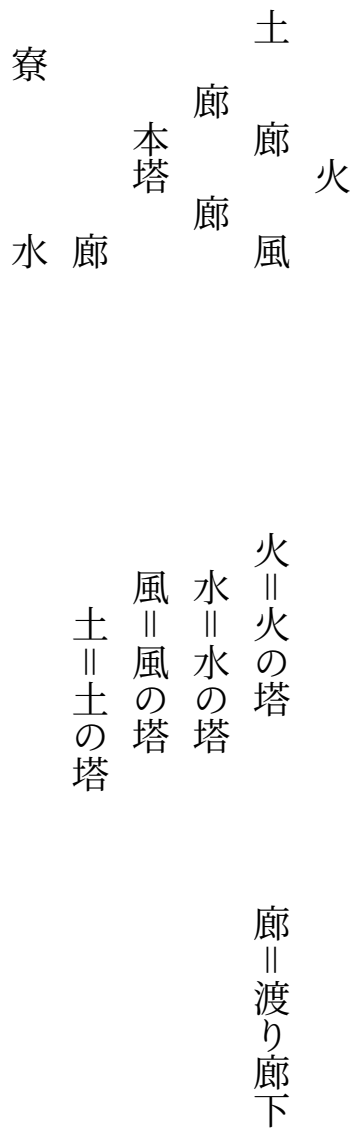
「つと…あれが食堂か？」

サイトと別れた俺は、現在、風の塔と水の塔の間：

アウストリの広場を抜け、本塔に隣接して作られている食堂を目指していた。

本道とは反対の方向には、城壁のそばには、使用人の宿舎…俺が寝る場所がある。

*簡易学院概要図



食堂正面の扉は、何やら入れない感じがするので、他に扉が無いか探し回る。

と、大きな煙突がある所、厨房と思われる所へ入る為の扉を見つけた。

コンコン、とノックする。

「あいてまっせ、どうぞお入りくださいませ」

中から、中々声がごついおっさんの声が聞こえた。
——此処のコック長だったりするんだろうか。

平均身長の頭一つ分ぐらいの扉：なのであと少しで頭が付きそうな扉をくぐり抜ける。

「お邪魔します。：今日から配属となった者ですが、ここは？」

「なんだ、同じ平民の仲間か。ここは厨房だ。俺の名前はマルトー。兄ちゃんは？」

「ヴェン、と言います。今回は挨拶周りもかねて、学院内を見て回ってるところですよ。」

へえ、そうかい、と陽気に手を差し出してくるマルトーさん。
見た目より陽気そうだ、と思いつながら、握手する。

：さっきのサイト君も同様だが、背丈が俺は大分大きいらしい。
——といってもマルトーさんとは同じぐらいなんだけども。

強く握ってきたので、俺も対抗として力を入れて握り返す。

「おお、ヒョロっとしてる割には力は強いじゃねえか。」

「鍛えてますから。」

苦笑しながら、笑うマルトーさんに返す。

「気に入った！飯はここで食っていきな、上手いものを食わせてやるよ。」

「ありがとうございます。」

「なあに、これくらいはいいってことよ！それと兄ちゃん、堅苦しい話し方は無しだ」

「わかった。じゃあ、自分はこれで。まだ他にも回る所があるので。」

おうよ！と返事を背に、厨房を出る。

とっても良い人で安心した。他の使用人の人も接しやすければ助かるけど。

料理は…とても期待できる。なんせ、貴族に対して料理を作っているのだ、腕は保証されているようなもの。

そんな事に心を弾ませながら、今度は取り合いず、荷物を置きにへと使用人の宿舎へと向かう。

部屋は二階の一番奥の部屋。

入ってみると、案外狭くも無く、寝泊りには十分な部屋だ。クローゼットを開け、荷物を入れる。

「うし：後はぶらぶらするか…。」

警備はどうした、と聞かれそうだが、これはオスマン老人が、

『基本的にこの学院の護りはそこらの施設よりも上じゃ。なんせメイジの教師が多くおるからの。

なに、フーケのような盗賊がしょっちゅう現れる訳でもないしの。

まあ、有事にはしっかり働いてもらうけどの。』

との事なので、大丈夫なのだろう。

思った以上に此処は硬いらしい。どうやら俺たちの心配は杞憂だったようだ。

——実際、俺が必要なのか？まあ有事の際があるが…。

なんとなく腑に落ちないが、それは置いといて。

「そーいや今日は、夜に舞踏会やるんだっけか。

：俺が入れる所ではないのは目に見えているけど。」

そんな事を考えつつ、周りを見回す。

先程から気になっていたが、何故か生暖かい…そんな視線を感じる。広場のあちこちに日向ぼっこしている使い魔達を見回すが…違うな。

「（誰かに見られてる…？監視されているのか？）」

こりゃ、真面目にしないと、と見事に勘違いした俺は、

遠くから未だに視線を向ける、サマランダー（火トカゲ）に気付かなかった。

「と、でも思ったか？」

伊達に鍛えちゃいない。

俺はどうやってあのトカゲにバレずに接近するか思案する。

一応、歩は進めながら。

「（能力の無駄遣いだが…んー。光となって移動するんじゃないかな。No. 13じゃだめだ。

いっそ幻でも見せるか？…それが良いか。）」

【影歩む策士】

レキシコンを呼び出し、適当にページを捲る。

ページ事に、相手に見せられる幻術の詠唱、内容などが書かれている。

——見つけた。こいつでいいか。

【効果…対象に偽の自分を見せる。本物の姿は見えない】と【効果…五感を騙す】で良い。

「See the mistaken truth. (誤った真実を見よ)」

一つ目の詠唱はこれ。

英語の発音とか、中々難しいのだがある程度グダグダでも大丈夫らしい。

「What is felt is not felt. (感じる物を感じず)」

二つ目。

これで、感覚的のもので俺（本物）を捉える事は出来なくなっただろう。

動物的第六感には探知されるかもしれないが…多分、行ける。

幻影である俺は、そのまま広場を進んでいく。

——やはり、正体であろうそのトカゲが、器用に脇に生える草むらの草影に隠れながら追う。

「（でけえ…こりやこういうのがダメな人には、絶句な光景だろうな）」

実は俺、自分で思えるぐらい、悪戯好きだ。

特に、冷静で表情を余り変えない人物とかが慌てふためく様子を見るのが、楽しい。

——今回は爬虫類だが。

五感は騙しているので、普通に歩いて近づく。
多分、今正面を横切っても気づかれない筈だ。

【かいげーん解幻】

呪文名といい、この解除するための言葉といい、突っ込みどころ満載だが：

「わっ！」

「！………」

OUT。

目をひん剥いて気絶してしまった。

——遣りすぎたか…。

前を歩いてたと思った人物が、いつの間にか後ろに居る。

ひっくり返して腹を触る。…こしょぐりである。

死んだふり…もとい、気絶したふりを見破るべく腹を触るのだが…。
反応がない。ただの気絶のようだ。

「持ち主にバレたら面倒だな…取り合いず放置して…と。」

逃げ出す。

貴族に絡まれるのはとことん面倒なのだ。

警備といっても、到底俺一人でカバー出来る範囲等知れている。ならば、『要請』を呼ぶ必要がある。

「…、ダスクか？…アサシンも悪くはないな。」

情報だけを手っ取り早く俺に流すだけならば、ダスクが良い。戦闘能力のほうは、期待できるとも限らな無いが…相手がメイジで無ければ100%勝てるだろう。

あー、でも、武器事態に魔法を掛けてある物もあるらしいしな…。ここは専門家…否、本種族の方に聞くしかないな。

「およ、またまた用でござるか？」

「ああ、さっきの警備の事だが…、援護にノーバディーの力が欲しくてな。」

「ふむ、ならば拙者にその任務、お任せ願えないだろうか？」

「鳶が？でもお前、一目に気づかれないように動くのは、若干無理あるんじゃない？」

実際、俺がダスクを選んだ理由としては、原作通りならば彼らが『変身』出来るだろうからだ。

記憶を失っていたロクサス（No. 13）の目を欺く為に、犬に化けたり、FFの登場キャラの…なんだっけ、ビビとかいう奴にも化けていた。

アサシンは地中に潜り込む事が出来る。

…原作では床にめり込んでいるだけだったが、…どうなのだろう。まあ、名前からして隠れるのが得意そうだから…とかいう割りかし、適当な理由だ。

鳶は…サムライは基本的に戦闘のプロフェッショナルだ。隠密とかいうより、堂々をしてそうだが。

「ふっふっふっ。」

「？」

「甘いでござる。…拙者もノーバディーの一人。ならば…」

突如、言葉が切れると同時に、目の前の鳶が消えた（・・・）。

——なん…だと…？まさか、ステルス持ちか！

と、思ったら。

「瞬間移動も出来るでござる！」

全然違ったでござる。

…よく考えれば、ステルスなんて付けてみる、鳶最強伝説じゃないか。

いや、まてよ、瞬間移動でも大分怖い。

気づいたらザッパリ。ホラー意外の何ものでもねえ。

肝心の戦力としては…申し分無い。

武器の分野は違うが、俺の全ての装備に対して、対等どころか優位に立てるような奴だ。

勿論、俺の師匠である。戦い方は基本的に鳶から教わった。

——ただ、ノーバディーと人間では感覚的な部分が色々違って、あまり宛にならない所が多かったが。

隠密性としては、気配を察知、瞬間移動も出来るのだから余程の事で無い限り、セーフだろう。

「見回り範囲は一人で大丈夫か？」

「問題無いでござる。生憎と拙者は、疲れ知らずの体のもので」

まあ、そりゃノーバディーだからな。

「連絡はどう取る？やっぱダスクが居るんじゃないのか？」

「む、そうでござるな…。クリーパーを回してくれるのはどうでござるか？」

「…さつきから何度も言ってるが…大丈夫か…？アイツ、直ぐに生態系を荒しに入るぞ。」

というか、下手したら生徒の使い魔が食われるかもしれん。危険だ！」

No. 13! 「魔法学院(下)」 (後書き)

雪「セコム、してますか？」

…13巻でございます。

さっそくの学院内詮索話なのに、話したのはおっさん二人。
ストーリー運び、頑張らないとな…。

相変わらず行き当たりばったりな今作ですが。

…オリ主人公原作知識がないと、行動しにくい…。

オリ主が持つてるなら、悲劇がどう起きるか分かっていて、と書き
やすいんですけど。

さあて、どうやって悲劇を回避すべく動かすかな…。

というか、機関内で治療に応用できる能力なんてありましたっけ？

——ケアルガじゃ、病気治せねえよなあ。

なにか、能力を新たに覚醒させるか（おい

No. 14! 「おな~~~~り~~~~ッ!」 (前書き)

どうも、偶に血迷った巻を投稿する軽い雪です。

さて、相変わらず展開のノロいんですけど、よろろ。

No. 14! 「おな~~~~り~~~~ッ!」

「~~~~♪」

ブリックだが高んだか知らないが、舞踏会の終わった日から暫く。相変わらず、暇を持て余す警備の仕事の為、門に背を預けながら鼻歌を歌う。

とはいっても、早朝なのでそれなりに寒い。

愛用の黒いローブを着籠み、まだ薄暗い所、一人で突っ立っていた。他の範囲はダスク、鳶に任せている。

ここ最近に至って平和で、これが学院の日常なのか、と納得していた。

まあ、トラブルがない事は云いことだ。平和だね。

ただ――。

問題なのは、警備の仕事についての詳細だった。

主に俺は、日没までが担当という事になっていたのだが、

『あれ？日没後どうすんだべ？』

残念ながら、警備員は俺しかいない。

警備するというのなら、実際は日没後のほうが余程重要だと思うのだが、

『夜は休んで良いぞ。メイジの先生方も見回りしているしの。』

なら良いか、ってんなわけねーだろ。

学院長、最近煙管をふかして座っている所意外見たことねえ。

事実、仕事もサボっているのか、書類関係の紙が重なり、結構高くなっていた。

——第一印象は優しそうで良い爺さんだな、と思っていただけにこれは残念である。

んで、

『見せてもらおうか、先生方の夜の見回りの現状を！』

案外、他人の目を気にして、真面目に仕事に取り組んでいると思ったのだが。

——結果、期待していた俺が馬鹿だった、という現状である。

この十一日間、真面目に仕事をしていた教師と言えば、あのコルベール先生しか居なかったのだ。

その他は警備とも言えない適当にブラブラしているだけの教師、悪い教師は寝ているのか、見回りにすら姿を見せなかった。

流石に我が目を疑ったね！

おまいらフーケに最近盗まれたばっかだろうが。

なのに警戒レベルが上がるとおもいきや、まさかの低下である。

あれ、もしかしたら盗まれる前からこうだったのか？

ひょっとしたら、更に酷かったかもしれない。

先生、俺、どうしたらいいんでしょうか？

まあ、結局は鳶達に理由を説明し快く承諾してもらった。
：持つべきは頼りになる部下だな…。
少なくとも人間である俺は、早朝まで寝る事にした。

それから十一日間。
もう色々と慣れてしまった。残念ながら。

？主人、報告致します。？

「おう、どうだった？」

肩に止まったハトから報告を受ける。
ダスクの喋り方は一種のテレパシーだ。声も何も聞こえないものの、
言っている事は理解できる。
ただ、長文になると受け取りづらくなるが。

因みに、何故ハトかというと。

最初はカッコ良く、鷹が良かったのだが。

——なにやら貴族の風習として、鷹狩りがあるらしい。
という事で、ありふれた、気にも止められないようなハトになった
わけだ。

？今一時間を含め、現在まで特に異常は見られませんでした？

「了解。有難う、戻ってくれ。」

？承知しました。？

バサバサと羽ばたき空へ舞い上がっていく。

本塔の影に消えるのを見送ってから、欠伸、そしてまた仕事へ戻った。

「やけに賑やかになってきたな……」

門から庭を覗くと、なにやら数人の生徒が自分の使い魔と思われる生物達に話しかけていたりしている。何をしているのだろうと、思いつつ、それを眺める。

——見たところ、芸を教えているようだ。

使い魔であろう鳥、（ハルケギニア原産の物か？名前は解らない。）がエアループを決めていたり、動物ショーを見ているようで面白い。

俺も使い魔欲しいなあ…。

まあ、つばいのなら居るけどな。ノーバディー達みたいな。

どちらかといえば、可愛い生き物が欲しい。
ノーバディー達はシャープなデザインなので、可愛いより寧ろカッコイイだ。

得意な系統によって召喚される生物は変わるらしいが…其処は余り調べてないし、教えてもらってないので
曖昧だ。…ああ、風竜もいいな…、アイツは可愛かったし（主に鳴き声と仕草）。

「あら、やっぱりここに居たのね、平民さん。」

「お！お早う。キュルケ嬢。」

「あら、そんな堅い呼び方は止して？キュルケと呼んで頂戴。」

「ん、そうか。んじゃ俺の事だってヴェンと呼んでくれ。…所で、俺に何か用か？」

挨拶を終え、キュルケに聞く。

…目線をずらしちゃダメだ…特に下方向。

仕方無いので、口笛を吹きながら、更に下、地面でも睨んでいようかと思ったら。

「…なあキュルケ。ソイツあ、お前の使い魔か？」

「あら、そうよ。貴方があの時脅かしたサマランダーよ。」

「……」

何となく、キュルケがジト目になっているのに気付き、口笛を吹いて誤魔化する。

——そうか…俺が脅かしたのはキュルケのサマランダーだったのか！

目線が痛いでござる。

「…まあ、あれは私に非があったような物だし、別に気にしてないわ。」

「…そうか。」

「まさか、サマランダーの視線に気づいて怖がる所か、逆に驚かせに来るなんて、度肝抜かれちゃったわ」

「H A H A H A。…そういうのが好きな達だね。いやはや、ごめんごめん」

微笑んで頭を掻く。…全く恥ずかしい限りである。

——と、何故かキュルケが驚いた顔を。

「どうした？」

「い、いや、貴方って、笑うとガラリと雰囲気変わるのね。って」

「そうか？…んー、それって悪くなるって事か？なら困るな…」

「いやそうじゃないのよ！…んー、なんていうか、お日様が照ったみたいなの？」

それっていい事なんだろうか。

取り合えず、悪いことではないらしい。ほっとした。

頬を赤く染めている理由が解らないが…、色っぽいな。

——心の中でサムズアップした俺だった。

「悪いな、サマランダー…じゃなくて、名前とかあるのか？」

「フレイムっていうの。良い名前でしょ？」

「ああ、それらしい名前だな。…悪いな、この前は。ちょっと脅かすだけだったんだが…。」

「キュルル…」

自慢げに言うキュルケに返し、フレイムの頭を撫でる。

…スベスベしてるなー、爬虫類系独特の。

——でもまあ、こんな使い魔でも悪くないな。あー、にしても癖になるなコレ。

「ふふ、触りごごちが良いんでしょう？毎日手入れしてあげてるもの。」

「ああ、暇があれば暫く撫でていたくなる程だな…。というか、尻尾危くないか？」

先程から、目の前を右へ左へとぷらんぷらん動く尻尾。

あれだ、ポケ○ンのヒトカゲの尻尾みたいだ。…あーつまりは火が付いている。

学院の庭は草原、おまけに寮や本道など、中の作りは殆どが木で出来ている。

——何か秘密でもあるのか？

「任意で熱を加減出来るのよ。それに燃え移らないわ。」

「へえ…、それは便利だな。」

「それで…用なのだけど、もう話しちゃったわ。」

「そうかぁ。所で、質問したいことがあるんだが、聞いていいか？」

「何かしら？」

フレイムを右手で撫でながら、左手の親指を経て、例の集団を指さす。

まあ、何をしているのかは解るが、何を目的として、が聞きたい。

「貴方…警備兵…よね？」

「ああ、そうだが？」

「ああ、そうだがって…まあいいわ。貴方は今日、アンリエッタ王女が来るのは知ってるわよね？」

「えっ」

いやそんな事聞いてないぞ。

王女って…というかそれが何で集団使い魔調教軍団結成の理由になるんだ？

なんか行事でもあるのだろうか。

「はあ…大丈夫なの？今日は？使い魔評論会？があるのよ。」

「使い魔評論会…？あー…なるほどね。」

王女と評論会。

要するに、使い魔評論会を見に来るのね。そのお姫様が。

アンリエッタ王女と言えば、トリスティンの花だとか言われていて、大層綺麗なんだとか。

——どの世界でもお姫様っていうーのは綺麗なのな。

「んじゃあ…キュルケも何かすんのか？」

「勿論！やるからには一番を目指すわよ！ね、フレイム。」

「きゅる！」

「はは、そうか。頑張れよ？」

「ええ。…でも、タバサには負けちゃうかもしれないわね…」

なんだ、行成弱気かよ、と言いつつになっただが。

…ああ、あの風竜が使い魔だったな…、そりゃ大変だ…。

全長6メートルで彼処まで綺麗な竜なのだ。確かに不利だな。

「と、…噂をすれば影…だっけか」

「あら、タバサ、貴方も使い魔の訓練かしら？」

「…（コクリ）」

すたすたと、ゆっくりこちらへ歩いてくるタバサ嬢の姿を確認して
続いてキュルケも気づいて声を掛ける。

そして、タバサの後ろから四足歩行で風竜が歩いてくる。

「やっぱりいつ見ても綺麗ね…うー、私も負けないわ」

「なあ、風竜であってる…よな。名前聞いてもいいか？」

「…シルフィード」

「きゅい！」

小さく、眩くような声だったので、聞き逃しそうになったが…シルフィードか。良いセンスだ。

「また会ったな、シルフィード。」

「きゅい！」

「あはは、もう…ビショビショじゃねーか…」

声を掛けて、頭を撫でてやる。

すると、ベロリ、と顔をそのデカイ舌で舐められた。

——い、犬なんかとレベルがちげえ…。

暫く、このやり取りが続いた。

キュルケが惚けて、タバサ嬢が先程のキュルケのように驚いていたが…

そんなに、笑顔が良いのだろうか？

でもまあ、NO. 13の数少ない笑顔って見てるこちらが微笑まし

くなるよな。

『アンリエッタ王女陛下のおな〜〜りい〜〜!』

昼。

野菜スープ（うますぎる!）を完食した俺は、マルトーの親父と共に
お姫様歓迎式にギャラリーとして参加していた。

トリステイン学院生徒全員が集合しているというだけあって、実に
多くの生徒で溢れかえっている。

『きゃー！本物のアンリエッタ様よ!』

「へえ…、確かに美女と言われるだけはあるなー。」

「よし満足だ。…んじゃヴェン、俺は女王陛下の為に召し物を作
らなきゃなんから」

「ああ、分かった。俺はもう少し見てるよ。」

噂されるだけはあるという物だった。

馬車の台の上に立って手を振っている女性は、可憐で、清さをもった少女。

「私のほうが綺麗よね、ねえ、ヴェン？」

「…うおっ、いつの間に…、まあ綺麗かどうかで言えば、どちらとも。だな。」

まあ、キュルケと女王陛下はジャンルが違う美しさだな」

「じゃんる？」

「まあ、綺麗にも色々あるって事だ。キュルケは綺麗だけど、女王陛下はまた別の綺麗さがあるな。」

「ふふ、ありがとう」

「どういたしましてー。」

オスマン学院長と姫が話しているのを見終えてから、ひと足先に撤退する事にする。…にしてもキュルケが頬を染めてばっかなんだが…。

評論会については良い勝負だった。

僅差、と思いたい（点数は付けないので解らない）がタバサが最終的には勝利。

キュルケが悔しそうにしていたが、俺共にタバサを祝ってやった。

シルフィードがとても嬉しそうにしていた。

——あー、使い魔欲しい。

No. 14! 「おな~~~~り~~~~ッ!」 (後書き)

雪「シルフィードよりも先にキュルケにフラグ立てちまったZE!」

というわけで、十四巻。

戦闘が書けるのはどうやら次巻になりそうです。

えっ、醜い戦闘描写を見たい訳ないだろだって？

——ご容赦くださいませ。

といっても、現段階じゃノーバディ達の活躍の場は戦闘しかないでござる。

所で、気になる所が一つ。

BbsFMに出てくる「謎の男」ですが、機関メンバーと何か関連があるのでしょうか？気になる俺です。

使い魔は何にするか、アンケートでも取りたいと思います。

・要らないだろjk

・作者の好きで良いぞ、ばっちこーい!

どちらかをお願いします。

感想は作者にとってのオルナミンCであり、マッチ (炭酸飲料) で

す。

No. 15! 「姫殿下の頼み事」 (前書き)

待たせたな!

御免、気分が乗らないのか出発出来ませんでした。
気づいたら? 惚れ葉編? も飛ばしているという。

——まあ後から? 惚れ葉編? は入れたいと思います。

No. 15! 「姫殿下の頼み事」

「きゃあああああああ!？」

「うゝらあゝめしやあゝ」

現在時刻、日も沈んだ夜。

今夜も一定時間まで警備をして、終える予定だったのだが。

？不法侵入者発見、学院内の生徒かもしれませんが、ご確認を。？

とのダスクからのメッセージにより、今現在その対象を追跡…という脅かしているだけだが、…をしている。にしてもリアクションいいなこの人。…というか声からして女の子か。

——罪悪感もあるが、今更なので続行している。

といっても、俺が普通に物陰からわっ、と飛び出しても、こんなに良いリアクションはしてくれないだろう。

だが——、もし、？両腕と両手？だけが追いかけてきたら？

現在能力はNo. 2の身体移動（仮名）だ。

「きゃあああああああ! 助けてえええええ!」

「ああ、ああ」

と、なるわけである。

因みに、今上げている声は某神隠しの顔なし君の声である。

——そろそろ止めるか、これ以上やったら俺がお叱りを受けるかもしれない。

ふらふらになっている目の前の人物を見て、俺はそう思わざる終えなかった。

「はあ…はあ…、ひっ!」

「あー、もう大丈夫だから。…警備員です」

「あ…、そうですか。…はあ…」

散々驚かせた少女に職名を名乗って話しかける。

…と、現れた俺に気づいた少女がビクツとなる。

只、警備員という職名を聞いて、どうやら少女は落ち着いたようだ。

うーん、肝が座ってるな。…否、ここの学院の生徒にしては、だけでも。

こんなに早く落ち着けるもんかね？俺は無理だけど。

「失礼ですが、お名前をお聞きしても？」

「は、はい。」

少女が慌ててフードを脱ぐと。

——…俺、何処かで死亡フラグでも建てたかなあ…。

なんとまあ、散々驚かせていたのは、昼間に見たあのアンリエッタ王女本人だったのだ。

予想の右上に行く、やばいぞ。このままだと下手すりゃ首ちょんぱじゃね？

やべえ、どうしよう。

「あ、アンリエッタ姫殿下でしたか…！」

「止してくださいませ、私に非があるんですから！」

慌てて、片膝付いて頭を下げる。

DOGEZAという選択肢もあったが、ハルケギニアの人物に伝えるかどうか…。

ともあれ、何とか一命は取り留めた。

過去の自分に「てめえ、何処で死亡フラグ建てたんだこの野郎」とも言いたいが、

「分かりました。…それで、お尋ねしますが、姫殿下は夜中に何用で…?」

「そう堅くならずにお願いします。…実は、」

少し躊躇う素振りを見せる姫殿下。

——秘密のご用でしたら、喋らなくても結構ですが、と言おうとしたが。

「この学院内に居る、ヴァリエール嬢に会いたいのです」

「ヴァリエール嬢に…、ですか? なら、ご案内致しましょうか?」

「いえ、場所は解って居ます…あつ、でも、護衛、をお願い出来ませんでしょうか?」

「あ、はい。では、付いてきてください。フードは付けて貰って構いませんよ。」

何から護衛するのだろうか、と一瞬疑問符が浮かんだが、姫殿下の願いを断るのは失礼だと思い、承諾した俺であった。

…あれじゃね、俺の両手だろうな。
だが自重はしない。驚かせる事が趣味でも、そして今現在、特技と
なりつつあるのだ。

「うわあっ、ちよっやめろっ！ルイズ！」

「うるさいうるさい！」

「たはは…喧嘩してやがる…」

「どうでしょうか…、」

部屋の前に着くなり、ルイズ嬢とサイトの喧嘩と思われる声が聞こえてきた。

耳を澄ませてみれば、ビュッビュッ！という風を切る音が聞こえる。

——パシンっ！

「いてっえ！」

「おいおい冗談だろ……」

まさかの使い魔調教……？否、評論会はもう終わってるし……、ハッ、まさかそういう趣味（SM）してるのか、あの二人。

俺が二人への見方を変えかけている所。

コンコン。

「失礼します……」

ガチャリ

「え、ちょ、開けちゃうの？姫殿下?!」

扉を開くと、そこには予想通りというか、そうであって欲しくない光景があった。

乗馬用の鞭と思われる物を手にしているルイズ嬢。
そしてそれから逃げる体制のサイト

——いや、セーフでした。サイト君は一般です。

「姫様!？」

「それに…ヴェン？」

俺はオマケかいな、こらひでえ。

姫殿下はルイズに話しかけている、俺は取り合いずサイトに話しかける事にした。

「相変わらず賑やかなのね。」

「姫様、何故このような時間に？」

「おいおい、また何かやらかしたのか？」

「何時もの事だけだな…うう、ヒリヒリする」

何時もの事って…、まああの爆発魔法に比べれば幾分もマシだな。
ギャグ補正なのか知らないが、あれを至近距離で放たれて生きてられる気がしねえ。

——もうあれ一つの「成功」魔法でいいんじゃない？

二つ名が「爆発」のルイズになりそうだが。テロリストくせえ

「私は、ゲルマニアに嫁ぐ事になりました。」

「な、なんですって?! 寄りにもよってあの野蛮な成り上がりのような国に?!」

「仕方ない事なのです…小国であるトリステインを守る為にはゲルマニアとの強い協定が必要なのです」

「そ、それでも…!」

「私は王女です。…国の為にこの身を捧げる事に、躊躇いは無いわ」

「なあ、ヴェン。よく言う、? 政略結婚? って奴なのか?」

「ああ、そうだろうな。…にしても? 野蛮な成り上がり?... ねえ。」

ゲルマニアについての話は色々聞いている。

国土面積はトリステインの10倍。…姫殿下がトリステインの事を「小国」といったのもうなずける。

因みにトリステインの国土面積は約7万km²。

社会風習や政治制度も他国とは一線を画しており、メイジではない平民でも金があれば領地を買い取って貴族になることができる。

この事がどうやら「野蛮」と言われている理由のようだ。

まあ、トリステインの貴族はお堅いが。

確か、キュルケのツエルプストー家もゲルマニア貴族だったはず。性格は彼女のような似ている人物が多いと聞くし、俺的には良いところなんじゃね？と思うが。

「でも…その前に、やっておかなければならない事が有るのです…。

」

それから姫殿下は淡々と話し始めた。

ただ…、そのお願いと言える物が思わず険しい顔になってしまう物だった。

簡単に言えば、空に浮かぶ島とされる？アルビオン？の王子、ウェールズっていう人物に

姫殿下は？手紙？を送ったらしい。もし、それが他の者などに見つかるような事があれば、

今回のゲルマニアに嫁ぐ、という話は無しになってしまう。

——その手紙を回収してきて貰いたいのです。

普通なら、遠出のお使い程度で済むかもしれないが…

現在、アルビオン王国では内戦が起きていると聞いている。

実際詳しいことは解らない。とりあえず、行くのは戦地に突っ込むような物、だ。

「部外者が口を挟むのも何ですが…流石に危険だと思われれます。アルビオンは現在内戦が起きているそうではないですか」

「分かっています…：私は酷い女です…戦地で危険が伴うと分かっているながら、友人である貴方を行かせるなんて…、でも…貴方しか頼れる人が居なくて」

だからって友人に頼むのわよお…なあ、ルイズ嬢
と思いつながら、その助けを求められた当本人を見ると。

「姫様直々のお願いなんて光栄ですわ！」

何故か目を輝かせて姫殿下の手を握っていた。

——答えはYesか。

怒りや疑問を通り越して呆れてしまった。

でも、なんとなく、この少女が断る所は想像が付かなかった。

フーケのゴーレムとの戦いでも、逃げる所か、ゴーレムを睨みつけていたのだ

…只者じゃないな。

「ならば、俺も手伝わせてくれ」

「…貴方も…？協力してくれるというのですか？」

「アンタ、警備員の仕事はどうするのよ。」

「どうせ居ようがいまいが関係無いような状態だよ」

まあ、警備補助員が居るからな。

この学院がしょっちゅう襲われているなら、もう少し考えるが、見回りのダラケっぷりを見てる限り、大丈夫だろう。

随分物騒な観光になってしまうが、アルビオン：空飛ぶ王国を見てみたい。

あれだぞ、リアルラピュータだぞ。

――バルスって叫んだらどうなるんだろ？　というかそもそもどうやって浮いてるんだ？

思考がズレた。

兎に角、自惚れではないが、俺が同伴すれば守れる筈だ。

ルート等を内密に選択すれば安全に進める可能性も無いわけではない。

ならば――。

「出発は何時の予定？」

「え、あ、明日の朝にはたって貰います。

アルビオンが接近する日に間に合う事が出来るでしょうから」

「なら、自分は明日に備えて準備でも。…んじゃ御休みなさいませ」

そう言うと、俺は返事も聞かずに部屋を出る。
若干気分が悪い。

自分でも気付かなかったが、多分俺は怒ってたのだろう。

No. 15! 「姫殿下の頼み事」 (後書き)

雪「散々待たせておいて何この駄文…次巻からがんばる!」

というわけで15話。

どうも作者は、一度に三人以上のセリフを書き分けられません。
うん。苦手。

次回は漸く港へと出発できそうです。

ノーバディーも創造する予定。というか、まだ三種類しか出てないのね。

まあ、頑張らせていただきます!

没 15話（前書き）

書いてる内に没になってしまった作品。

没 15話

女王陛下来日の翌日

♪

シタールを構え、メロディを奏でる。

この状況、見つかったら色々やばいのだが、テンション右肩上がりで、今更止められない。

直ぐ側には青い鱗のシルフィード。

「学院をつ！バスが出てえっ！初めに三人、乗りましたあっ！」

「きゅい！きゅい！」

「王都でえっ！一人降りてえっ！使い魔（半人）だけ乗りまわしたっ！」

「つきゅつきゅ！」

「センチュ（エル）領でっ！ふうたり降りてえ！乗客合計、何人だっ！」

「0なのねー！」

「せええかい！…えっ」

「あっ」

どうしてこうなった。
説明すると。

急にシタールをかき鳴らしたくなった↓ならば今、早朝。今弾こう
↓シルフィードと遭遇↓一緒に合唱。

随分と簡易的な図になってしまったが。
良いストレス発散になった。因みにギター（シタール）は一応弾ける。

選曲については突っ込まないでくれ。：タイトルは確か：「なんとかのパーフェクトさんすう教室」だったはず。
まあ、素人が出来る程度の簡単なアレンジだけど。

——ただ、最後に、聞こえない筈の声が聞こえたのだ。

一人と一匹。

少なくとも、俺にはさっき聞こえたような可愛い声は出せない。
ならばだ。：隣で不味った！という顔をしている風竜を疑うのが妥当だ。

当の風竜と言えば、

「：お前、喋れたのか？」

「（フルフル）：。」

「…、なあ本当の事を話してくれよ…。無いなら無いで納得するからさ」

「が、ガーゴイルなのね！」

慌てふてめく様子を見ると、何故か心があつたかくなつた。まる…にしても、ガーゴイルだって？ 確か…石像とかの…。うん？ でも主人であるタバサは「風竜」と言っていたし、キュルケも…。

「まあ…いいか。誰だって、一つや二つ、隠し事はあるしな。」

「そ、そうなのね！…え？」

「ほら、もう一曲行こうぜ！ さっきと同じで良いからな」

再びシタールを構え、掻き鳴らす。
但し、力を入れすぎると地下水脈…あるかどうか解らないが、兎に角、水柱が立つかもしれないので
飽く迄楽器としての力加減で引く。

♪

そして再び、うる覚えな曲を弾く。

——いやはや、好きな曲は中々忘れないもんだな。

S i d e シルフィード

今日は珍しく目を覚ました日で、気分も良かったの。
シルフィが自分で一から作った自慢の家。そして？そなえつけ？の
池で顔を洗ったのね。

「るーるる♪今日は気分が良いのね！風の精霊さん達も元気なのね
！」

今日は良い一日になりそうなのね。

お姉さまはまだ寝てる…時間なのね。…散歩でもする事にシルフィ
ードは決めた。

淡い朝日が彼女の青い鱗に反射して、鮮やかに光る。

——彼女はハルケギニアでも強力とされる竜。それも、絶滅したと
思われている韻竜の眷属なのだ。

韻竜とは、言語感覚に優れ、『先住魔法』を操り大空を高く飛翔、
ブレスを吐くという

なんとも万能で強力な竜なのだ。

無論知恵も人間のそれを上回るようで、勿論成長には時間が掛かる。
彼女は実質、200歳を超える、人間からして大変長寿なのだが、
竜にしては、まだたったの10歳。

つまりは彼女、10歳で6メートルを超える竜。成長しきったら、どんなサイズになるだろうか、到底想像が付かない。

ヴェンが見れば、「うお、リアルジュラシック・パークだこれ」と叫ぶだろう。

それて置いておいて。

学院内において、基本的に使い魔達は自由に行動出来る。

無論、行つては行けない場所は自前に自分の主人から教えられるから、把握している。

シルフィードが自ら、爪を振るい作った家がある、学院近隣の森もその行動できる範囲の一つだ。

他にも、住処としてこの森を使っている者は少なくない。

キュルケのフレイムのように、人が住む為の場所で暮らす事が好きな使い魔も居れば、

森のような、自然に居るほうを好む使い魔もいる。

——シルフィードの場合は、体が大きくて、使い魔専用の宿舎、主人の部屋に入る事が出来ないから、であるが。

そんな彼女の散歩コースは、気分によって変わる。

：まあ、単純に言えば、決めていないのである。行き当たりばったりののだ。

そして、飛翔、学院内に入ってみようかと思ったその時。

♪

何処からか、騒ぐような音が聞こえる。

然し、その音が聞こえるであろう場所へ目を向けても、人っ子一人居ない。

おかしいのね。シルフィードは疑問符を浮かべながら、その正体を確認する為、旋回する。

間もなく、一人の金髪の男が、その音の発生源だというのが分かった。

いや、正確に音を立てているのはその手に握られている自分の鱗と同じような色の？何か？。

シルフィードはきゅるきゅると鼻を鳴らして考える。

「（シルフィと同じ色のアレは何なのね…？でも聴いてると心が弾むようなのね…！）」

お喋りなシルフィードは、お祭り騒ぎのような、楽しい雰囲気が大好きである。

良くない騒ぎ意外の、？良い騒ぎ？では共に中に入り、騒ぎたくなるくらいに。

だから、無論、このシタールの演奏にシルフィードが乗らないわけが無かった。

それで、後の喋れる事がヴェンにバレるという事態になったわけである。

S i d e o u t

コンコン

と、学院長の部屋の扉をノックする。

先程まで楽しくセクションしていた俺だが、その光景に目を丸くしつつも近づいてきた

コルベール先生によって、終わりを迎えた。

――何やら学院長が俺に頼みたい？有事？があるらしい。

幸い、俺が離れる事になっても、心強い仲間が居る。

「（他のノーバディーも是非とも出してみたいなあ……機会が無いから無理だけど……）」

いっその事、使い魔でも、ゴーレムでも正体を曖昧にしておけば
案外受け入れてくれるかもしれない。

「おお。入りましたまえ、ヴェン君」

「では。」

オスマン老人に促され、部屋の中に入る。

室内が片付いている。…一瞬、この老人がやる気を遂に起こしたのか、と思ったが。

今現在、逮捕された秘書フーケに変わり仕事を手伝わされているコルベール先生の顔を

を見て、その希望は壊された。

…朝見たときは気付かなかったが…目の下にクマが出来ている。

この学院祐一の真面目先生なのではなかろうか。

「お疲れ様です、コルベール先生」

「あ、ああ。有難う。」

きよとん、としていたが、把握してくれたようで苦笑しながら答えてくれた。

劳いの声しか掛けられないが、体は大事にして欲しいものだ。

「で…、ご要件は何ですか？学院長。」

「うむ、それじゃがの、説明に至って少々長くなる。…コルベール君、有難う。席を外してくれたまえ」

「はい、では。」

コルベール先生は一礼すると、部屋を出ていった。

学院長がレビテーションでイスをこちらへ運んきたのでそれに座る。

「さあて、何処から話したもんかの…」

——有事なら急いだほうがいいんじゃない？

「成程…それはまた急な話ですね…」

今回の仕事を単純に説明するならば、

アンリエッタ女王陛下から頼まれた、？重要な物？を取りに行くので、その一行を護衛して欲しいとのこと。

護衛する人物の詳細を聞いて、俺は思わず眉を潜めた。

「ヴァエリエール嬢とグラモン殿…そしてその使い魔…生徒を戦地に行かせて大丈夫なんですか？」

「僕もそう思わずには居られないわい。…女王陛下のお願いを直々受けたのは、ミス・ヴァリエールじゃしのう…」

「は、はあ……他は誰か同行なさる予定で？」

「？グリフォン隊？隊長が同行してくれるそうじゃ。頼りにはなるじゃろ？」

正直、？グリフォン隊？などと聞いても凄いのか解らない。

でもまあ、隊長を務めるを程の人間だ、戦力にならないはずはない。

「でも、そんな人が護衛に加わってくれるのなら、俺は必要ないんじゃない？」

「何、君に遂行して貰いたい目的はまだ別にある。」

「なんででしょうか？」

「アルビオンの状態の詳細、それと活動報告してくれれば助かるの。」

ふむ…ならお安い御用だ。

別にお安くなくても受けなければ行けない事でもある。

知らない場所に……残念ながら旅行気分でゆっくり出来ないが、行けるのだ。

「無論、報酬は別に出そう。どうじゃ？」

「了解しました。」

「朝出発と申しておったから、もう門に集合しておる頃かもしれん。」

「え、ええ！それって思いっきり待たせてないですか？」

「何、コルベール君に連絡を頼んでおいたから、少し遅れても置いて行かれる事はないじゃろ。」

失礼しますっ、と声を上げ、学院長室を飛び出す。

——何でもっと早く言ってくれないんだ…、準備もあるっていうのに。

悪態を付きながら、俺は宿舎へと向かうのであった。

Side サイト

「相変わらず羽のように軽いな！ルイズは」

「わ、ワルド様、お世辞は止してください」

現在、サイトは絶賛いい気分が無かった。

その理由は目の前で繰り広げられている主人であるルイズと？婚約者？と名乗る男。

——ちえっ…ルイズの奴…知らねえ奴とイチヤイチヤがってよ…

そんな嫉妬心ではあるが、本人、実は嫉妬心である事に気づいていない。

そんな光景を面白くなさそうに見ていると。

「ふいー…間に合った…」

黒コートの男が何やら、近づいて来た。

余程急いでいた様子で、何か怪しい。

アンタ誰だ？とその謎の人物に声を掛けようとした時。思い出した。

「ヴェン?! 何でお前が？」

「おお、サイト。今回俺も同行する事になったんだよ」

「何の為にだ? ——あーなるほど。」

説明するのも面倒ようなのか、腰のロングソードを見せてくるヴェン。

——なるほど、護衛か何か、なんだろう。

ん？でも、何でヴェンは知ってるんだ？今回の事は秘密にされていた筈なのにな…

「学院長直々の任務依頼だ…、なんせ依頼されたのがついさっきでね…」

「まじか!？」

「ああ、残念ながら。」

何はともあれ、正直ヴェンが来てくれて助かった、とサイトは思った。

あの二人の行動に耐えられるか心配なのもあったが、ヴェンはゴレムを腕で止めてる。

——正直、何処にあのスーパーマンみたいな力を出せる筋肉があるのか解らない。

N o. 1 6! 「港町への道中」 (前書き)

はあはあ、やっと出来たぜ…。

No. 16! 「港町への道中」

部屋を出て、元々あと少しで警備を終える予定だったので最後に一通り見回ってから：っと。

【魔弾の射手】

最早諦めた事ではあるが、ニート教師を発見したので。

：っと、モードは『麻痺』そして、『狙撃』。

そして、カチャカチャっと出てきたガンアローを合体させ、ライフルにする。

屈んで、銃身後部を脇に挟んで、目を細めながらターゲットサイトを覗く。

幸い、ハルケギニアの夜は、二つの月のおかげで良く見える。

サイトの中心がニートと重なり：、引き金を引いた。

タアンッ！タアンッ！

「眠れっ！」

ビャン！

「Oh！」

「YES！（ガッツポーズ）」

——どう考えても八つ当たりです、有難う御座いました。

「ん、にしても……戦地か……」

戦場、戦地。恐らく、今まで俺が目にした凡ゆる（あらゆる）光景より、酷い物だろう。

おまけに、此処は魔法世界。規模も違うのだろう。

そうなってくると、身を守る為の物が必要だ。

特にヴェリエール嬢。……彼女は攻撃面はあれでいいものの（爆破魔法）、防御方法が全くとって良い程ない。サイトが居ても、守れる範囲は限られてくる。

「……んー、盾何かを持たせる訳にもいかねーし……」

あのお嬢様が持てる盾なんて、早々ない筈だ。……使いやすさを重視した小型の盾もこの世界に無いことは無いんだが、生憎と俺は持ち合わせていない。

——それにしても、と。ヴェンは思う。

全くと言っていいほど、彼女は戦地へ行くことに抵抗を示さなかった。

『貴族は魔法が使えるから貴族なんじゃ無い！敵に背を向けて逃げないのが貴族よ！』

今でも思い出せる、その言葉。

恐らく、あの時（フーケの時）と変わらないのだろう。

戦い、任務は誇りを持ってやり抜く。

正直、俺には理解出来るか怪しい所だった。：誇りより命のほうが大事に決まっている。

死んだらそれで終わり。後悔する事も出来ずに、だ。

だが：彼女は強いのだろう。

キングダムハーツの世界で言えば、彼女はきっと『強い光の心』の持ち主に違いない。

なら：、俺は敵に背を向けてでも、彼女を：いや、彼女達を守らなければならぬ。いや、守りたいのかな

幸い、寿命ならいくらでもある。なに、観光がちょっと遅れるだけだ。

「つたく…これは追加給料を求めないと駄目だな…」

ともあれ、冗談抜きで頑張らなければ行けないのは目に見えている。
明日を万全に迎える為、俺はベットに潜り込むのだった。

——ヴェンが気づいていないだけではあるが、彼女はただ単純に無
謀なだけである。

はてさて、それに気づかされるのは何時頃か。

翌日。

幸いこの日は雨も降らず多分、昼頃にはポカポカお天気になってい
るだろう。

どちらかと言えば、そちらの方が大助かり。

「（最初も目的地点は…、ラ・シェロールだっけか。）」

港街である、ラ・シェロール。その港街は、比較的高い山にある。――お気づきであるだろうが、すごく矛盾している。

港と言えば、海にあるもの。だが、まったく正反対の山にあるというのだ。流石にこれには頭を捻らずには居られなかった。つまりどういう事だってばよ。

答えは単純。

此処ハルケギニアでは、「フネ」と言うのが存在する。

ええ、「船」じゃありませんとも、「フネ」ですわ。理由？知るわけない。

船が移動するのは、なんとお空。現代で言う飛行機である。

：科学が発展しないのもうなずけると言う物。

動力は風石とか言うモンだそうが、魔法石と覚えて頂ければそれで良い。俺もわからん。

とりあえず、装備を付け、服を着替え何時も通りの黒いローブを着
籠み、外へ出る。

出来れば朝飯を食っていききたいのだが、恐らくまだ作ってくれていないだろう。

――という事は昼まで我慢か。こればかりはラ・シェロールの料理に期待するしかない。

あれ、初の街らしい街での外食じゃね？なんか嬉しい。

「ヴェ、ヴェルダンテエエエエ！」

——今日は良くない日になりそうだ。まる。

俺が門を目の前にしたとき、恐るべき光景を目にした。

体長がこの生徒並みのデカさのモグラ（ジャイアントモール）が飛んできたのだ。

洒落にならん（＼（＾Ｏ＾）／）

何とか下敷きになるのは避ける事が出来た。何故か達成感がする。些細だな。

っと、そうではない。朝っぱらから、こんな悪趣味な事をする奴は誰だ！

「ああ、ヴェルダンテ！僕のヴェルダンテに攻撃したのは誰だ！」

何やらシャツの胸元を開いた、いかにもって感じの貴族のおぼっちゃまがモグラへ走り寄る。

被害者か…となると、このモグラ、この少年の使い魔か。

何か、特別恨みは無いが、ざまあ。

初対面に、何言ってるんだと聞かれそうだが、一目見て何故か言いたくなった。

間もなく、犯人と思われる人物が何かに乗って降りてきた。

——おお：ありやグリフォンだな。うほ、顔イケメン。

ただ、首から腹に掛かってるエプロン（？）、てめえは許さねえ。
正直、あれがなければ「かあつくういいいい！惚れちゃいそうだぜ、グリフォン！」だけだな。

そして、グリフォンが鮮やかに着地し、背に乗っていた人物がサツ、と飛び降りる。
降りてきたのは、簡単に容姿を説明するなら騎士ナイトそのものだったと言おう。

——三銃士とかに出てきそうだな。あれ

「済まないね、流石に自分の許嫁が襲われているのを止めない訳には行かないのでね」

「なっ：あれはグリフォン隊の！」

「い、許嫁エ！？」

「わ、ワルド様！」

反応はそれぞれ。俺は今一状況が掴めない。

：どうやら、キザ少年の使い魔を吹っ飛ばして、俺に悪い光景を見せたのはこの男らしい。

まあ、正直モグラの一件は差ほど気にしちやいない。

面白い光景でもあったからな。『巨大モグラ、空を舞う』ってか、流石ファンタジー。

「ああ、僕のルイズ。…相変わらず君は軽いな、羽のようだ。」
「わ、ワルド様…」

成程、騎士様も負けない程キザでございますね。
あのセリフ、俺には到底言えないな。…自分が言う所を想像して、
無駄に悶えた。

「よう、サイト。」

「お、ああ。ヴェンか。…まったくルイズの奴…」

「何だ何だ？妬いてるのか？」

「そ、そんなんじゃないよ！」

まったく素直じゃないな。そんな面白く無さそうな顔であの二人をみてたら、そりゃ気づかない筈ないだろ。

だが…恐らく此処に居る俺の聞いていない、参加者二名についての情報を取り合いず聞く。

「なあ、あのおっさんとあの坊っちゃん、誰だ？」

「ん、あのキザ野郎はギーシュって名前。彼奴、昨日俺達の会話を盗み聞きしてやがったんだ。」

んで、彼奴も『姫様の為ならっ!』とか言って付いてくる事になったんだ。」

「なんじゃそりゃ…、んで片方のお前のご主人をお姫様抱っこしてるおっさんは?」

「それは知らねえ。…そう言えば、姫様が護衛の者を一人付けるって言ってたな。」

はーん。

片方は勇気と無謀を履き間違えた奴、片方は詳細不明の騎士様ってとこね。

だがあえて言おう、ギーシュとやら、お前は要らないと。

取り合いず、いつまでもイチャイチャしてもらっているのも何なので、声を掛ける事に。

「失礼、貴方様は?」

「僕の名前はジャン・ジャック・ワルド。『グリフォン隊』の隊長を務めてる。」

今回は姫様に直々にお問い合わせしたんだ。君たちの護衛をさせてくれるってね。…そういう君は?」

「此処トリステイン魔法学院で警備兵を務めさせて貰っています。ヴェンと言います」

「ああ、宜しく頼むよ。」

うん、丁寧に戻してくれたな。良い奴っぽいな。
その『グリフォン隊』がどれほど強いのかは解らないが、隊長を務めている程の男だ。

戦力としては鍛錬を詰んだとは言え、実戦経験豊富なワルド君のほうが強いだろう。

ん？何で君って呼ぶかって？

良く考えてみろ、前世と年齢合わせて……止めた。今は今だよな！
合計年齢が中年な事に気づいて、現実逃避する俺。

Side 三人称

さて、場所も変わりヴェンと、今回『手紙回収隊』である総勢5人のメンバーは、
ラ・シエロールへ向け、パツカラパツカラと馬に乗って道を進んで行く。

「…天気良いなあ…眠くなるぜこんちくしょー」

ヴェンの予測通り、出発して暫くで天気が晴れた。美しい青空である。

この世界は科学が進化していないメリットである『NO、空気汚染』

がある。だから『空気うめえ』のだ。

勿論、それは夜でも同じで大きな月のせいで若干見づらいが、それでも夜空満天の星空は素晴らしい光景だ。

「ルイズの奴、『ああ、ワールド様』なんて言いやがって：」

こちらは絶賛不機嫌中。

目線の先には、グリフォンに乗った騎士とご主人様^{ルイズ}。何故だか面白くない。

：これが嫉妬心であると気づかないのは、恋を知らない彼には仕方ない事かもしれない。

かといって、ヴェンもヴェンで前世を含め、全くと言っていい程恋愛関係とは縁が無い。

彼女の出来た友人を冷やかしながらも応援してやる側。

それどころか、『彼女が出来ても幸せに出来る訳ないから』と、モテない事を喜ぶ事は無いが、まあ、楽で良いなあという感じだったようで。ボッチで無ければそれで良いらしい。

『なんだ坊主。お前さん、娘っ子を取られて不満みたいだな？』

「だからあ、そうじゃねーって」

「お、デルフか。」

『よお、兄ちゃん。また会ったな』

「だなー」

からかって同じ返答しか来ないので、デルフは自分に掛けられた声に反応する。

この剣、実は寂しやがり屋で相手にされないまま放置されるとイジけるという可愛い……くない性格だ。

彼が美少女の声だとかだったら、需要があるのだろうが、声は正に気軽に話しかけてくるおっさんの声。

でもまあ、ヴェンはこの剣の事が中々気に入っている様子である。

『剣が喋れたら寂しくないな』『心とかどーなってんだ?』

興味心身で時偶サイトから借りて二人（正確には一人と一振り）で、語り合ったりしているようだ。

四桁レベルという凄まじい程長生きしているこの剣は、大半の記憶を忘却してしまっているが、
たまに聞ける昔話というのは、中々面白い。それが気に入っている理由でもある。

「所で、聞くが……サイトは何か武術でも習ってたか？」

「ん? いや、無いけど?」

彼がこう質問したのは理由がある。

使い魔兼、ボディガードでもあるサイトが、唯の高校生が何故剣を振るえるのだろうか。

デルフの丈は背に背負わなければいけない程：160ぐらいか？

無論、重量も比例して重くなるのだが……鍛えたりしないと持てないような重さだった。

「何でそんな事を聞くんだった？」

「いや、デルフを振るうのにやけに？慣れてる？な、と思ってさ。」

「別に慣れては 아닙니다よ？…実際、コイツを振るったのはまだ二回しか無いですし」

『なあに、坊主が俺っちを振えるのは坊主が？使い手？だからさ。』

「使い手…？それってどういう事だ？」

「それがよ、俺もデルフに聞くんだった。〈使い手って何の事だ〉ってな。でも——」

『仕方ねえだろう、何も何千年前の話だ。忘れちゃう』

サイトの言葉を引き継いで、デルフがカチャカチャ笑いながら言う。何故笑っているのかわかるかという、何となく、声だ。声で解る。

ヴェンは「何だ、お決まりのド忘れか…」と肩を落とす。

それから、何気なく隣に目移すと。

「ご機嫌よう、ミスタ・グラモン。」

「ああ、…って、急に何だねそれにその口調…」

「それとも二股男と呼んだほうがいいでしょうか？」

「！君っ、初対面に加え貴族に対して無礼じゃないか？！それにアレは二股じゃなくて…」

どういう訳か、ギーシュに対しては喧嘩腰なヴェンであった。

早速、来て欲しくも無い危機が訪れたのは、目的地に更に近づいた時だった。

山へ登る道で、崖と崖に挟まれた道。

とつくに闇夜になり、視界も良くない。

ギーシュとサイト、加えてデルフと雑談していたその時。

視界の真っ直ぐ……何かが……いや、聞き慣れている音が聞こえて、

「不味いっ！回避しろ！弓矢だ！」

「なんだって?!」

シュッ！

音を経て、馬と馬の間を弓矢が通り過ぎた。

：何者かが、こちらを狙っている。暴れる馬から飛び降りると、しやがんで弓矢の飛んできた方向を見る。

暗くて今一見えないが……恐らく、盗賊などの類だろう。

ザッ！

「うおっ！」

今度は上から。

どうやら崖の上にも居るらしい、これは益々危険だ。

「盗賊のようだな、僕が前を何とかするから、何とか耐えてくれ」

「ワルド様！私も戦います！」

「ルイズ、気をつけろ！」

「わかってるわよ！」

ふむ、正面突破するしか方法は無いな。…通常なら。

崖の下からじゃ上は狙えないだろうし、明らかに不利だ。

——俺しか上は狙えないな、と改めて思いつつ。

「【旋風の六槍】」

そして灰色の茨と共に、腕に槍が一本現れる。

実際、非殺傷戦では風で相手を叩きつけて気絶させれば良いだけなので、槍は余り使わない。

フワリと風が起き、地面を両足が離れる。

そして、そのまま高度を上げて崖の上に降り立つ事が出来た。
——うん、今日は絶好調だな。っと。

「ちっ、メイジがあと一人居たか！」

「殺しても構わねえな？ 目的は金だな」

…上だけで4人か…これは思った以上に少ない。

嬉しい現状だが、思案しているうちに、一人の盗賊が弓矢を弓に番え、放ってきた。

次は咄嗟によける事はしない。何故なら

ヒョウフツ！…パタッ

「なっ…、弓矢が効かねえ?!」

オートスキル
自動能力の「風壁」があるからな。

能力は簡単、接近した対象を風で押し返したり、今みたいな弓矢に
対しては勢いを消す、といった感じだ。

本来俺を射抜く筈であったであろう弓矢は、風壁に勢いを消され、
虚しく地面に落下した。

「うらあっ！死ねえ！」

弓では無い、片方のロングソードを持った盗賊が俺に切り掛つてきた。

「はっはぁ、無駄だぜえ！」

「ぐあっ！」

再び見えない壁に阻まれて、盗賊が弾き飛ばされる。

——うーん、某学園都市第一位になった気分だな。…というか、危機感ないな俺。

お相手さんと言えば「接近したら危ないぞ。」「…じゃあどうするんだよ」

などと小声で喋っている。

んじゃま、こちらから……他の救援にも行かなければならない、一発で決める。

「トルネドッ！」

トルネードでは無い、トルネドである。

まあ、どの道起きる現象は同じ。巨大な竜巻が不自然な、有り得ないスピードで現れ、

「「「うあああああああ！！！！」」」」

盗賊四人を派手に巻き込む。

全長30メートルはある竜巻が、盗賊四人を巻き上げ、あつという間に4人は落ちたら即死な高さまで上がった。高所恐怖症な人間が受けてみる、泡を吹いて気絶するな、コレ。

しかし、このままでは叩きつければ先程も言った通り、スプラッタ間違いなし。

まだ叫び声も聞こえるし、此処は徐々にトルネドの勢いを削いで…、

バタッ、バタッ、バタッ、バタッ。

「「「……………」」」」

「きっかり四人、いっちょ上がりだな。さてと…ん？」

しっかりと生きているか脈を取って、全員気絶しているのを確認。

そして持っていた縄で四人とも締め上げて、一息。
：どうやら下の喧騒も収まったらしい、崖下を覗いたら、四人とも
無事だった。

あちら側も盗賊を縛り付け終わっているようだ。

そして、俺がふと、別の風を感じて見上げると、

「あら、もう終わってたのね。流石はダーリンだわ」

「……」

「きゅい！」

俺が見たのは、若干残念そうに、だが嬉しそうにしているキュルケ
と、

何故か俺を見て思案顔のタバサ嬢、それに加え、彼女の使い魔シル
フィードであった。

No. 16! 「港町への道中」 (後書き)

雪「一般人じゃ一発KO。こんなんで大丈夫か？」

村「ギーシュが何故二股男か知っているかについては、サイトから聞いた事にしといてくれ」

2011／12／15

ルイズに対する

キングダムハーツの世界で言えば、彼女はきっと『強い光の心』の持ち主に違いない。を主人公の思い違いに修正。

ご指摘なされたエイワス殿、有難う御座います。

槍「あれエ…俺要らねえんじゃねエ…」

先生、文才が欲しいです！

お知らせ

まず始めに一言。御免なさい。

色々と言っている内に、納得出来ない所や治したい所が色々出てきたので、

また、初めから書き直していきたいと思います。

・主な変更点

・『謎の肩当て』が最初から使用可能

効果はアーマー・テラ（鎧の男）の姿になり能力を使用する事が出来るという物。

・『ヴァニタスの能力を扱う事が出来る』但し、アンヴァースを作り出す事は出来ない。

・幼少期の話数を増やす

それ以外は特に変更せずに行きたいと思います。

何卒、身勝手な作者であります。応援をお願いします（；´Д｀）

No. a 「踊る火の使い魔」 (前書き)

息拔きに単発で書いてみました。

アクセル (No. 8) が召喚されたようです。

No. a 「踊る火の使い魔」

「……こりゃあ一体全体……」

男が呟いた。同時に醜い頭痛に頭を抑える。

此処は何処なんだ、此処は回路の中じゃない。草原だ。

声が聞こえる。何故か聞き取れない。ダスクでは無い、これは――人間の声だ。

先程までボロボロだった服と体が元通りになっている。

周りを見回すと、人垣が出来ていた。

何処の世界なのか分からないが、どうやらこの世界の住人と見て間違いないだろう。

「――――」。――――。

「声が遠く聞こえる程ジジイになった覚えはねえんだけどなあ」

よおーく、耳をかつぽじって聞いても、やはり何を言っているのか聞き取れない。

真剣に耳を澄ませても、ノイズは大きくなるばかり。

男は溜息を付く、だが内心、いや心なんて無いが――、自分でも珍しいくらい緊張している気がする。

「（戦況は断然不利だな…、武器は多分杖だ。とすると…、様子見か…）」

混乱しつつも現状を分析する程の余裕があるというのには流石としか言えない。

男は数多の世界を暗躍した機関の一人。

様々な世界で遂行したミッションも最早、数えるのが面倒なくらい遂行した事を記憶している。

敵の多くが人間とも、動物とも違う『ハートレス』という存在だったのだが。

「っ…、な、…?」

――あぶるような熱さが、全身を突如として襲った。

炎を属性としてから、味わう事の無かった熱さ。外からの攻撃では無く、内部からの痛み。

対した痛手では無いが、警戒レベルを一気に引き上げた。
後一段階上がれば、武器を出す。…と、痛みが嘘のように引いた。

「ねえ、聴いているのあんた？」

「…！」

更に驚く事に、先程までのノイズがハッキリと聞き取れるようになった。

そしてどうやら背後で聞こえていた取り分け大きい声は、少女の物だったようだ。

立ち上がり、後ろに振り向いて、少女に目をやる。

ピンクブロンドの髪に、鳶色の瞳。

杖を持っている所を見ると、この少女も魔法使いか。

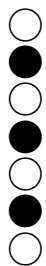
「おっと、悪いな嬢ちゃん。…でお嬢ちゃん、名前は？」

「平民の癖に、自分から名乗らないの？」

「あ、俺か？俺は…」

そこで彼は、お決まりの、左手の人差し指を頭に当てる仕草をして、不敵に笑い

「俺の名前はアクセル。——記憶したか？」



少女の名前は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ラ・ヴァリエールと名乗った。

随分と長い名前だ。だが、俺の名前を記憶してもらっている…かどうかわからないが、してもらう以上、俺も記憶する。

『フルネームは面倒だな』と、率直に言ったら、

「じゃあ、私の事はご主人様と呼びなさいよ」

意味がわからない。

久々に奇妙な人間に会ったなあ、とか思いつつ、アクセルは現状を把握しきれないでいた。

使い魔になれたの、平民だの、ご主人様だの。

変な世界に来たもんだ…と顔を思わず引き攣らせた。

その前に、情報整理しなければならない。

俺は、確実に彼奴の為にあの世界への橋渡しをして、消滅した筈だった。

消滅を味わった事が無かった…というか普通は無いんだが。が、確実にノーバディーである俺は消滅した筈。

だが、起きてみれば体は全快。おまけに見知らぬ世界と来た。

——此処が死後の世界？それか夢でも見せられてるのか？

オードソックスだが、頬を抓ってみた。痛覚はあるらしい。というか、さっきの熱せられるような痛みで既に分かったことか。

死後の世界…についてはどうも違うようだ。ならば、尚更何故？

回路は何故か使えないと来た。

「だーめだな、情報が少なすぎる。」

「何がよ？っていうか、ちゃんと話聞してるの?!」

「…わりいわりい」

「むむむむ…、仕方無あああく、本当に仕方なくだけど、もう一度教えてあげる。重要な事だしね。」

「というか、俺はまだ『使い魔』って奴になる気は無いんだけどな？」

「何言ってるのよ。『使い魔のルーン』だって刻まれてるわ。私としてもあんたみたいなヒョロヒョロな奴を使い魔にしたい訳じゃないわよ。」

「言ってくれるぜ……」

もう一度、回路を作ろうと、手を開いて伸ばす。

だが、やはり回路を作れなかった。…これでは帰れない。

「…ま、少しの間なら使い魔をしてやってもいいぜ。」

「なによそれ」

「ん、だから使い魔をしてやるって言ったんだ。記憶したか？」

「口の利き方がなってないわ。それになによ、その『記憶したか？』って。…『なんなりとお申し付けください。ご主人様』でしょ？」

何やら得意げに指を立てながら言う彼女。

残念ながら、可愛いとは思えるのかもしれないが、主人としての威厳は全然無かった。

アクセルは床に胡座をかいて、腕を組む。

「へいへいー。んでご主人様。貴方様の使い魔であるわたくしめは何をすれば？」

「む、一々平民の癖に生意気よ！」

棒読みで如何にも興味が無さそうに言うアクセルに、ルイズは頬を膨らませる。

「…まあ、多目に見てあげるわ。――まずは、使い魔は主人の目となり、耳となる能力が与えられるわ。」

「何か見えるか？」

「見えないわよ、あんたじゃ無理みたいね」

「…愁傷さまだ」

青筋が増えた気がする。

「それと、使い魔は主人の望む物を手にれてくるのよ。例えば秘薬とか」

「…秘薬？ エリクサーか何かか？」

「えりくさー？ なによそれ。…良い？ 特定の魔法を使用する時の為の触媒の事。硫黄とか…コケとか…」

「硫黄、ね」

「あんた、そんなの見つけて来れないでしょ！ 秘薬の存在すら曖昧だっていうのに！」

「無理だな。」

青筋が一本追加された。

「そして、…これが一番重要なんだけど…、使い魔は主人を守る存在でもあるのよ！」

その能力で、主人に向かう敵から守るのが仕事！…でも、あんたじゃ無理よね、そんなヒヨロヒヨロじゃ…」

「あー、言ったな？俺つえーからな？」

「アンタじゃカラスにも負けそうじゃない！」

「なんの冗談だよ…、ま、この際だから見せてやるよ」

「何をする気よ？」

トットトットツ、と窓際に空いたスペースへと進み…おもむろの両手を左右に伸ばした。

次の瞬間、アクセルの両手を中心に火の玉が回転し、手の周りで一際激しく回ると…彼の愛用武器が出てきた。

「……」

「どーだ」

「あ、ああ、アンタ、メイジだったの？」

「メイジ？なんだそりゃ。…改めて自己紹介だ。」

「No. 8…：アクセル。これは俺の名前な？」

炎の使い手とでも言うかな、まあ、短い間かもしれないーが宜しくだ。」

真っ赤な燃えるような髪の毛の男は緑色の瞳の目を開き、再び不敵に笑った。

No. a 「踊る火の使い魔」 (後書き)

口調とかよくわかんない。口調はマンガ版を基準にして書いた。

え？馬鹿な作者がアクセルを書けるのかって？

あはは、無理無理。(´・ω・｀)

No. 1 「スプラッターな死亡事故」 (前書き)

気を取り直して一本目。

といっても、内容を少し弄っただけですが。

No. 1 「スプラッターな死亡事故」

「知らない天井だぜ☆」

…ごほん、開始初っ端から弾けてしまった俺、村雨だ。

現状を報告するとすれば、死んだと思った知らない天井が見えた。つてところだ。

『大丈夫ですか、主に頭が。』

「大丈夫だ、問題ない…ってかおまい誰や？」

神だ！目の前に神がおる！

——まー予想なんですけどね？

『知ってたんですか…？』

「いんや、違う。…というかモノローグもとい俺の思考読むなんてお前やっぱり神だろ、」

『やけにテンションがお高いですね、…まあそれは良いとして…』

良いのかよ。

それは兎も角、この人、神であることを否定しなかったよ！
やっぱりテンプレか！『ごほん。』おっと。

『すみませんでしたあ！』

わーお、見事な土下座だね！そういえば、【土下座】ストラップと

かあったな。

何気ストラップはやってんだよ。myフレンドの筆箱にジャラジャラ。ボクサーパンツの奴ばかり。

ん、過去を思い出してたけど気にしたら負けだ。別に何かに負ける訳ではないが。

それは兎も角、目の前で土下座しているのは割りと若い姿をしている自称神。

——って追い待て、なんで俺は土下座されてんだよ。

『私のミスで（省略）貴方は死んでしまったんです……。』

「はあ！？…要するにアンタの事務用インクが俺の生命を現す、紙に落としてしまったと？」

…さてよ、でも俺の死因、溺死じゃねーから。あ、別に死因とは関係ないのね。インク関係ないのね。

だって俺の死因、トラックに吹き飛ばされてスプラッタな筈だから！
因みに人間って首ぎっちゃんしても、血が流れている数秒——それこそほんの数秒だが、生きてる。

あれはキタな。色んな意味で。

『そこで私は・・・私の上司なんですけど、その上位の神様から貴方を侘びで転生させなさいとの志命を受けたんです。』

「なるほろ。で、俺は生き返られるのか？」

人間、二度目の生が得られるなら、泣いて藁にしがみつくぜ。
つまりは俺もその一人ってわけだ。まあ、特に未練もないからこん

な平常心でいられるんだろうけども。

毎日、何がしたいのか解らない日々だったからなあ

『元の世界には無理です…すみませんけど、それが掟となってるので…。』

「はあ、して、その掟ってなんぞ？」

——つまりは、俺をもといた世界に戻すと、輪廻の輪が崩れるらしい。

それってやばいのって、聞いてみたよ。そしたら、目の前の神様、顔青くしてたよ。

よっぽど酷いことが起きるんだな。すげー気になるぜ☆

正直、納得の？な？の字もたいして出来てないが、生き返られるなら結果おーらい。

「んで、なんなら俺を生き返らせることが出来るんだよ？」

『えっと…簡潔に言えば、ばられるわーると平行世界に転生してもらいます。』

「それって、創作の世界とか、なのか？」

はい、と頷く神に俺のテンションはじわじわ上がり始めた。

どうせ楽しむなら、楽しもう。―そして一番気になる部分、お願いをどれほど聞いてもらえるかは…。

『CAPCTYは4つまでですね。…私より上位の存在になれば、まだ増やせますが…。』

「あー、それで十分な気がする。」

ひゃっはー！
お願いごとは4つまで。やったね！

ならばどんなお願いをするか。

あー、こういう時って、いざとなるとどんなチートにしようか迷うな…。

というか、チートの基準がわからないし、それらしいバトル漫画も少しも持ってねえ。

「うーん…なら一個目は…。」

一個目。

思いついたのは、ゲーム「キングダムハーツ2」からN.O. 13，
N.O.9の能力を得る、というものだった。

しかし、神様の『機関全員能力を使えるようにしますね』との
一言により、全取得。

どうやら武器も使えるらしい。

二個目。

二つ目以降は悩んだ。

正直、一つ目で「僕、満足！」と草薙○君ボイスが響いたのだが、
どうせなら何か追加することに。

ノーバディーを創り出す能力にすることにした。―ダスクからトラ
イワイトゾーンまでなんでもござれた。

：確かノーバディーの発生条件やらなんやらある気がしたが、まあ
気にするな（何

三個目。

俺が憧れてもいた、『鎧の男』の能力を使えるようにしてもらった。
やったねたえちゃん。

四個目。

んで、次は『諦めろん』な人：『ヴァニタス』さんの能力を使える

ように。

あの人の声優は中々好きだっただけに、これも嬉しい。

『容姿等は私にお任せあれ！』

うん、僕、満足。

『それじゃあ、貴方の行く世界ですが、【ゼロの使い魔】の世界です…抽選なので仕方ないですね』

「え、それって何処——うわちよおまこれ聞いてねえ」

何処ですか、と問おうとしたらいきなり視界がぶれ、気づくと謎の穴にまっさかさま。

嫌な予感しかしない俺だった。

No. 2 「新しい両親」

ここはトリステイン王国内のある村。

その小さな村のひとつの家。

「生まれたぞ！」

「男の子ですって！」

「わー、すごい！」

その家で、一人の男の子が生まれた。

「おぎゃあああ、おぎゃあああ。」

その子供の名前は「ヴェン」。
産声を上げるその子は――。

「おぎゃあああ。（なんてこったい…）」

転生した村雨、その人だった。

俺だ。村雨だ。

意識が無くなったと思ったら、次、目を覚ました時はこうなったんだ。

——畜生、あの神、急に俺を急かしたのはこのせいか！

「リーナ、見ろよ、俺たちの子供は無事に生まれたぞ…！」

「え、ええ。私たちの子ね。…ふー…疲れたわ…」

どうやら声の主が俺の親らしい。

つまりは俺…村雨は赤ちゃんに転生したらしい。なんてこったい。

——あれ？確かノーバディーはデフォルトで不老だったよな？

（大丈夫ですよ。一応、見た目それなりの大人で止まるようにしておきました。）

あれ、答えてくれた。

まあ、とりあいずこれで一生赤ん坊、とかいう詰み状態は回避できた。

しかし、そろそろ赤ん坊の本能（？）で叫び続けたので疲れた。それに、眠くなってきた。

「おぎゃああう。（ねーむー。）」

そして俺も母となった女性の腕の中でこの世界初めての眠りについたのだった。

☆☆☆☆

キングクリムゾン。

——ぶっちゃけ、五年程時を飛ばさせて頂いたぜ！

赤ん坊の毎日は發揮しいって退屈だろうからね！

さて、現在五歳の俺は、周囲に愛されて育つ事が出来た。

直ぐに立って歩いたり、少しだが話せるという成長の早さに、両親と周囲を驚かせた。

正直、後から、これって異常なの見せて良かったのか？と、不気味がられるかと内心ヒヤッとしたが、思いのほか抵抗がないらしく、いまも変わらず普通の子供として扱ってくれていた。

この村はセンチュエル公爵という貴族が治める領地のひとつで、他の北村、西村などとまとめて、「センチュエル領」と呼ばれているようだ。どうやら、貴族や平民、そういう隔たりがあるところを見ると、割と昔な時代らしい。

そして、この世界には、御伽噺ともいえるような物が存在していた。

「魔法」だ。

会話で飛び交う「魔法」という単語に、俺は毎回聞き間違いかと思
い首を傾げていたのだが、実際に母が魔法で物を動かしているところ
を見て、信じざる終えなかった。

に、しても。

実際、魔法使いが出るような小説や漫画で【ゼロの使い魔】という
タイトルは聞いたことが無いな。

ハリー・ポッターとかなら…まああれは有名だしな。

「まー、いいかあ。」

実際全然良くないのだが、まあ目的の一つ「平和に生きる」という
目標は達成したい…と思うな。

あー、でも魔法使いの世界に來たのだから、無論、魔法は使いたい
と思う。

魔法使いになれるのは最初から決まっているらしく、両親、または
先祖に魔法使いの血を持つものがないと使えないそうだ。

平民にはその血が流れていないものがほとんどで、魔法が使えるの

は貴族の者たちがほとんどだそうさ。

まあだから、貴族と平民という格差があるんだろうな。
この世界では魔法は圧倒的らしいし。

因みに、母はメイジであるのに、何故貴族でないのかというと、没落貴族なのさそうさ。

そこで平民である父と出会い、今があるらしい。

――で。

肝心の魔法適正といえば…。

「せんせー、杖契約ってどうするんでせう？」

「何いつてるのヴェン。…ほら、もう一度よ。」

母に契約の仕方を教わるも、それらしい反応すら見せない始末。
…おい、父ちゃんなんでホッとしてんだ!?

「良いじゃないか、リーナ。杖契約だって何週間もかかる奴もいるらしいじゃないか。」

ふーん、そうなのか。

でも、それっていつか使えるって事なんだよな。それじゃあ別にホッとするかどうかでもないような。

「それに、『魔法が使える』ってだけで、仲間はずれにされるかもしれないだろ？」

さ、流石は我が父…そこまで考えてくださるとは…！

「

それもそうねえ…、でも我が子がどれほど魔法が使えるかと思うと、わくわくしない？」

まあ、僕も気になる事は気になるけどね、と子供のように目を光らせる母を見ながら苦笑する父。

ど

っちかとゆーと、夫婦ってよりも、兄妹みたいだな。

父の名前はレイルと言う。

平民にはどうやら苗字が無いらしく、原則、下の名前だけという事になるようだ。

趣味は読書。日中は薪割り等、仕事を終えた後は良く読書をしてい

る姿を見る。

何でも、元傭兵だったそうで蓄えてある金…（平民が持つにはとても多い量）で商人から本を買って居るようだ。

無論、俺も読書は好きなので父の膝の上に乗ったりしながら本を眺めたりしていた。

実際、文字が最初は全然読めなかった。…まあ今では父の教えにより、ある程度の文字は読めるが。感謝。

「うん？ヴェンは本が好きなのかい？」

「うん、本大好き。」

「そうかそうか。やっぱり本というのは良いもんだよ。」

それについては喜んでくれたようだ。…だが父よ、五歳児に本に付いて熱心に語るというのも。

まあ、その気持ちは良くわかったが。

誕生日に、『勇者イーヴァルディ』…だっけか、そんなタイトルの本を買ってもらった。

何気面白かった。

父は厳つい体をしている訳では無い。というか、『本が読むのが趣味です』と言えば、確かにそう見えるという、比較的痩せた体型をしている。

それでもまあ、筋肉は付いているのだが。カッチカッチやぞ、お前。

母に聞いても、「昔は凄かったわよ…今も変わらないかもしれない

けど…」と何故か遠い目をして
真面目に答えてくれない。おゝい、帰ってこい。

さて、そんな遠い目をする金髪の美しい女性――母の名はリーナ。
上でも述べたように、母はメイジである。苗字は父の伴侶になると
決めた時、捨てたらしい。

趣味は運動。体を動かすのが好きなようで、健康にも良いからと言
って毎朝俺を連れ出して
村をランニングする。五歳児に無茶させんなよと思ったが、以外と
悪くないので付き合っている。

御陰で、近所の子供達との鬼ごっこでは何時も生存させてもらって
いる。

俺暇人だな、おい。

というわけで、俺は二人の息子としてこの世に生を受けたのだった。

No. 3! 「修行だ!」 (前書き)

最初らへん自信無いです、書いというのかもしれませんが、説明がどうも下手くそなので、伝わらない場合があります、サーセン。

No. 5は便利。って事を伝えたい話でも……あるのか？
んで、特に変更が無い予定だった（副作用らへん）のも追加してたり…。

記憶力がどうも薄い作者です。今後共4649。

No. 3! 「修行だ!」

ハルケギニア大陸。

大陸と言うのだから、他の大陸もあるんだとばかり思っていたが…。

「ダスク、そっちは見つかったか？」

？駄目ですね。その地理帳を見ても、ハルゲギニア大陸だけしか有りません。？

「うん…?」

いや、実際に分けるなら、四地位域あるのだが……これが異世界という物なのだろうか。

だとしたら……狭いな。うん。すげー狭い。

ハルケギニア自体、ヨーロッパ大陸のような形をしている。

いや、でも大陸が続いている感じはするのだ。ずうーつと西にでも、南にでも行けば他の国もあるはず。

——はあ…と俺は溜息を付いて考えるのを辞める俺。

と、その前にご紹介しなければいけない事がある。

今、父の本部屋（本ばかり置いてある一室。）でこの世界に付いて

調べようとしている俺は、

『うわ、以外にあるな…。』

時間を掛けて読むのは良いのだが、知りたい事は忘れる前に知っておきたい物。

で、結局こんな事の為に創り出していたダスクに協力を求めたのだった、まる。

ダスクは、原作でもN.O. 13に話しかけていたように、テレパシーのような物で会話をする。

ダスク同士、ノーバディー同士がどう会話するのかは分からない。

特長は絶えず、フラフラと動き回り、体に比べて若干大きい頭…チャックが付いていて、それが開いて口のようになっている。

（他のノーバディーに置いてとも言える事ですが、容姿に付いてはググってください。）

はっ、今何かに思考をジャックされた?!…ええい、悪霊退散悪霊退散。

原作の情報収集で活躍していたダスクを使えるのでは無いかと、思っただスクにした訳だ。

現在も、楽しい訳でもないのに愉快そうにフラフラしている様子を

見ると、忘れがちになる事がある。

——彼ら（ノーバディー）には心が無い。

だから、実際はダスクは楽しくてフラフラしているのではなく、ただ、人間が目を瞬きをするのと同じように特にその行為に何かを思うわけでも無く行なっている。意味はあるのか…知らないけども。

『ノーバディーは抜け殻。生きる意味を失った、虚の存在。』

存在しない物とも言われる、彼らではあるが、幽霊とは別である。確かに、物理的な敵対攻撃に関してはスルツと透けてしまうのだが……兎に角、幽霊では無い。

「でもはたから見れば、楽しそうなんだけどなあ…」とダスクを横目に呟き、再び地図へ目を戻す。

ふと、本を直す音が潜め、目を向けると——どうやら等々、他の大陸の情報は得られなかったようだ。

と、ここで初めて第三者がたてる音に気づいた。…足音だ。

「(ま、不味っ!) 隠れろ、ダスウウク!」

出来るだけ小声で叫ぶ。だが、ダスクは悠長と動くだけで危機感を感じていない。

——ガチャリ。…時既に遅し…なの…か?

「ふう…念願の休憩時間…って、こらヴェン。勝手に入っちゃ駄目だろ?」

父さんがログイン(入室)しました。

ああ、キック(追い出し)が出来たらな…と、油断した事に後悔ながら呟いた。

所が、父さんの反応は至って普通。はて。

「(あれ…居ない?) ごめんなさい。」

忍者のようにドロンをした訳でもないのに、ダスクの姿は忽然と消えていた。

俺は目をパチクリして挙動不振。父はそれを見て苦笑。

——取り合えず助かった。

取り合いず、怪しまれない程度の演技でしょんぼりしながらログアウト（退出）。

「そういえば、ダスクって姿消せるんだっただけか」

？常識中の常識で御座います。無論、これを戦法にした戦い方に特化したのが『暗殺者^{アサシン}』です。

といっても彼は色々と物理現象を無視しているんですけどね。？

「なるへそ。ていうか物理現象無視してるのもノーバディー共通じゃないか？」

？ですね、まあ流石に光のスピードでは移動出来ません。単純にスピードが出せないだけですけど。

ロクサス（No. 13）様のように『光』自体になれば可能ですが。？

物体は光の速さでは動けない。促進力が無いのも単純な理由でもあるけど、

実際に動けたとして動いてみる。一瞬でバラバラになるぞ。

そう聞いたことがあるだけで物理学について全然知らないんだけどね。

因みに、物理現象無視と言えば、某蛇はドラム缶で転がりながら階段を登ってたな。

下るじゃねえぞ、上るだぞ。ブルータス。

怪力でどうになるかもしれない。何時かやってみるか。

「ふんっ！」

ソードアックスを両腕で持ち、俺はダスク目掛けてマキを叩き割る感覚で振り下ろす。剣自体の重さに加え、N O . 5の馬鹿力が加わり地面が割れる。

ダスクと言えば、紙のようにペランペランしながら回避している。…力がまだ足りないな…、身長のせいでリーチも短いし…。

——現在、俺は人間が持てるような大きさではない大きさのアックスソード（剣の形をした斧）

を振り回して、修行をしていた。

無論、人目の少ない森で、だが。

地面のあちこちには、先程と同様の攻撃で抉られた跡が残っている。時々、何か鋭い物が突き刺さった跡があるのだが…。

「（来るか）」

回避に徹していたダスクが不意に止まり、跳躍する。まるでバネのように。くるり、と人間技では無い体の捻じ曲げ方をして、両腕である部分を構える。

予備動作はこれで十分。右足、左足とステップしながら後ろに下がる。

直後、伸ばされたダスクの腕が――冷酷なまでに鋭く尖った『腕』が俺の足を貫き損ねて地面に穴を開ける。

――右、左、右、左。

当たれば確実に足に穴が空くだろう。

それをどうして一般ピーポーな俺が慣れたように回避出来るのか――。

単純に言えば、能力使用中の副作用のせいである。

これはハッキリ言って、知らなかった。
何故かというと、この部分だけ神が見事に説明をスッぽ抜かしていたから。

（ごつめーん☆うつかりしてた！てへっ）

塗っ殺したくなったのは悪くないよね。なんでそんな重要な事を言わなかったのかと。
んで、その内容は。

使用中は『心』が薄くなる。

なんの事やらサッパリわからないと言う人も居るだろう。

まあ、単純に言えば恐怖、歓喜：それらを全くとは言えない物、感じなくなる。

これには、メリット反面。デメリットもある。

恐怖心が無ければ、冷静に考える事が出来俺のような一般人でも慣れたように回避できるようになる……

訓練も積まなければならぬが、出来るようになる。

これはメリットだ。冷静になれば、戦場で生きる確率も格段に上がる。

デメリット。

それは、戦いの独特の緊張感、高揚感をシャットアウトしてしまう事だ。

バトルジャンキー

戦闘狂にしてみれば酷い物だろう。

まあ、戦闘狂じゃないので俺は大丈夫だけでも。

見えない天井にでも張り付いているかのように宙に佇むダスク。

ケケケケ、という笑い声が聞こえそうな頭の動き。かくかくかく。

刃を上に向け、掬い上げるようにダスクを狙う。

が、やはりリーチが届かず、かわされる。

ドスッ、と目的を捕らえずに終わったアックスソードが地面を再び抉る。

直ぐ様柄を握り直し、肩に乗せるようにしてその場を飛び退く。

？ 武術の経験は無いとおっしゃいましたが…、動きが立派ですね？？

「まあ、粗悪な真似事だけだな。本場の人間からみれば…ね。」

力も段々とだが、上がっている…というか付いている、かな？

ゲームで言えば、PワーOWが1ターン事に大幅上昇するような能力がNo. 5にはある。

上昇スピードはリミットカットバージョンなので桁違いに速い。

後15分もあれば、軽自動車を持ち上げる程の力が出せるようになる筈だ。

：見た目が五歳児なので、アレだが。何処のア○レちゃんや、いや待てアイツは地球を割ってたような…？

ア○レちゃんは兎も角置いといて。

無論、力の上昇には脚力も含まれる聴力は流石に無いが。

「ふんすっ！」

しゃがみこみ、一気に足で体を押し上げる。

同時に両腕にアックスソードを持ち――剣の腹で、ダスクをブン殴った（・・・）

？今のは以外です…、といっても機関員の力を持ってすれば楽な物でしょうが。？

「おキツイ言葉だ事、これでも五才なんだぞ？」

？精神年齢がね（笑）？

「なんかムカツクぞこの野郎！」

五才になってから始めた事ではあるが、修行として

『まずは一撃でもダスクに攻撃を入れる』という事を目標にし先程の戦いが繰り広げられていた訳である。

因みに二ヶ月ぐらいかかった。

で、なんでN O . 5にしたかというと、五歳児で振るえる武器など早々ないと言う事と

『ナイフとかこまけえのより、大振りなのがいいんだぜ！』という事でアックスソードになったわけである。

刀身は二メートル近い。持ち手は斧と同じ形で、付いている刃が剣の形をしているという訳だ。

まあ名前からしてそのまんまだが。

因みに、ノーバウンドで軽く吹っ飛んだダスクと言えば、何事も無かったかのように

俺の方へ歩いてきた。

そんなダスクを見ながら、再び本を浅くっていた時のように思考する。

喋り方が感情的で、動きがユニークなのは彼らが、記憶という名の仮面を被っているからかもしれない。

昔、人であった時のように、今も…今はそうやって感情だけが抜け落ちた仕草をしている。

『心の無いノーバディーは記憶を元に人格を形成する』

まあ、殆どが記憶を失った、本当の意味での抜け殻が多いらしい。らしい、というのはダスクから直接聞いた話だからだ。本当かどうかはわからない。

「そろそろ帰らなきゃな…、んじゃ、また明日な」

？わかりました。では御休みなさいませ。？

かたかたと体を震わせるダスクに見送られながら、俺は帰路に就くのであった。

No. 3! 「修行だ!」 (後書き)

アルビオンって一応独立大陸なんですか＼(＾o＾)／
こうですか、わかりません。(。Д。)。。

独立国だったか独立大陸だったか、それとも両方だったか…。

サムライ「あれ、拙者は?」

雪「すまん、お前の設定が色々無理矢理だったから…」

サムライ「無理も無いでござる、特に拙者がどうして話せるからへんとか…」

使い魔について、一応アンケートを取ります。

1 ハルケギニア産モンスターだろjk

2 作者の好きにしまえよ(＾ω＾)

3 よし、俺に案がある、聞いてくれ

4 ノーバディーの種類から引っ張ってこい

よろしくお願いします。

No. 4! 「素人だから仕方無い」(前書き)

新作「KH 3D」ですが、作者は3DSを買う金が無いので断念
＼(＾o＾)／
今作で色々な謎が解けそうだけにPV見てからテンションがどうかしてるぜ!

【現在アンケート集計途中結果】

- 1 ハルケギニア産モンスターだろjk || 0票
- 2 作者の好きにしたまえよ(＾ω＾) || 2票
- 3 よし、俺に案がある、聞いてくれ || 4票
- 4 ノーバディーの種類から引っ張ってこい || 0票

：となっております、投票してくれて有難う。

召喚する話はもう少し後になりそうなので、それまでまだご意見募集。

因みに3では、エヴァ(ネギま)、モンハンが多かったです。

他にも出して貰ってるのですが、原作を持って無いせいで残念ながら作者には書けない物でした…。フェイトとか、遊戯王とか。

複数出してもらえると、作者でも知っているキャラがあるかもしれないw

No. 4! 「素人だから仕方無い」

心。

誰もが、小さい頃 「心ってどこにあるの?」
と訪ねたことがあるだろう見えない物。

親に指指された場所は胸の真ん中辺り。

「ここにあるんだよ。心は、ね。」

でもね、「心なんて所、無かったよ」と。
子供はむくれて言う。

「見えないよ、でもね、誰だって感じられる。
おとうさんやおかあさんの事、好きでしょ?」

「うん!」

大人にもわからない事。

その子供が成長して――

――そして改めて思う。心とは、何だろうってね。

「――」

「ぐっ、」

鈍い残光と共に、アックスソードを通して俺に衝撃が入る。

凄まじいパワーで？ 奴？ は一向、俺目掛けて武器を叩きつける。

声にならない叫びを上げて馬乗りの状態で更に武器を叩きつける
スピードが

あがる。ガキツガキツガキツ！

幸い、アックスソードが壊れる事は無い。
だが…

「俺の腕が壊れそうだよ畜生！」

「――」

強引に相手の攻撃に割り込み、仰向けの体制から横に武器を薙ぐ。
体を押さえつける力が無くなったのを感じて、直ぐに立ち上がる。

右肩にアックスソードを担ぎ、手への負担を和らげる為にだ。
だが、次の一手は間もなく来るだろう。拘束状態だけは二度も受けたくない。

「?ドラグーン?……面白半分で戦う相手じゃなかったなあ……はあ……」

ダスクの上位者。

『強い奴と戦えば、いい経験が得られる筈! ハイリスクハイリターンだ!』

と。まあ、直ぐに後悔し始めることになったのだが……というか現在進行系で凄く後悔している。

?や、ムチャしやがって……?

「うっせ、ここまで強いとは思わなかったんだよ!」

ドラグーン。

ダスクというノーバディーが、『普通』『派生前』だとするなら。

？疾風の如き：そして叩きつける嵐のように？

『疾さ（はやさ）』を追求した型がこのドラグーン。

姿は竜騎士のような姿をしている。

：竜に乗って戦うような奴じゃなくて、文字通り

竜と人間の騎士が融合した姿をしているのだ。

頭意外は人間の姿、頭は竜そして翼が生えている。

竜といっても頭はプテラノドンのような物だけど。飽く迄バランス
良。

そして、手に持つ武器は先端が鮮やかな紫色の槍。^{ランス} いや、形的にス

ピアのほうか。

だが、身を守る盾は持っていない。

一撃離脱、ヒットアンドアウェイ、乱舞による畳み掛け。

戦法も速さを生かした物ばかり。

つまりは、力が異常なもののスピードが全然追いつけ無ければ当た
らない。

——相性は完璧に悪かった。

？敢えて助言させて頂くならば、『相手をよく見ろ、当てに行くの
ではなく、

当たりに来させろ』。？

「成程、意味わからん。」

当たり前に行くな？…当たらなきゃ倒せないだろう。

ドラグーンが理性を無くしたような、普通じゃない状態ならわからないかもし

れないが

自爆なんて起きる訳も無い。

キュピィー！

鮮やかな緑色をした四角形の渦がドラグーンを中心に現れる。

「（来るっ！『ラーニング』か！）」

蜃気楼のように姿を一瞬で消すと、瞬きする暇も無く、

「うおおおおっ！？」

辛うじて身を守る為に構えたアックスソードの一点に力が集中し…。結果、手首から嫌な音がしておまけにアックスソードが宙を舞った。

畜生、不味い。恐らく折れたであろう両手を庇いつつ。
後方へと弾かれたアックスソードが、地面に窪みを作って転がっている。

しかし、ここでアックスソードへ無事にたどり着けても、持てない。

「（にやろめ…詰んだか…、

あ、いや待て。まほうがあつたな。）…雷いかづちよ！」

…結果。

「俺の努力って何だったんだろうな…」

？…さあ？？

サンダーのまほうは、油断していたドラグーンに直撃。

体の一部が焦げ付いていて、目標の一撃を加える事が出来た。

——俺、魔法使いになろうかな…。

？…所で、先程のアドバイス、聞いていましたか？？

「うんむ。自爆させろって事だろ？」

？それを期待しても駄目でしょうに…。？

やれやれ、と許りに肩を竦める仕草をするダスク。

馬鹿（俺）に何期待してんだよ！あんなアドバースで分かるかよ！

？馬鹿でなくても戦闘センスが有れば……。もし素人を理由にするのでしたら

ロクサス様はなんというのです？？

「ストラグルバトル（原作にある競技名）の賜物？」

？違いますよ。それは彼が賢者の作り出した偽の街に居た時でしよ

う？？

うつ、そうか。当初でも彼は弱かった。

どれぐらい弱かったかというと、No. 5に一撃で瀕死にさせられたぐらいに。

だがそれでも、

「最初っからいい動きしてたんじゃないか、」

？主人公だから強くな…。「ストオツプ！それは言わないお約束！」
…。？

☆

主人公はノーバディでありながら、心を持つという——
ロクサス

——極めて矛盾した存在だった。

それは、彼の元の存在に理由があるのだが、そちら系の知識に疎い方には

迷惑だろうので省かせていただく。

当初、彼は只無口でボンヤリとした意識の中、機関メンバーとして暗躍。

そしてそこで、先輩とも親友ともなるNo. 8と合う。

No. 8は新規参入であった彼に機関としてのノウハウを教える一人。

これが二人の出会いであった訳である。

——いや、正確には二度目か。

素っ気ない（心が無いから当たり前だが）他のメンバーと違い、No. 8は面倒見の良い人物だった。

人というのは、良く接してくれる、親切な人物を頼りとするもの。

機関員からは『部下（No. 13）の世話係』という事でその後も任務を転々とする

。

その過程で、彼は徐々に力を付けていったのであった。

☆

「…まさかの、？カウンター？だなんて…。」

ダスクの言う『当たりに来させろ』というのはカウンターだったようだ。

だが、種明かしをされた所で…そんな技術俺には無いぞ。

『…？？カウンター？を行うのは飽く迄時間稼ぎです。時間と共に力が上昇する

No. 5は、どう力を溜める隙を作るかが勝負の鍵。？』

との有難いお言葉を頂いた。

ストレートに言ってくれれば、あんな終わり方をしなかっただろうに。

…終わってしまったのだから最早、仕方無いけども。

時間稼ぎにまほうを使うのも良いかもしれない。

☆

さて、現在昼時。

今日の修行を終え、午後は子供達と遊ぶか、的な事を思いつつ。
村へと戻る道を歩いていた。：因みに、森と村は意外と離れている。

あの森への出入りは少ない。

何故なら、材料にするには無駄に堅く、入手に手間が掛かる上加工
にも時間が

掛かるというけして良い木ではない。

それよりも、この森とは真反対側に位置する別の森のほうが、材料
になり加え

て高く売れる木があるのでそちらの方が人が多い。

櫟けやきの一種らしいが：詳しい名前は忘れてしまった。

興味無いしな。

「：何か争う声が聞こえるな：」

更に村へと徒歩を進めると、途中、言い争う声が聞こえた。

面倒ごとに首は突っ込まないほうが良い、とは言われるが…。

「（気になるモンは仕方ない…）…おし、俺は何も見えてないぞ」

俺が見た光景…。

「ケツ…豚野郎が…」

「ブヒイイツ！」

「糞っ…なんてことだ！皆の者！お嬢様をお守りしろ！」

山賊、オーク、領主の警備兵
三者の睨み合いが繰り広げられているという場面であった。

No. 4! 「素人だから仕方無い」 (後書き)

【用語・紹介】

「ドラグーン」

ダスクよりも上位の存在である、No. 3の配下ノーバディ。

『ラーニング』という瞬間移動のような技で高速奇襲を仕掛ける。

原作では常に翼で空を飛んでいる。

「ハイパーヒーリング」

主人公意外、仲間にある能力で、気絶（戦闘不能状態）に陥った場合大幅回復して復活（戦闘復帰）する。

今小説では、気絶中のみ発動するように。

流石に、復活はしない。
リザレクション

どうも、雪です。

早く原作メンバーに会いたい、召喚魔法したい！…んですけど
しばらくは作者のオリジナル話にお付き合いくださいませ。

N o. 5 ? 「狭間」 (前書き)

急展開?…いや違うかな?

最初は若干ギャグ要素の多い話で進めようと思ったのですが、何故か書いている内にシリアス?展開へと発展。

No. 5 「狭間」

睨む四者。

少なくとも、それなりに殺気の立ち込めているであろう空間。

それが、現在。昼時の平和な野道で繰り広げられている光景であった。

オーク。

貴族の護衛であろう兵士達。

山賊ども。

そして――

「（どうしてこうなったし……。）」

俺だった。泣いてもいいですか？

なんたって7歳児がこんなリアル戦いが始まりそんな場所に居合わせなければ……。。

思考を巡らせる、どう考えても俺が見方にするべき……いや守って貰

うべき陣営はあのチェーンメイルを着た兵士達だ。

いや、それは図々しいお願い…だよな、一応初戦闘だけでも戦える筈だし…。

「(待て俺、冷静になれ。…無理ゲ／(＾o＾)／
そうだ、能力を使うんだ俺!)」

【Flurry of Dancing Flames (踊る火の風)！】

サーッ、と乱れていた思考が静まり、危機感を含め一切合切が薄くなって行く。

毎回思うんだが、この感覚、慣れない。
文字通り、『心が薄くなる』のだ。この状態では、『人為的価値』で体を動かさなければならぬ。

そこらへんは曖昧だから仕方ないとして。

両手に炎が灯り、手を中心にグルグルと数回回る。

そして一際炎が強く燃え、…次の瞬間にはチャクラムが両手に握り締められていた。

形状としては、円盤型で尚且つ、様々な部分を手で持てるように改良された物で周りには明らかに殺傷を目的とした刺が付いている。

機関でも優れた者であるNO. 8。これはそのNO. 8の能力である。
る。

表面は気の優しい人物に見えたであろうN.O. 8だが、裏は機関内の裏切り者を抹消するという『暗殺者^{アサシン}』の役目を果たしていた。そして実際にN.O. 4が彼によって抹消されている訳である。

「何だあ…？あのガキ何処から武器を出しやがった？」

「手から炎が出ていましたぜ、親分。…恐らく貴族の子でしょう…あつしにいい考えがありますぜ…」

「ケケッ、そりゃあいい考えじゃねえか。あの馬車に乗ってる上玉も惜しいが…」

「（何を考えてるんだ…？）」

正直、とんずらこきたくて仕方がないのだが…と、ここで動きがあった。

山賊達が一斉に、俺の（・・）を方を向いて、ダッ、と駆け寄ってきたのだ。

——え、俺に？

「おらあ！寝てるんだな坊主！」

「ぐえっ——」

心が薄れていても、隠せなかった驚きに身を強ばらせている内に山賊の一人に腹を力強く蹴り飛ばされた。肺の空気が抜け、痛みが体を走る。

縮こまって耐える物の、大人の脚力で蹴り飛ばされたのだ。

通常の子供なら、あっという間に意識を失っているであろう蹴り。だが、俺はそれに耐えた。そして、ギリギリで能力を使い、

ファイアーウォール
「炎壁！」

再び蹴りを入れようとした山賊の男の足が、炎壁へと突っ込んだ。ジュッ、という「何か」が焼ける音がして…。

「ぎゃあああああッ」

男の断末声。

思わず、重くなる臉を見開き俺がみたのは。

——溶解してしまった男の片足だった。

思わず逃げ出してしまいたかった。何事も無いように過ごしていたかった。

だが…『明らかに自分が起こした事件だと言うのに』…『まるで他人事のようにしか思えない自分がいた。』

「（畜生…こんなつもりじゃなかったのによ！）」

『人為的価値』が悲痛に叫ぶ。

「（…くだらないな…）」

『薄情な心』は呟く。

——ああ、これが彼らの苦しみなのか。

——彼らが心を捨てたのも無理は無い。

——『人為的価値』で嘆くより、怒るより、

——捨ててしまったほうが楽ではないか。

No. 5 「狭間」(後書き)

書いている内に気付きました。

機関員達は、『ノーバディになってから心を捨てたのか』

『心を捨てたからノーバディになったのか』

まあ、後者がそれなんでしょうけど、ヴェンの場合は前者になりそうです。

まさしく、「どうしてこうなった」ですね…。やめて！石投げないで！

書いている途中で思いついたので、今回は区切りを付けて無茶苦茶短いですけど

投稿させて頂きました。

今後とも宜しくです。

うーん：正式にノーバディになったということで、専用の新能力でも

考えてみようかな…。

No. 5+ 「正式なノーバディー」 (前書き)

PV10万超え！有難う、みんな！
ユニークも1万5千！感謝！

スランプなのか、それとも妄想が入り乱れた結果がこれなのか…。
前回ではギャグを入れようとしてシリアスになったのに、今回はシリアスを入れようとして、ギャグが入ってしまった。神が悪いのだ、神が… (あ

【現在アンケート集計途中結果】

1 作者の好きにしたまえよ (^ω^) 〓二票

2 よし、俺に案がある、聞いてくれ 〓五票

：4と1は流石にないと思ったので省かせて頂きました。
2 (元3) が有力です。

総統計でモンハンが多いです。ひよつとしたらモンハンになるかも？

続けて募集しています。ドシドシ、意見をください！

それでは後書きで会いましょう。

No. 5+ 「正式なノーバディー」

——心やがて、闇へ帰るのだ。

「違うさ、帰る場所は闇だけじゃない。落ちる場所が闇。」

——ではおまえの言う帰る場所とは何なのだ？

「それを俺に聞くか：闇の探求者よ。：まあ、答えは無いさ。」

——無い？

「ああ、無はその気になれば：再び光る事も、闇へ落ちる事もできる。」

——貴様は何処に行くのだろうか。：まあ良い。落ちる時は歓迎しよう。

「いらんお世話だよ。」

変な気分だ。おれが無意識に『彼』と話している夢を見たんだよ。誰だって？原作第一作目のラスボスであるアンセムさんだよ。知らない人はぐぐっ t (ry
なんでまた、彼と会話しなければならぬのか全くわからなかった

が、中々気さくな人だった、悪者なんだけどな。

「…んで…野道だったはずなのに俺は何でここに居るんだろうな。」

『ちょーつと、お渡しするものがありました…』

何時ぞやの神様が目の前に居る。

神出鬼没だ…まあ、神ならば仕方ないな、と思い。

「フハハハ！自ら死に來たかぁーっ！」

『ひゃあああああぁ！？うわちよやめろいややめてください』

ヘットロックで副作用らへんの説明不足に対する罰を受けてもらった。
なんかこの神、ノリいいな。

☆

「渡したい物とは？」

『寝違えて無いのにこの寝違えたような感覚……あ、はい。えっと

確か…あ、その前に。』

「ん？」

暫く自分の首を触っていた神であったが、…というか、神って寝違えんのね。

で次は、右手薬指と親指を弾く。指パッチンだ。（確か本来は中指だった筈）

そして、神の左手にはいつの間にか黒い布が。

ただ、フードが付いていたり、何やら首の当たりから見たことがあるアクセサリーがぶらさがっていたり、って。

「アンタは人にコスプレさせるのが好きなのか？まさか、これが理由なのか？」

『ち、違いますよ！…貴方は現在自分が何者なのか分かっていますか？』

「…何も変わってるようには思えないが…まあノーバディーだな。あ、成程。」

『例の機関が着てるコート』『例のコート』…まあ例外があるかもしれないが、見たことがあるだろう。

あれはただ単に自分の正体をわからなくするだけ、というものではない。

…といっても、眼深く被れば顔がわからなくなるという高性能さは

あるのだがそれは置いて。

『闇から身を守る為、干渉する為』が本当の使い道でもある。

ノーバディーは程なくして闇に溶ける。この説明文のように狭間であるノーバディーは取り分け耐性が低い。

機関メンバーとしてもそれは変わらなかったのか、どう作り出したか分からないこの黒いコートで身を防いでいたようだ。

機関としてスカウトされ、それを受けた者はこのコートと『X』を加えたアナグラムに名前を変える事になる。

(例 S O R A (空) ↓ R O X A S (ロクサス))

ノーバディーになったのは……仕方ない。然し、不老か……。ん、不老？

「なあ、今回俺がノーバディーになった事で成長止まったりしないよな？」

『あ、そうでしたね。……どうします？一応元のように、20歳になったら止まるようにできますけど……』

「…待てよ。俺はノーバディーになるという事は必然的にそのロブが必要になる訳だろ……？」

『ええ、そうですね。…無論、家族の前でもずっと、です。不老ではありませんが、同時に闇に溶けるという寿命があります。』

☆

『よし、アナグラムについては＜＞337に頼もう、』

「おい、何スレ立ててんだ、いや、前から立ってた!？」

いつの間にか手にパソコンを持ち、なにやらマウスを弄る神。
これは止めなければ。ふと何か殴るものがないかと周りを見る。

「いいもの発見。…これって殴って大丈夫なのか? ええい、ままよ。」

『くっ、違うその発想は前からあった! もっと別だ、＜＞467回答を頼む』

俺が地面か拾い上げたのは、全体が金色で出来た明らかに高価な物。
しかも重い。因みにバット。

生産会社であるメイドインが書いておらず、ただ太文字で『HR』
と書かれた物。ホームルーム?

『ちょWWWそれはWWW』

「雑草生やすなこのエセ神がああああ！」

「ハイダラー！」

『アッー！』

カアアキイーン！（HRで殴り飛ばされた音）

見事に場外ホームラン。、というか、あの勢いなら地球というグラウンドからホームランしそうだ。

無論星になったさ。

470 .. 名無しさん@ゲスト .. 2012/12/24（水）

22..41..28 ID..GESTO

>>1

無茶しやがって…

さらば神。

そして良いセンスだ、470よ。

『痛い…うー、肅清にホームランバットを使うのはどうかと思うんだけど…』

「知らんし。というかたった今お前星になっただろ？…んで後ろ向いたら居るってどう言う事なんだよ」

『私の異常だじえ…。最早笑芸さ…。』
アブノーマル
もはやおわらい

「ね、ネーミングセンス…。」

☆

『所で奥さん』

「誰が奥さんだ。…どうしたんだ？」

『貴方、これからどうするんですか？』

「え、普通にグダグダと一般生活を営む…」

『駄目ですそれじゃあ！読者様達にも失礼ですそれじゃあ！』

「じゃあどうすればいいんだよ」

『私にいい考えがあります、貴方はノーバディ。不老でしょう？…
かくかくしかじか』

「…うんむわかった。」

俺は神様から提案された条件を飲み、頷く。サムズアップする神。
何とかその後、3分で復活してくれた神に、選別としてHRを貰い
俺は元の世界へ戻っていったのだった。

☆

「…（さっきよりも空気が殺伐としてるな、おい）。」

仕方が無いと言えど仕方がない。
先程まで居た少年が――

——突如、黒いフード付きローブを纏った（＋H R）大人へと変わっていたのだから。

No. 5+ 「正式なノーバディー」 (後書き)

スマブラ界の神具、ホームランバットHR登場！

やめてー！石投げないでー！

アナグラムの行については、現在未定です。

もし、考えてくれる人が居るならば付けよとは思いますが。

原作じゃNo. 1が付けてたもんね。

神様の使った異常については、スルーしてくださいw

「あれ、なんだこれエ…」書いてて自分でも思いましたからw
因みに、作者は「無茶しやがって…」という言葉が大好きです。
理由？なんとなくだけど…。

今後ともよろしくお願いします。

ヴ「コメント？作者にとっちゃラストエリクサーだぜ？」

N o. 6 「切りが悪い」(前書き)

ねんがんの げんさく を てにいった !

取り合いず、1巻く4巻まで買ってきました。

それと、改章5話を修正しているので、そちらを読んでからじゃないと

「アレ？」ってなります。まあ把握出来る人は問題ないです。

N o. 6 「切りが悪い」

——貴様には俺は殺せない。

「ああ、殺せないよ。」

——…講義するのかと思ったのだがな…貴様は私を葬り去りたいのではないのか？

「ああ、闇には長く浸かりたくないもんだ。」

——矛盾しているな。

「だっ、そういう探求者は相変わらず俺に答えを求めるんだな。」

——何の為に貴様を呼び出しているのだと思っている。

「愚痴を聞かせたいからだろ？」

——…ふん。

「俺には…人も生き物も容易には殺せない。」

——怖いのか？自分の手を汚す事が。

「それ、俺に聞くか？心無いのに？」

——成程、愚問だったようだな。後は正当防衛ならという事か。

「随分と基準が曖昧ではあると思うけど」

「なあに、心が無くても力はある。何も戦いの為だけじゃない。人助けでもさせてもらうさ！」

心無し（ペテン師）がボランティア（人助け）をしちゃいけないなんて法律は無いからね。」

☆

俺は色々な意味でビックリするしかなかった。

山賊の姿は右足が犠牲となった男以外、地面に散らばった武器を見る所、逃げたらしい。

おいおい、それやねーだろ。と呟き、一般市民を見捨てて逃げていく馬車を見る。

「何か…命の軽い世界だなあ…そう思わないか？山賊さん」

「ひっ…た、助けてくれ…攻撃したのは悪かった…」

「おいおい、大丈夫かよ…つと…」

「うわっ!？」

横目にオーク鬼の武器と思われる棍棒が迫るのが見えた。：なんかヤケに遅く見えるな。
勿論、黙って攻撃される趣味はないので。

「目には目を、鈍器には鈍器をつ！」

お馴染みのS E（効果音）と共に、棍棒が無理矢理オーク鬼の手からもげ、空へ舞い上がっていく。
恐らく摩擦か何かで引火したのだろう、純木製の棍棒は燃え始めていた。

うん？でもまともに殴り合っても、ホームランバットHRの発生条件は満たされなかった筈だ。

『ぶち当てた物に押し勝って初めてその効果は発揮される。因みに両手で振らないと駄目。』

例えば、極端ではあるが全速力で走る車に対してバットを振って当たった所で、車は傷つける事が出来ても、
車が止まる事は無い。バットはそのままクルマに持っていかれるか、手から落ちるかだ。

逆に、ヘロヘロなゴムボールなら振って当たった場合無論、飛ぶ。

結果はどうであれ、間違い無くバットが打ち勝つ。

HRはその結果を『滅茶苦茶馬鹿みたいに吹っ飛ぶ』に無理矢理固定したようなものであるらしい。

それが数ミリ程度しか動かないという程に力であってもだ。

b y 神』

だから俺は敢えて言おう。チートであると。

「…!?!」

ほら、だから隣の男なんて目をカッ開いて一点を見ている。
目の前で手を振るがどうやら意味が無いようだ。棍棒が飛んでいっ
た方向をガン見して動かない。

それはオーク鬼も同じなようで。
取り合いず、やるなら今か。

「ブヒッ——」

硬直していたオーク鬼の顎に向けて、HRを投げた。
顎を揺さぶる強烈な痛みに昏倒したオーク鬼は激しい音を経て地
面に倒れた。

——投げても強い、それがHRクオリティ。

ざまあ。

☆

「はぁ！？ 兄さん、19だって？」

「…はぁ…若干老け顔なのは分かってるよ…」

「いや…ちよいとも少し顔見せてみる。…きたねえだけじゃねえか」

「酷いな貴方」

気絶したオークは幸い思った以上に重く無く、No.5の能力を使って運搬した。

流石に野道にほおって置いては悪さをしかねない。否、絶対するな。その際、青年君から化け物を見るような目で見られた。照れる。

で、現在、山賊の男から青年君へと進化を果たしたのだった。

「んで…何でもまたお前さんは山賊になったんだよっ…よし…」

正当防衛とは言え、片足を失わせてしまったのだ。

ケアルガで取り合いず傷らしい傷はすっかり消えてしまったが、痛々しいのにはかわりが無いので
たまたま持っていた布を巻きつけておく。

「…好きでやる訳ない」

「訳有り、か。：理由は聞かないで置く。」

「……。」

野道に座っている青年君は顔を俯かせる。

恐らく話したくない過去というものがあるのだろう。俺の場合は黒歴史ばかりだが。

人や盗みや人殺しをするのは何故か。

——『生活に困った』『脅されてやった』：他にもあるが、不本意で行なった事だろう。

かといって、それらが正当化される事は無い。

さて、犯罪がうんぬんは兎も角。

「お前さん、これからどうするんだ？」

——酷い質問である。

右足を失った今では、義足でも付けなければ盗みも働けない。

かといって、帰る故郷は無いだろうし、頼れる仲間には見捨てられた。：頼れるかどうかは別として

「：そういうアンタは？」

「俺か？」

むう、質問を質問で返されたな。

「やるべき事をさっき任されてね、…うんむ、そうだ、君も付いてくるか？」

☆

「主人公達を助けてやってくれ…だって？」

『貴方が転生した世界は【ゼロの使い魔】の世界だと申しましたよね？』

「…あんま覚えてない」

『ずさー。…兎に角、その世界には勿論物語ですから、主人公が居ます。』

「了解、把握した。それは絶対受けないといけないのか？」

『いえ。受けるも受けないのも貴方の自由です。…目的が無いよりハッキリしてたほうがいいんじゃないですか？』



N o. 6 「切りが悪い」(後書き)

後三話ぐらいで原作に入りたいと思います。

その間に使い魔召喚もやろうと思いますので、一応アンケート募集は明日まで

としておきます。投票途中結果は第五話前書きと同じ状態です。

1 作者に任せる 2 票

2 俺に案がある 4 票

N o. 7 ! (前書き)

うぼあ、遅くなつてすいません、というか短くてすいません

え？短いのはデフォルトだらって？

来年から頑張る！

No. 7 !

「…何故貴族である貴方は、俺なんかに情けを？」

「あー。言っておくが、俺、平民だよ？」

「え…、いや、武器とか急に大人になったりとか…アンタ、平民メイジ…？」

「どうなんだろうーなあ。」

青年の隣に（と言っても肉体年齢は一歳差だけど）座って胡座をか
く。

この世界は魔法使いの事をメイジと呼ぶ。俺は『まほう』は使うか
らメイジでもいいのかもな。

というか、杖契約済ませてるからギリギリメイジだな。

「まあメイジではあるな。」

「はあ…、やっぱり慎重に行動すべきだったな…あ」

「H A H A、というかお前それが本性なんだな。言動とか山賊その
ものだったのにな。」

「（溜息）」

「んで、どうするんだ？」

「ついて行かせてください」

「任せろ」

☆

神に任された事。

「この世界の主人公達を助けてやってくれ」との事。

なんでも、トンデモない(?) イレギュラー 異常事態が発生してしまう恐れがあるらしい。

その為にも、彼らを援護してやってくれ、と。

——正直、原作を見たことの無いから違いが分からないんだけどな
…。

が、原作が始まるのにはまだ時間があるらしい。

その間はごゆるりとどうぞ、と言われても。

そうだ、観光をしよう、そうしよう。

「く、来るなあ！こないでくれえええ！」

……はあ。

幽霊を大の苦手とする山賊……いけね、名前聞いてなかった。
と、それを追いかけるダスク。

ふむ、幽霊に見えなくも無い。

……ダスクを迎えに来て、ずっとこの調子なのだからそろそろ惜しい
が止めるか。

☆

？主人、非常に突っ込み所満載なのですけど……。？

「それは後で説明するさ。まあ一部に至っては信じてもらえるか怪
しいけどな」

一先ず、ダスクにこれまでの経緯を身振り手振り交えて報告する。
で、山賊青年の名前を聞き忘れていた事に気付き聞こうとすると。
大の字で地面にぶっ倒れて、

おお青年よ、気絶してしまうとは情けない。

ちよ、こいつどうすんだよ…幸いにも荷物は持って…いな…いだと？

「…オワタ」

？？？

旅をするに至って無論必要となるのは食料。

だが、残念ながらそれは持っていない。飲水なら『No. 9』でどうにかなるだろう。それは良い。

食べ物に至ってはそうはいかない。無いなら無いで、食料を買う等しなければいけないし、金は必要だ。

？食べ物については気にしなくても良いのでは？？

「何で？」

？え、いや、私たち（ノーバディ）は実際、食事を取る必要無いですし？

「なんでなんで？」

？さあ？？

「…もういい、考えるのは止めだ。」

まったく、探れば探るほど謎が深まりやがる。
とりあえず、狩りとかで食料調達するしかないな、うーん。
狩りの経験が無い訳でも無い、この世界の親父に教えてもらったかな。

無論、能力は未使用の狩り。能力を使用すれば、案外易易と獲物は手に入れる事が出来るかもしれない。

さて、この青年にはどう説明したものか。

気絶した青年を肩に担ぎ、俺は歩き始める。
：何か便利な移動方法はねーもんかな。

☆

No. 7 ! (後書き)

うん？年内最後の投稿がこんなんで良いのかって？
全然駄目ですね、来年は生き生きするぞー！

後、予定を守れない作者でご免なさい。
まだ原作に入るまで時間が掛かります。

予定…初の原作メンバーとの出会い

ジルさんを助ける

使い魔召喚

取り合えず、i fとかも書かなければ。

N o . 8 ! 「ははは、それほどでも」(前書き)

新年、明けましておめでとうございます。

…という事で今年初めての投稿。

ハルケギニアの生物分布なんて知らないです。

No. 8 「ははは、それほどでも」

「ひゃっほう！これは中々だぜー！」

現在、高度150メートル。森の上を通過中。

この世界に飛行機は存在しない。空を飛ぶ為の『フネ』や『風竜』があるのだが…。

空を飛んでいたのは、上記のどれにも当てはまらない物であった。

物体の名…通称『キープレードバイク』。

そう、例の鍵型の剣であるキープレードが、もう最早カラー以外跡形も無く変形してしまった形態がこれである。…高性能すぎるだろう。

因みにだが、キープレードは他の形態にも変化する事が出来て、足甲、手甲、翼、盾、巨砲、鞭に変形させる事が出来るようだ。無論、それぞれは自由に変形可能。

バイク型は移動手段。

動力といい、お約束の謎の多さではあるが、便利なので気にしない。時速がそれなりに出るので、

「（風に生で当たりたいなあ…）」

鎧の頭まで着込まなければならない。あ、因みに今全身鎧の姿ね。

…申し遅れました、『鎧の男』モードです。

『Bbs』の主人公の一人で、能力元は『KH2FM』で隠しボスとして出てきた時。

キングダムハーツ内で準最強とされるボスで、並大抵のプレイヤーなら数十秒の内に葬られてまう。

だが、キングダムハーツ史上で一番楽しい相手と熟練者からは賞賛されている。

——と、彼についての意見はさておき。

散々地理書などをあさくっしておいて言いくいのだが…

「迷ったYO！」

残念すぎる。カーナビのような物も付いてればな、と無理な相談をキーブレードバイクに対して呟く。

…所でダスク達だが、現在は荷袋の中。更に言ったらカードの中。No. 10の能力だ。

で、青年と言え、一人乗りではあるが落ちないように縄で縛り付けている。

一度目を覚ましたのは覚めたのだが…。

『う…ここは…あれ？空？—————』

ポツンと眩き、プツンと意識が切れた。
彼には絶景を楽しむ余裕が無かったようだ、高所恐怖症なのかもしれない。

いい夢見ろよ。

☆

「…アテンションプリーズ…」

最早目的が変わりつつある俺だった。
小一時間。高度などを適度に上げつつ、真下に広がる風景を楽しむ。
広がるのは大自然。偶に村を見つける事もある。

はて、此処はどこだろう。

随分と遠くに来てしまったようだ、…というのは先程より、

「キシヤアアアア」

「」

モンスターにエンカウントする確立が格段に上がったからだ。
無論空の上なので、お相手と言えば…。

炎のような鱗、全長10メートル程の巨体、翼。

——ファンタジーお約束のドラゴンだった。

おお、グランエールベールよ……え？違うって？

「ファルコ！ケツにつかれた！なんとかしてくれ！」

「フゴオオオオ」

残念ながら俺は雇われ遊撃隊ではない。あ、やばい。

ドラゴンが…恐らく火竜が息を勢い良く吸い込み始めた。

慌てて俺はバイクを急旋回させる、凄まじい火力のブレスが吐き出されたが、無事に回避できた。

余裕を持って回避しなければ、縛り付けた青年に直撃する可能性がある。
ある。

それに、これ以上スピードを上げなければ到底振り払えない。俺は
大丈夫だがやはり青年が危険だ。

この状態使える能力と言えど……両腕は塞がっている。ならぶつつけ本番だがあれを使うしかないか？

『Control Bit（ビット形成）』

光を纏い、魔力のような物が形を形成し……球体を中心に三つのファンが付いた物が現れた。

クルクルとファンの部分が回しながらピツタリと付いてくる。

同じように合計三つ現れた。……うんむ、初めてにしちゃ出来じゃないか？

が、このままじゃ駄目だな、敵にぶつけるには……えーっとこうだっけか？

『Search Shot（対象を攻撃）』

詠唱……なのか分からないが、呪文を呟く事によって操る。

射出等のタイミング自動で、搭載されたAIのような『自分で考えて動く』タイプだ。

ビット……まあわかり易く言えば、ガ○ダムとかに搭載されているアレだ。俺はNT^{ニュータイプ}じゃないぞ。

懐かしく聞こえる電子音を上げながら、三体のビットが火竜を取り囲んだ。

火竜が突然の接近者に咆哮を上げる。

今なら逃げられるな。火竜がビット達に向けて尻尾を振るったりしている。

それをビットは規則的な動きで回避、中心の丸い部分を取り分け強く発光させて、

ピピピンッ！と光の弾を三連射する。

それぞれ別の場所にそれぞれ着弾したが……んー、強いのか？火竜が若干よろめいた感じがするが…。

「（…まあ結果は良好って所だな。さ、退散退散。）」

☆

一先ず、隠れる事も出来る森へ退散した俺だったが、森の中も中で全く油断出来ない。

兎に角、モンスターが多過ぎるのだ。全くやってられないな、と俺は呟く。

キーブレードバイクを地面に着陸させ、降り立つ。

能力解除。

「おい、起きろ。」

「…あ…ああ…俺は一体…」

「気絶してた。理由は…教えないほうが良さそうだな。」

「…？どうも記憶が抜け落ちてるような？」

あらら、怖すぎて思い出すのも拒否するようになったか。
それは兎も角。

上空からは未だに咆哮が聞こえている。どうやらビットは以外と持
っているようだった。

「（早く諦めてくれよ…）」

「何の音？…それと此処、何処だ？」

「上で火竜が暴れてる、後此処は何処か分からないじえ」

「な、何で火竜が居るんだよ！？後わからないってどういう事なん
だよ！！」

「まあまあ落ち着けて青年」

「いや、何でアンタはそんなに落ち着いてるんだ！？あとおれの名
前はルークだ！」

なんか元気だなルーク君。

落ち着いている理由…まあ言っても信じないだろうけど。
ただ、危機感が無いわけでは無いけどな！

このままではまた敵を増やしてしまいそうだ。

…だが、どうするべきか。襲われても良いようにノーバディー達を
呼ぶか？

あー…でもルークがまた気絶するかもしれないな。

「ルーク君、出来るだけ静かにしてくれ。獣に襲われたのなら止める
ないが」

「止めろよ！…はあ、」

「溜息は付かないほうがいいぞ？幸せが逃げる」

「既に不幸だよ…主にアンタのせいだ」

「ははは、それほどでも」

「褒めてねえ！」

と、まあここで漫才していても始まらない。
取り合えず、歩いて距離を稼いだほうが良さそうだ。ビットがどれ

くらい持つかわからないし。
ただ、ペースは上がらない。俺はルークに肩をかしながら、森の中へ進んでいった。

☆

サツザツサツザツ。

現在地、「何処か」。

森の中だが、明るい方向を目指して進むようにしている。
相変わらず、ルークを支えながら歩いているのでペースはノロノロとしたものだ。

「ふむ…思った以上にエンカウントしないな。」

「はぁはぁ…アンタ…人間かよ…」

「ダラシナイナ、ユーク君…面倒だからユークンって省略しているか？」

「嫌だ！」

「なんだよー良いじゃねーかー」

幸い、途中で数回、野生動物（イノシシ等）に遭遇しただけで、想像していたより少ないエンカウントであった。…だが、

「（逆に不気味だな…）」

フラグの臭いがする。

ボスフラグ？ いや、はたまた何処かで死亡フラグを建てたか。
何の道喜べた事じゃないなあ、と顔を顰めてみせる。

隣のルークと言えば青い顔、

「はっ…大丈夫かルーク！」

「……」

へんじがない　ただの　るーくのようにだ

「応答しろルーク！ ルウウウウウウウウウウウウ！」

「静かにしてくれよ…」

「はい」

☆

「よし…漸く明るい場所にたどり着けそうだな」

「はぁ…ひいー、休ませてくれー」

「ほら、あと少しだ、ほいっちにほいっち」

単純に俺が疲れていない理由は、ノーバディー化したからだろう。かといって何か明確な変化があったかと言えば、能力使用状態の副作用モードと変わらない。一般人と比べてもダメか。

機関と同じ状態なのだが…新能力については発現しないのだろうか。神からは少しそれに触れた程度で他は何も教えてもらえなかった。ケチーいな。

やはり顔が青いルークが俺を急かす。俺はスピードを上げる。

そして――

――開けた平地には滅茶苦茶に壊された屋敷があった。

N o . 8 ! 「ははは、それほどでも」 (後書き)

アンケート集計の結果、三番が一番多かったです。
これについては、一旦 i f で書いてみたいです。

次回

ヴェンとルークが見たボロボロの屋敷。
そして、ヴェンの感じたフラグ臭の正体とは？

N o . 9 「合成獣」^{キメラ}

No. ?! 「合成獣(キメラ)」

「…」

「諦めんなよお前！ダメダメダメ！どおしてそこで諦めるんだよ！？」

「なんでそんなに余裕なんだよお…ううつ」

「人生気楽にやってかないと、辛いだろー。」

「良いから何とかしてくれえっ！」

現状、危険。何が危険かって言うと、主にルークが。

コイツ自体が死亡フラグだったのだろうか、と内心溜息を付いた俺。会話になっているのか分からないような会話をしている俺たちは、現在奇妙な生物達に取り囲まれていた。

奇妙、というのは、そのまんま。

某海賊漫画に出てきた、『動物と動物が合体したような動物』が居るのだ。

ただ、熊なのにシカのような角が頭に生えていたり、を初めとした有り得ない部分があるのだ。

「(ツキノワグマだよなあ…アレ。うん?)」

それだけなら、「おお、不思議な生物だなあ」で終わるのだが…。

「どうやら奴さん、俺たちの事がディナーに見えてるみたいだな…。」

「ティウンティウン」

「えっ」

どうやら、彼。この状況もアウト（気絶）だったようだ。その際の効果音については敢えてスルー。気にしたら負けだ、うん。

さて、無論マトモに戦う気は更々ないのだが…数が多いな、こりやおまけに空を飛んでるタイプの物も見受けられる。

——名付けるとしたら…

「合成獣…^{キメラ}か。」

☆

合成獣キメラと言う言葉は何回も耳にした事があるだろう。

元となる生物に、別の生物をマジカル☆ドッキングした物とえば
分かりやすい…筈。

交配させて誕生させるのとは違う。

錬金術や魔法で無理矢理融合させて創り出す。

無論、生命を弄ぶような行為であるが故に、大抵は禁忌キンギとなっている。
自分が知っている範囲で一番酷い例を上げるとすれば、人間と犬の

合成獣だった。

「しっかしこの量……ただ事じゃあないな」

この量なら動物園が作れそうな勢いだな。

「グルルルル…」

「アオッー！アオッー！」

「シャアアア！」

「アッー！アッー！」

取り囲んでいるどの動物も凶暴性が高いという所は共通しているようだ。

張り詰めた空気、一触即発。

「少しでも動けば食いちぎってやる」と言わんばかりに吠える。

…若干四番目が酷かったな。

ああ…それにしても。

「お腹すいた…」

「「グオオオオオオオオオオ！」」「」」

そんな言葉で限界が切れたようだった。…ていうか、ノーバディは飯食わないで良かったんじゃないのかよ……まあ始まったなら仕方があーないいゝ。

「『L e t ' s B r a w l ! (戦闘開始だ!)』」

☆

「【非情の妖姫（Savage Nymph）】！」

今回の使用能力はNo. 12の物。属性は雷。

機関内唯一の女性キャラクターで（No. 14は除く）、残念ながらドS。紅一点。

素早いテレポードやナイフ投げによって瞬殺するような戦闘を好む。その性格故にか、戦闘中は良く笑う。

加えてヒステリックでもあり、マゾヒスト以外は出来るだけ近づきたいとは思わないような性格である。

特殊な能力として、『雷属性による攻撃を無効化』『分身』がある。

片方は兎も角『分身』については、某忍者漫画の設定とは違う。

『分身』の人数は最高四人まで。

そして、『感覚、怪我、精神状態』等を常にリンクしているという事。

片方が傷つけば、片方にも傷が付く、といったように。

一見、大きい欠点に見えるだろう。だが…片方が回復すればもう片

方も回復するのだ。

原作ではその利点は生かされていなかったのだが。

「らいつ！」

先陣切って突っ込んできたのは、狼にしてはデカイ奴だった。

サッサッサッ！と図体の割に軽いステップで近づき、犬歯を剥き出しにして飛びかかってくる。

人間の時なら追いつけていたか怪しい所だが、生憎人間を辞めてしまっている俺は、軽くしゃがんでストレートを腹に向けて放つ。

ドッ、と鈍い音と共に狼モドキが空中で姿勢を崩す。地面へ不時着した狼に追撃で電撃を流した。

バチバチ、という音と共に狼がもがき、気絶。

…ふむ、まだ一匹目か…。

先程まで平和な森の風景が一変、暗雲たる空気が立ち込めている。

…可笑しいな、見間違いないかなければ、まだ増えている？

「おいおい…此処の森、ひよつとして『キメラの森』何て笑えない名前じゃないよな…？」

ヴェンは知らない。

この森の名が『ファンガスの森』という名で、

これらの合成獣が『貴族の研究』によって作り出された被害者達である事も、

更に恐ろしい存在が居ることも。

☆

No. ?! 「合成獣（キメラ）」（後書き）

ルーク「オワタバスタアア！」
ティウンティウン

原因…反動

次回

徐々に増え続ける合成獣。格闘するヴェン。
『ファンガスの森』での死闘が、今、始まる。
そして、更に恐ろしい存在とは？

遂に、彼女に出会うヴェン。

No. 10! 「死闘と出会い」

N o. 1 0! 「死闘と出会い」 (前書き)

無事に書けました。十巻。

色々と喋り方が合ってるか不安だけど、頑張りました！。

No. 10! 「死闘と出会い」

四面楚歌。

もし、この世界の人間が俺の今の状況を見れば、そう口を揃えて言うだろう。

現に、彼の同伴者^{ルーク}は地面でグッタリ気絶している。

だが、この状態に陥っても、彼の心は揺るがなかった——いや、揺るぐ心が無かった。

これが、何よりも自分が『人外^{ノーマン}』であると感じる部分。

「いやはや、何とも虚しい物だよな……」

『心にもない事だが』が語尾に付きそうだ。

そして、また俺達に襲いかかってくる合成獣を、電撃を浴びせて気絶させる。

……ていうか、さっき気絶させた奴がまた復活してやがる…。

「つたく…合成されて強化しちゃったりするののか？

…あ、ルーク気絶してるし、増援呼ぶとするか。」

めんどくさ気にルークを見下ろして言うヴェンだったが、ふと思案顔になって援軍を決める事に。

優先事項は、森からの脱出…は当たり前として、気絶している奴の安全を守る事だ。

まあ、生憎とその安全を脅かす原因を作ったのは俺だが。…好奇心で屋敷に近づいた結果がこれだよ。

「よし、君に決めた！来い、【ソーサラー】！」

語訳は「魔法使い」だったはず。

機関リーダーの配下であるソーサラーは、無論自らの上司が強いだけに当然強い。

ノーバディーの中でも最も（トワイライトゾーンを除く）エンカウントが少なく、希少なノーバディーである。

サァー、と流れるような音と共に、灰色の茨が宙に現れ、回る。

そして間もなく、蜃気楼のように歪んだ場所から徐々にソーサラーと思われるノーバディーが浮かび上がってきた。

白い魔導服に、同じく白い三角魔導帽。ここまでは実に名前のとおり魔法使いらしい。

だが、そこで奇妙な物が入るのがノーバディクオリティー。

「すごく…薄っぺらいです…イテッ」

そう、まるで風に靡く（なびく）習字の半紙のように薄っぺらい訳である。

風が吹けば飛んでいってしまいそうだな。…頼りなさそう…

そんな事を思っていたら、何かが頭にぶつかった。…ピンク色の四角形。

——ソーサラーの武器となる、【ブロック】だ。うん、文字通り。

「キエーッ！」

「うあつと！……お前程奇妙な猿は初めて見たよ…。」

狒々に角が生えた合成獣^{キメラ}だった。

全身は赤い毛に覆われていて、凶暴性が伺えるような激しい赤色だ。

（…角有りに赤色…シ〇アか？）

赤い彗星…は兎も角。

クルルル…と俺を見て唸っていた角狒々が、突如何かに弾かれるように横に跳んだ。

そこへピンク色の物体が飛来、地面に衝突して角狒々が元居た場所で派手に土煙を上げた。

「ひゅー、中々凄まじいな…」

ソーサラーは恐らく、一般フィールドで出てくるノーバディの中で最強だろう。

理由としては、『魔法が効かない』という事がその一つに挙げられる。

他のノーバディーも十分強力ではある。だが、原作主人公のまほうは：特にサンダガは強い。

ヒット&アウェイを繰り返せば、アッサリとノーバディー達は倒せる。

だが、それがソーサラーには通用しない。

『じゃあ連続攻撃で畳み掛けてゴリ押しすればいいじゃないか』

無論、魔法が効かない以上そうするしかないのだが、先程の『ブロック』。

実はコイツ、ソーサラーとは別々に動いて主人公の行動を邪魔してくる。それに壊れない。うん。

以上がソーサラーが強いと言える理由である。

こうしてしてる間にもブロックが合成獣達へと突っ込んでいく。この増援で良かったようだ。

そして俺も狙いを定め、ナイフを投げる。…戦闘再開。

☆

「うし…、これで最後か。」

戦闘は、単純に俺達の圧勝だった。

まあ、無理も無い。実際、ソーサラーは恐らく、魔法剣等以外では傷つける事は不可能だ。

火竜のブレス等は分らないが、…そういえば火竜の事忘れてたな…、うん、何も聞こえないから大丈夫だろう。

俺が今、戦闘を終えて行なっていた事はキメラ達を地面に埋める事だった。

自分が生きる為に殺した…別に謝る事や感謝する事等はしない。心が籠ってないから。

「安らかに眠ってくれ…」

とか言いつつも、何かしないよりはマシだと思っている。

自己満足でしかないんだけどな。

立ち上がって、コートについた泥を払う。

ふと、先程まで共闘してくれていたソーサラーが居ない事に気付き、回りを見わす。

あ、さっきカードに入れたんだっけか。

記憶がどうも薄れがちだ。年じゃないけどな。

さてと。

もうru-kuは起こすのも面倒なので担ぎ上げて運ぶ事にした。

「The man of armor（鎧の男）」

次の瞬間、黒コート姿ではなく、俺は鎧を着た姿に変わっていた。これが鎧の男モード。そのまんまである。モードを切り替えるための呪文もシンプルなほうがいいのであれになった。

マントも一緒に付いていたのだが、平民が騎士でも無いのにマントを付けてはいけないらしい。

畳んで、荷袋に詰め込む。そして、ルークを担ぎ上げて、

「Key motorbike」
キーブレードバイク

手に携えるキーブレードを投げ、同じく呪文を唱える。

すると簡単、手軽にバイクができましたっ。そしてルークをキツチリとバイクに括りつけると、乗り込んで空へ舞い上がった。

「もう、厄介事は勘弁だな…素直に街でも目指すか…」

ハンドルやアクセルは無い。全部、自分の脳でコントロールするのだ。なにそれ便利。

☆

Side Tabasa

私は今ジルさんをひっそりと追いかけている。ジルさんはあの恐ろしい生物：『キメラドラゴン』を殺す為、住んでいる筈の巢の近くに潜伏している。正直、恐ろしい。――あれほど死にたいと思ったけどあの生物に殺されるのは嫌。

でも、『アイス・アロー凍矢』があつたとしても、ジルさん一人で勝てるとは限らない…。

私が居ても変わらないのかもしれないけど…。

ジルさんが枯れ木や落ち葉を集めて、洞窟のそばで焚き火を始めた。量が多く、良く燃える落ち葉や枯れ木だったのか猛烈な煙が、洞窟へと吸い込まれて行く。

「――！！」

しばらく経って、獣の声が洞窟の奥から聞こえてきた。アイツの声だ。私は震え出す肩を抑えるように抱いた。

いくつもの声が、呻き声が、洞窟内を反響する。

ジルさんはゆっくりと、何時もと変わらない、弓を構えゆっくりと引き絞った。

番えられている『凍矢』をゆっくり、ゆっくりと。

あの震えていたジルさんは、今はあの恐ろしい『キメラドラゴン』と対峙している。

その姿、は震えは無く、威風堂々とした美しい姿だった。

『キメラドラゴン』はジルさんに気づいたのか、咆哮を上げた。

「――!!」

「っ…」

この居ても、見つかってないと分かっている身が縮こまる思いだった。

さしものジルさんも、恐怖に駆られたようだった。

わたしは目を見開いた。

『キメラドラゴン』が、幾つもある頭の内、竜の頭がブレスを吐こうと大口を開けた。

「（危ない！）」

だが、ブレスを吐く事が出来ないのか、荒々しい呼吸が響くだけだった。

その瞬間、我に返ったジルさんが、『凍矢』を放った。

「グオオオオオオオオオオオオ！」

ブレスを諦めた『キメラドラゴン』が咆哮を上げ…その喉に、『凍矢』が刺さった！

やじりに込められた強い魔法が発動して、その頭を凍らせていった。そして、ピキツ…と一瞬の間を置いて、頭に亀裂が入って、バラバラになった。

「（やった…！）」

ジルさんの顔も安堵した顔になっている。

そして弓を降ろした瞬間。

死んだ筈の『キメラドラゴン』の腕が伸びて、ジルさんを吹き飛ばした。

そのまま、ジルさんは吹き飛ばされ地面へ打ち付けられた。

「(助けなくちゃ…!)」

咆哮する『キメラドラゴン』に足が竦む思いをしながら、私はジルさんの元へ駆け出した。

☆

S i d e V E N (N E X V)

「♪」

現在快適な空の旅。お日様は既に頭上を過ぎていた。…ふむ、まだ余裕あるな。

ゆっくりとしたスピードで進むキーブレードバイク。

口笛を吹きながら、フライトしていた、その時。

『グオオオオオオオオオオオ!』

「…なんだ?」

今までの機嫌が吹き飛ぶようなおぞましい声が聞こえた。
心にも無い事だ。…ただ、今のは生理的に受け付けられないな。

ただ、気になる物は気になる。野次馬根性で俺はキブレードバイクを旋回させると、その咆哮が聞こえた方へと進む。

…ルークもカードの中入れちゃ駄目かな。

☆

「以外以外、まさかこんな所で人に会えるなんてな」

「あ、あ…貴方は…誰ですか？」

「これは失礼、俺の名前はヴェン。君は…、その前にその人を助けたほうが良いな。」

「！お、お願いします！ジルさんを助けてください！」

「お、おう…。お嬢さん、見たところメイジだが『ヒール』はしたのか？」

「それが…私の魔法じゃ無理なんです…」

俺が着陸地点を含め、例の声を探していると、青髪の少女が腹部が

真っ赤に染まった女の人を抱えて

走っているのが見えた。キーブレードバイクを無理矢理着地させて、少女の目の前に飛び降りる。

こちらに気づいた少女は驚きに顔を変え、涙をボロボロ流しながら頭を下げてきた。

…状況がいまいち掴みにくいが…取り合えず怪我人を治すべきか。

「今からする事を他の人に言わないでくれ。いいか？」

「…？わかりました。助かるんですか？！」

「ああ、多分。」

地面に仰向けに寝転がす、…うわあ、中々やべえ出血量だな。

これじゃ持って数分だ。

ふと、怪我人の…ジルさん？だっけが目を開いて青髪の少女を見る。

「…シヤ、シャルロット…」

「しゃべらないで」

少女が涙を流しながら言う。

息も絶え絶えなジルさんが、必死に何かをシャルロットという少女に話掛けている。

…俺は空気。

「…あたしの矢、どうだった？あいつを、やっつけた？」

「やっつけた。やっつけたわ。ジルの矢、あいつを、吹き飛ばした。さすがだよ」

「そう……、よかった……。…其処の鎧のアンタは、だれだい？」

触れてもらえました。

「俺はヴェンだ。通りすがりの平民さ。」

「…そうかい。」

それだけなのか。

「あんた、そんな傷何処で負ったんだよ？いや、その前に治療だな。」

そんな俺を手で弱々しく制する彼女。

「助からない…さ。」

「おいおい、…まあ無理もないか。やるだけやらしてくれるか？」

「…好きにしな」

男言葉だからカッコイイなこの人。

怪我ときたらあれがある。原作第一作目では主人公と仲間の体力を完全回復させるあの魔法。

「【癒しよ!】」

ガイアベイン（通常状態のキープレードの銘）を手握り、そう唱える。

目に優しい緑が視界一面に広がり、ベルの鳴る音が聞こえる。

あ、やべえコレ。気分爽快すぎて癖になりそう。

内心震えて、ふと視線をジルさんへと向けると。

「…!?!」

ものの見事に全治した、顔色もすっかり良くなっているジルさんが居た。

ケケケ、そんな驚いた顔されるとニヤニヤしちまうじゃないか。

お嬢さんも、そんな嬉しそうな顔されたらニヤニヤが止まらないじゃないか。

——鎧を着ている事に感謝する。

前世の時からそうだ。人助けをして嬉しそうな顔をされると、ニヤニヤが止まらないのだ。

そのせいで折角好感度アップだと思っても、引かれてしまう。ああ、でも止まらないから、人助けの時はマスクを付けている。

ああ、この心がほんわかする気持ち…前よりもずっと小さいもんだけど、これが堪らない。

『まあーた、お節介焼いて一人でニヤニヤしてるし、お前好きだよなあ。』

ふと、過去の友人の声が脳内再生された。…アイツ、元気でやってるかな。

「助かったよ。アンタ、何者だい？」

つと。

「えー、変わり者？の平民メイジ」

「なんだいそりゃ…、アンタみたいな変わり者、初めて見たよ。…
改めて、ありがとう。」

「おうともさ！気にするなよ。」

「あの…」

「ん？」

「助けてくれて有難うございます！」

「おう」

先程の緊迫した空気は何処へか、和んだムードに。
…が、

「グオオオオオオオオオオオ！」

「「！」」

「…な あんだありやあ？」

馬の首があつた。
豚の首があつた。
豹の首があつた。
狼の首があつた。
人の首があつた。

——狂気の実験によって誕生した、そのドラゴンが、視線の先に居た。

No. 10! 「死闘と出会い」 (後書き)

(途中の r u - k u の部分は誤字ではありません。スルーしてくださいw)

ええ、出会いました。雪風のタバサです。

原作をお持ちの方なら、キメラという言葉が出てきた所でお分かりでしょう。

外伝、タバサの冒険三巻から、「タバサの誕生」です。

実際、ジルさんの死があってこそそのタバサが居る訳なのですが、助けちゃいました。

鎧の男、主に移動面で大活躍です。

確か、鎧の男はこちらがケアルガを使用した場合にのみ自らもケアルガを使う事が出来たと思います。流星に全回復はしません。

まあ、次回では攻撃面も積極的に使って、キメラドラゴンをフルボッコです。

雪「ジルって最初聞いて、バ○オハザードのほうのジルが思い浮かんだなあ。」

村「あー、そういえば居たな。」

ル「あれ…此処は…」

No. 11! 「終」 (前書き)

見事に前回の予告を裏切りました。

——予定立てたら死亡フラグなのか？

No. 11! 「終」

第三者視点

『グオオオオオオオオオオ!』

キメラドラゴンが吠える。

先程の『凍矢』^{アイス・アロー}によって貫かれ、砕けた首の部分は新たな別の竜の首を再生させていた。

ヴェンはドラゴンを只、黙って睨みつける。ヘルメット越しではその表情は読み取れないが。

「なっ…、『凍矢』^{アイス・アロー}は当たった筈…!なんでまだ生きてる?!」

「奴さん、首が持ってかれようがへっちゃらしいな…」

「くっ…」

悔しそうに歯を食いしぼるジル。

死んだと思っても無理は無い。『凍矢』は当たった物を凍りつかせるマジックアイテムで、

それなりに強力な魔法が籠っていたのだ。値段も平民には辛い、金貨20枚もする程の価値（威力）はあったはずだ。

——単純に、目の前の存在がそれを超える存在だったという訳だ。

危うく、無駄死にするとこだったよ、とジルが呟く。

そして、シャルロットが拾ってくれていた弓に弓矢を番えた。

シャルロットは長いロッドを構え、怒りの形相で、『キメラドラゴン』を睨んでいた。

ヴェンは静かに、『ガイアベイン』を構える。

相手が相手だけに油断は出来ない。ケアルガがあるからヴェンの場合合は早々死にはしないが。

「俺が前衛に出る。二人は良く狙って撃ってくれ」

「任せな、私の腕はこの距離で外す程悪くないさ」

「わかった。」

ジルが自分に言い聞かせるように、そう答える。

シャルロットは小さくうなずきながら答える。

：これ以上の会話は要らない。ここからは文字通り、生死をかけた戦いだ。

「…ッ、来るっ！」

キメラドラゴンが腕を伸ばす。標的は無論、前衛のヴェンにたいしてだ。

禍々しい爪が付いた、その腕は不自然な程伸びて、ヴェンへと襲いかかる。

ガギンッ！

金属音と共に、ガイアベインでヴェンはその攻撃を受け止める。

「うお…、なんて力だ…」

力が無ければ、一般状態であれば恐らく簡単に腕が折れる程の衝撃。これがドラゴンの力か、とヴェンは感心しつつ、両足に力を込めて押し返した。

「奴の攻撃を押し返すなんて…ビックリ人間だよ、アンタ。」

「そおいつあ、有難う。ヴェンと呼んでくれて構わないぞ？」

「これが終わった後でねっ！」

ジルが引き絞った矢を放つ。美しい動きで放たれた矢は、美しい軌道を描いてキメラドラゴンの腕に刺さった。

「――!」

「ざまあ見やがれてんだ」

「まだだ、油断するなよ。」

「わかってるさ。」

ドラゴンが悲鳴を上げ、人間の頭…少女の頭が「痛いよう…」と呻き声を上げた。

「――ッ…」

「…人間も合成したのか…?」

「…違う。アイツは食った物を吸収するんだ。そしてあれは…、私の『妹』…だ。」

「吸収…か。」

あの少女は、かつて、ジルの『妹』であった。ジルが見つけた――あのボロボロの屋敷で見つけた妹の片腕。それ以外は、アイツが食べていたようだ。その、ドラゴンから生えた少女の顔は苦痛に歪み、ただ一向、助けを乞うように声を上げている。

「ジル、アンタ、あのドラゴン倒せるか？」

「…？」

「彼奴を殺したら、妹さんも…」

「…あの子はもう死んだ…。彼奴は妹の皮を被ってるだけの化け物だよ…」

私がしてやれる事は、せめてあの子を殺した、あの化け物を殺す事…」

「ヴェンさん！来ますっ！」

もう片腕の矢に刺されていないほうの腕が、ヴェンに襲いかかる。シャルロットの警告に、反応したヴェンは、慌てて護りの姿勢に入った。再び、金属音。

「……うが」

早急に立てた護りの体制では、完全に勢いを削げなかったのかヴェンが少しよろめく。そのままの体制で、カウンターを放ったが、ドラゴンの腕を少し切っただけで、上手く決まらなかった。

「ヴェン！…『ラグース・ウォータル・イス・イーサ・ウィンデ』」

「…！」

シャルロットが咄嗟に唱えた魔法は、本来、彼女が使えない筈の「ラインスペル」「ジャベリン（氷槍）」だった。

太く、大きな氷の槍が形成され、宙に浮いている。シャルロットが一瞬驚いた顔したが、再びキメラドラゴンを睨みつけた。

彼女の頭の中は、どのように狙い、どのように当てるか。それだけ。

『クカアアアア……』

機能が失われているブレスを行おうと、キメラドラゴンが大口を開けたその時。

頭、首、胴体が一直線になったとき、放たれた。

全長ニメイルの槍が、喉を、臓器を、心臓を、貫き内部に弾けた。内側からの攻撃によって、少女の口、その他の動物の口から、ごぼっと血が吐き出された。

…そして、暫く痙攣して…キメラドラゴンは動かなくなった。

彼女を食らったキメラドラゴンは、死んだのである。

☆

S i d e
V e n

「ヴェン、アンタはこれからどうするんだい？」

「俺？まだ旅の途中だから、続ける予定だな。見て回りたい物がまだ沢山あるし」

「ふうん…」

「ジルはどうするんだ？見たところ猟師みたいだが…」

「合ってるさ。キメラしか殆ど狩っちゃ居ないけどね」

俺の問いかけに、苦笑しながら答えるジル。…さっき沢山倒しちゃったけど、大丈夫か…？

内心冷や汗をかいた俺。後悔しても遅いけどな。

「まあ猟師っていうのも面だけだ。復讐の為にキメラを狩ってたよ

うな物だし」

「…。そうか。シャルロットは？」

「私は、…キメラドラゴン討伐を報告しに帰らなくちゃいけないので。」

「お、生き続ける気になったかい。シャルロット。」

「はい。」

それは良かった、と嬉しそうに言うジル、シャルロットも恥ずかしそうに答える。

シャルロットが此処にいる理由がわからなかったけど、『報告』という事なのでひょっとしたらそういう組織の人なのかもしれない。

…見た目可愛い少女なのにな、こんな子ですら戦いにでなくちゃ行けないって…何とも言えないな。

☆

Side Jiru

「はぁ！？キメラを大量に狩っただって？また何でそんな事を？」

「いや、ボロボロの屋敷で休憩がてら、詮索していたら、もうわんさか集まってきた…」

「……アンタもつくづくだね……。」

「いやあ、それほどでも」

「褒めてないよ」

私は救われた。…この目の前で恥ずかしそうに頭を掻く男に。ヴェンに対する第一印象は、奇妙な男。それだった。

突然変な物に乗って降りてきて、そして変な武器で戦った。そして見たことも無い魔法で私を助けた。

何故か、彼の苦笑、微笑み、それを見ると胸が暖かくなるのを感じる。

微笑みなんか、まるで太陽が照ったかのよう。

「おーい、どうしたんだジルさんよ。お留守かい？」

「…んなっ／＼／ち、近いっ！／＼／」

「お、おう。…どうしたんだ？急に黙って。」

どうしてだろう、さっきまで何とも思わなかったのに。
顔が赤くなるのを感じる。咄嗟に顔を隠した。：でもこの気持ち、
嫌じゃないな。

☆

No. 11! 「終」 (後書き)

…なんだかんだで初めて「／／／」使ったなあ…。
ジルさんにフラグ立てちまったよ…

No. 12 「リユティス」(前書き)

ここでシャルロットは一時ログアウト。
次登場するのは、トリスティン魔法学院で。

ストーリーが思い浮かばず、難産でした。

No. 12 「リュティス」

「到着ー」

「…、もう私は驚かないよ。」

「うわぁ…」

「…死ぬー」

上から、ヴェン、ジル、シャルロット、そして最後は辛うじて生きています。ルーク君です。

『るーくはきぜつがつうじょうんこうなのです。ぽえーん。ぷー。何故かどせ○さんの声が聞こえた。』

全くその通りである。『一日に何回気絶出来るか』なんてギネスがあれば、余裕で達成するだろう。

それはともかくとして。

キングクリムゾンでもしたのか、彼ら一行はヴェンの故郷、トリステイン王国の隣に位置する、ガリア王国へ来ていた。正確に言えば、ガリアの首都『リュティス』に、である。

因みにガリアは、人口30万を誇るハルケギニア最大の国。魔法先進国とも言われ、ゴーレム等の姿もちらほら見られる。

三十万を誇る、と言っているが随分と少くなくヴェンは感じた。

「ここまででいいのか？ シャルロット？」

「はい。後は歩いて行きます。」

「おう、また会おう！」

首都外れの一目が付かない場所へバイクを着陸させている。

一人乗りなのに大分無理した感がある。というか無理をした。

後ろの装飾の部分にルークを移し、二人は左右についている翼の部分にしっかりとシートベルトさせてもらった。

せめて、サイドカーみたいなのが取り付けられたら…あ、でもそれでも二人乗りか。

バイク改造計画を思案していると、ふと声が掛かる。

「ぜえ…ぜえ…これから、ヴェンはどうするんだ？」

「俺か。折角だから、観光とでも洒落込むとするさ。ルークはどうするんだ？」

「付いて行く。…所で気になったんだが…

金はあるのか？」

俺からの問いに、肩を竦めてみせてから……その最後の言葉に、俺は口笛を吹きながら

明後日の方向を見る。考えてませんでした。

気休めに、ポケットにも手をつ込んでみて…、何か堅い物が右ポケットに入っていた。
手にとって引っ張り上げてみると…。

——何やらパンパンに膨らみ、歪な形に変化しているマニーポーチ
(＊後記述) だった。

おい、今変な想像したやつ。作者も含めて歯あ食いしばって待っててくれ。

ある程度のズッシリ感、そして膨らみ。——ええい、どうやっても変態的にしか聞こえない！
兎に角、膨らんだサイフを見るのは福眼だ。札束を見るような感じ。だが、このマニーポーチ、福眼を通り越して顔が引き攣るのを感じる。中身はエキューなる物。

「どうしたんだ？」

「これ、持ってみろ。」

「？——うお……………」

ルークも同じくして、顔を引き攣らせる。

「ヴェンって実は何処かの有力貴族の生き残りか？」

「んなわけあるか。」

「どれ、私にも持たせてくれない？——…あ、ああもう良い。」

ジルも同じ。興味津々でマニーポーチを持ったと思ったら、即行で俺に手渡した。

「と、取り合いず、観光するぞ、観光。な？」

「「わ、わかった。」」

揃いも揃って耐性のない俺たちであった。

☆
★
☆
★
☆

ガリア首都、リュテイス。

成程、人口が多いだけにそれなりに商業が盛んらしい。

といっても、トリスティンの首都やゲルマニアの首都には行ったことが無いのだが。

街路は意外と正しく、中世ヨーロッパと言った所だろうか。
ヴェンは見慣れない物を見つければ、子供のように目を輝かせて品を見ていた。

「うお、こいつ動くぞ!」「うひえ、しゅっぺえなんだこれ?」「
おー…」

「…、」

「言いたい事はわかるよ。…『子供か!』でしょ?」

「ああ、その通りだよ」

ヴェンが余りにもはしゃいでいるので、結果としては様々な商人から微笑ましい顔をされていた。…謎の和みパワーである。

456

彼がこれほど騒ぐのは、無論、未知なるものを発見した事による物もあるのだが

彼、中々のショッピング好きで…女っぽって?うるせえ。

その様子を背後から付いていく二人は呆れるような目で見ていた。
片や微笑んでもいるのだが、……

「ヴェン、ジルさんにばっか任せてねえで肩かしてくれよ!」
「あ、おお、すまん。」

「いや、いいよ。アンタは折角の観光なんだ、楽しみなよ」

文句を言うルーク。ヴェンと言えば、ある物を引っ張り持ってきていた。

木によって作られたそれは、中々値が張る事間違いないだった。――義足である。

「ルーク、コイツ、付けられるか？」

「…ヴェン、もしかして、コレ…」

「ああ、義足だよ。…なんだ？お節介だったか？」

プルプルと震え出すルーク。その様子を見て、ヴェンが困った顔を浮かべる。

ジルにさり気なく助けを求めるが。

『自分で何とかしなさい』

『ですよー』

残念ながら助けられなかった。畜生。

「アンタって人は……最高だぁヴェン！」

「おうふうっ！……うわ馬鹿やめろ、いや止めてください、野郎に抱きつかれても嬉しかねーよ！」

「あっははは！」

喜んでくれていて何よりだ。正直、片足を奪ったのは俺だ。
こんな事で喜んでくれるなら、何時か、高性能な義足を作ってやる
うじゃないか。

S i d e ジル

「あっははは！」

久しぶりに声を出して笑えた気がする。
これまでの私にとっての生きる目的は、家族の仇を討つ、それだけ

だったわ。

きっと私は、彼に助けて貰わなければ仇も討つ事ができずに、死んでしまっていたかもしれない。

『これからどうするんだ？』

『まだ、私の復讐は終わっていないわ。：何回も言うけど、助けてくれて有難う。』

『本当に、それで良いのか？』

『……それしか私には無いからねえ』

『よし、手伝うぞ。』

『は？』

『俺としてみれば、出来れば復讐なんて止めて、家族の分まで人生を楽しんで欲しいんだよな』

とんだお節介だ、とその言葉を思い出すたび、頬が緩む。

多分、……ヴェンだから、ヴェンがそう言ってくれたからこそ、付いていく事にしたんだと思う。

しかし、不安な部分も勿論あった。私が人に誇れる事と言ったら、弓の扱いが上手いくらいだ。

そう言ったら、

『んじゃ、俺達と旅しないか？もし、ジルがしたい事があれば、俺が助けるよ』

…何故、ヴェンは会って数時間もしない私をここまで尽くしてくれるのか。

『人助ける時は自分が納得する所まで、って決めてんだ。あ、迷惑だったら止めるけどよ。』

全く…自分勝手な男だ。

No. 12 「リユテイス」 (後書き)

前回に続いてジルさんでシメとは…。
オリジナル展開ですが、原作開始には近づいています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0840x/>

No.0 !

2012年1月11日03時49分発行